＜エントリーシート＞ ※事務局記入欄 No.： A－1	部門 研修成果活用部門 （平成29年第３回中堅教員研修）	学校名・氏名 鹿児島大学教育学部附附属中学校 教頭　久德　晋也
	活動名 今，求められる防災教育　～桜島の災害に備えた学びを通して～	

課題の設定：

これまでの安全管理や防災教育は，マニュアル一辺倒の側面もあった。しかし，昨今相次ぐ地震や豪雨災害は想定外のことが起きており従来のままでは十分ではない。避難訓練だけにとどまらず教科教育などにおいても，防災ナラティヴ（個別の物語）を生成して共有する学びを繰り返して生徒の創造性を育む「創造的な学び」を展開することが，震災級の災害に対峙する力につながるのではないかと考え，実践に至った。

方針・計画：

新しくより良い考えやモノをつくりだすために，一人一人が“能動性”や“独自性”を発揮し，仲間と協働しながら創造的に考える学びを「創造的な学び」と定義し実践する。中学１年理科においては，桜島の大噴火で起こり得る災害を考え，防災・減災の意識をもち学習に取り組ませることで，生徒に“能動性”を発揮させたい。また，単元全体を通して，桜島の本質を知るために，ＩＣＴを活用したりモデル実験を企画させたりすることで噴火の仕組みやマグマのねばりけ，大規模噴火の関係性を見いだせて，既存のカリキュラムとは異なる“独自性”をもたせた学びを展開したい。最終的には，一連の火山や防災に関する単元を通した学びを総括させ，防災・減災への意識を持続させたい。

活動内容：

『郷土の自然である桜島が大規模噴火を起こしたときに，どのような避難行動をとるべきか』という単元を貫く問いを設定し，以下の⑴～⑶の目的・内容で理科学習に取り組ませるように工夫・改善する。

⑴　能動性を発揮させる：オリエンテーションや噴火の仕組み（第３時），単元のまとめ（第７時）で，桜島の大規模噴火を想定し，避難行動を考える。

⑵　独自性を発揮させる：噴火の仕組み（第３時）や火成岩のでき方（第６時）でモデル実験を企画して実際に行い，その結果を基に話合い活動を進める。

⑶　防災・減災意識の持続：火山についての学習内容の整理・体系化を図り，実際の避難行動を考える。

活動の成果：

⑴　能動性を発揮させることについて（写真１，図２参照）

生徒の感想 大噴火のシミュレーション映像を見て，噴火の脅威がすぐ身近にあることを知り，いつ災害が起きてもおかしくないと感じた。/防災について考えながら学習を進めていくことができた。

H30学習状況調査「理科の勉強は大切である」80.0%（全国 70.9%）「理科の授業で学習したことは，将来，社会に出たときに役に立つと思いますか」77.0%（全国 56.1%）と全国に比べて高い比率になっている。

⑵　独自性を発揮させることについて

①　モデル実験・教具の開発（写真３，４参照）

モデル実験１「炭酸水を用いてマグマの発泡と噴火の関係を調べる実験」

モデル実験２「歯科用印象剤を用いてマグマのねばりけと噴火の関係を調べる実験」

②　生徒の実験企画力の向上（図５参照）

生徒の感想 炭酸飲料を振ったときにふたが飛んであふれ出た経験から，噴火をイメージできた/想像しにくいマグマの動きを目に見える形で表すことができ，関心を深めることができた

⑶　防災・減災意識の持続について（図６参照）

・　単元で学んだ内容を「ナレッジシート」としてまとめることで，防災意識が理科学習を通じてどのように変容したのかを見取ることができた。避難行動としては，「避難場所『〇〇』」，「なるべく歩く」，「噴石がふってきたら丈夫な建物に逃げる」など実際の噴火を想定して書いていた生徒が多く見られた。

生徒の感想 家で「防災ノート」（鹿児島市教育委作成）を見て，家族で防災について話し合うことができた/噴火は火山灰が降るだけのものという認識でしたが，火山の仕組みを知って桜島も実際はとても危険であるという意識をもつことができた。

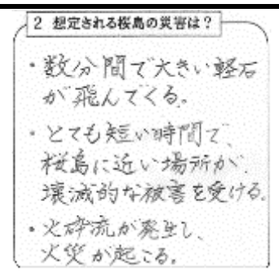
アピールポイント（アイディアや工夫）：

①　能動性や独自性を意識した「創造的な学び」を展開することで，災害に対峙する力を育むことにつながる。

②　従来の教科教育に防災教育をジョイントさせることで，より教科横断的な学びを実践できる。

③　マニュアルに頼った防災教育からより実践的でやりがいのある「防災教育」への変容を目指す。

【写真１　姉妹都市であるナポリ市のベスビオ（左）と鹿児島市桜島（右）を比較した後，ベスビオ火山のシミュレーション動画を視聴する】

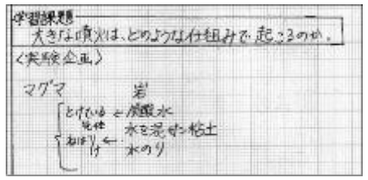


【図２　生徒が想定した桜島の災害】

モデル実験１「炭酸水を用いてマグマの発泡と噴火の関係を調べる実験」（写真３）やモデル実験２「歯科用印象剤を用いてマグマのねばりけと噴火の関係を調べる実験」（写真４）を，火山の噴火のどの部分を再現しているのか示すことで，モデル実験を火山の噴火に置き換えやすくしている。

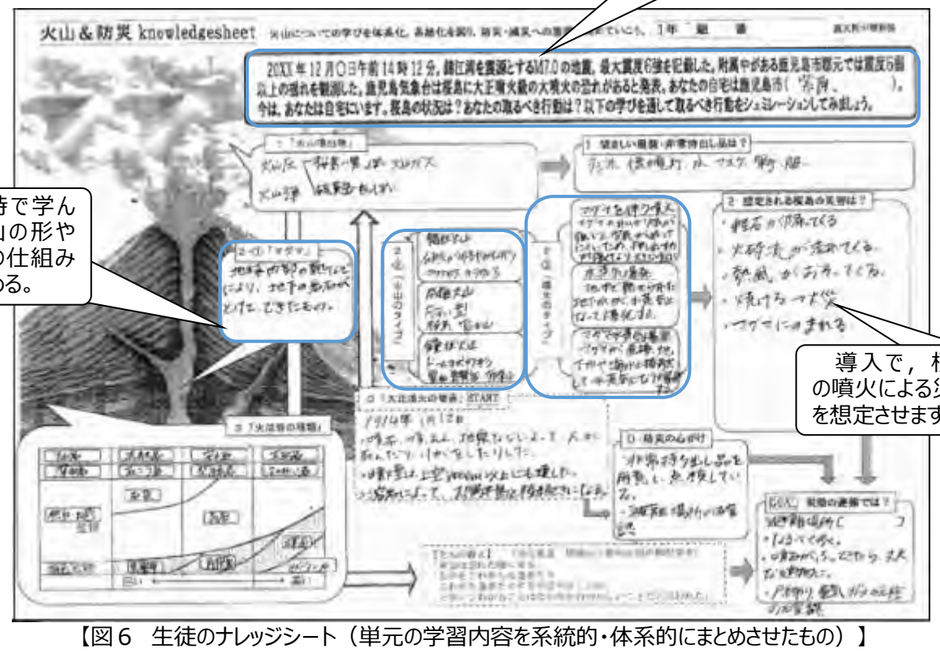
【写真３　火山内部の図とコック付きシリンジ】

【写真４　ねばりけが弱いマグマモデル（左）とねばりけが強いマグマモデル（右）の比較】



【図５　生徒が考えたマグマの「たとえ」（ノートの一部）】

単元を貫く課題である，『郷土の自然である桜島が大規模噴火を起こしたときに，どのような避難行動をとるべきか』を念頭に学習を進めていきます。



【図６　生徒のナレッジシート（単元の学習内容を系統的・体系的にまとめさせたもの）】

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、上下左右の余白は変更しないでください。
※各項目の枠の幅は変更可能ですが、必ず A３用紙片面におさまるように作成してください。
※画像、写真、イラスト等は、用紙の中におさまるようにし、ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式２】

研修成果の活用レポート/NITS 大賞エントリーシート

※研修成果の活用レポートは、NITS 大賞エントリーシートと同様式です。NITS 大賞に応募される方は、推薦者への提出とは別に、＜award@ml.nits.go.jp＞宛て、メールにてお送りください。なお、メール送信後、３日以上受領メールが届かない場合はご連絡ください。

※事務局記入欄

受理№：A-2

【学校名・氏名】 根室市立花咲小学校　　阿部　俊介

【修了研修名】　平成３０年　第３回　中堅教員研修

【応募部門】

研修成果活用

【活動名】　先生方も自己理解・他者理解　～「Hanasaki Times」発行～

解決すべき課題：※活動を行う前に、どんな課題設定をしましたか？

本校は職員数２６名（事務職員等含む）、児童数１９０名の中規模の学校である。職員の年齢構成は２０～３０代が半数以上を占め、ベテランが少ない状況である。経験年数が少ない職員が多いため、日々の授業改善が緊要な課題である。また、日々の業務や授業準備に追われ、職員同士のコミュニケーションを図る余裕がないため、その改善を図ることも課題の一つである。

【課題①】
若手教員の授業改善

【課題②】
教員同士のコミュニケーション（自己理解・他者理解）

目標・方針：※課題を解決するためにどんな目標や計画、戦略や方針をたてましたか？

【目標①】 若手教員の授業改善
【方針①】 学習指導要領改訂など、昨今の教育改革について分かりやすくまとめ、メンターチーム研修等を通して、若手教員の意識改革と授業力向上をはかる。

【目標②】 教員同士のコミュニケーションを図る（自己理解と他者理解を進める）。
【方針②】 教員にインタビューを行い、その教員の教育観、夢、目標などを紙面におこし、職員全体に広める。職員間の垣根を低くして、コミュニケーションの場を広げていく。

活動内容：※何を行ったか、具体的に記載してください。

課題解決のため、以下の方法で教員が活用できる資料「Hanasaki Times」を発刊した。

【第１次：記事の内容・企画の決定、全体周知】
・記事の内容を以下のように設定した。
　特集１：学習指導要領改訂などの教育改革に係る内容。
　　各学級で行われている優れた実践を紹介。
　連載１：「花咲ベストメンバー」 職員へのインタビュー（教師として大切にしていること、一番嬉しかったこと、本校でやってみたいことなど、写真付きで掲載）。
　連載２：「おすすめの一冊」　（教育系の本や、育児書、ビジネス書など、是非職員に読んでもらいたい本を紹介するコーナー）
　コラム　：時事ネタや校外の研修等で話題になったことなどを掲載。（不定期）
・職員会議にて、「Hanasaki Times」を発行することを周知した。そこで、インタビューを行うこと、教室を回って写真を撮ることなどの了承を得た。

【第２次：取材・資料収集】
・特集１のテーマに関わる資料を収集した。
　資料：平成３０年度第３回中堅教員研修の資料
　　文部科学省 HP よりダウンロード　　など
・連載１「花咲ベストメンバー」の取材を行った。
　職員へのアンケートやインタビューによる記事。授業中の写真や、職員室での写真などを撮影。
・連載２「おすすめの１冊」の本を選定した。
　過去に読んだ本、職員のおすすめの本について情報収集。その中から、職員に紹介したい本を選定。
・コラムのネタを収集した。
　校外研修先での出来事。研修資料等からの抜粋。

【第３次：記事作成、割付】
・「表紙」：その月にあった出来事から、写真を選び表紙に採用した。
・「特集１」：資料をそのまま掲載するのではなく、分かりやすく噛み砕いて説明するようにする。本校の研究主題との関りを考慮に入れ、活用できるように工夫した。
・「連載１」：雑誌のグラビアを意識して割付を行った。”その職員の良さが伝わるように“という考えを大切にして記事を作成した。
・「連載２」：本の名前や著者だけではなく、本を探しやすいように ISBN なども記載した。また、その本を読むことのメリットや、読んだ後の感想を書くなど、おすすめの文章を添えた。
・「コラム」　：難しい言葉や専門用語を少なくし、「私」の一人称で書くことで、読み手に親近感を抱かせることを心がけた。

【第４次：印刷、発行】
・両面カラー、A４サイズ６ページを印刷、帳合し、職員へ配布。記事の内容を元に研修も行った。

※「Hanasaki Times」第１号

表紙

特集「主体的・対話的で深い学び」とは　「花咲ベストメンバー」「おすすめの一冊」

活動の成果：　※それによって、どんな成果が得られましたか？

１　特集「主体的・対話的で深い学び」「国語の授業の作り方」を活用して、一単位時間だけではなく、単元全体を見通した計画を重視するようになった。研修内容とリンクさせることで、研修も深まりを見せた。

２　「花咲ベストメンバー」の記事を元に、職員室内での会話のきっかけができた。また、普段あまり話さない職員と互いの教育観等について話をするようになった。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

１　教務から出される「プリント」ではなく、「雑誌」を意識したデザインと割付を行った。特に「花咲ベストメンバー」の紙面構成は雑誌のグラビアを意識した。インタビューに応じてくれた職員には少しグレードの高い紙に印刷しプレゼントした。
２　教員は日々の授業準備などに時間が割かれ、教材研究以外の教育に関わる研修をする時間がとりにくい。そこを少しでも解消できるように、分かりやすい解説になるよう心がけ、要所を捉えてもらうことを意識した。本校の教員が、少しでも子どもと向き合う時間が増えることができるよう、必要な情報を提供していくよう努力している。

【様式１】

<エントリーシート> ※事務局記入欄 No.：A－ 3	部門 平成 30 年第４回中堅教員研修	学校名・氏名 滋賀大学教育学部附属中学校　太田　聡
	活動名 カリキュラム・マネジメント 社会の変化に柔軟に対応する授業改善と職員研修(スクラップ&ビルドの軌跡)	

課題の設定：

団塊世代の教職員の退職や中堅職員の転任、若い世代の新規採用や異動が進む中、長年、学校現場で培われてきた暗黙知が伝達されにくくなっている課題がある。学校現場における問題解決のコツや経験は、表面的な知識の習得や表面的な理解によって解決できるものではない。一人ひとりの教職員自身が先輩教員から見よう・見まねで吸収し、日本の学校文化を支え継承してきた暗黙知の部分の共有も重要であるといえる。

しかし、今後の激動する社会を生き抜く生徒を育てようとする学校には、狭い視野に基づくノウハウの伝承だけでは不十分である。生徒をどう育てたいかを明確にした学校組織力の強化と目標の共有、つまり、校長を中心とした各教職員のリーダーシップの発揮、教職員・保護者・地域間のコミュニケーション力の向上、学校改善への課題共有が重要である。社会の変化に柔軟に対応する授業改善と職員研修の在り方に焦点を当てた。

方針・計画

総合学習 BIWAKO TIME の展開を軸として、カリキュラム・マネジメントを進める。学校教育目標とのつながり、各教科間・各学年間・各校種間等とのつながり等を意識した授業改善および、教科の枠を越えたカリキュラム・マネジメントに関する校内研究を実施する。研究成果を一般に広く公開する実践的な職員研修を通して、未解決課題や今後の社会の変化に柔軟に対応しようとする生徒の育成を、より効果的に促進できるであろう。

活動内容：

「探究的学習活動を通した，論理的・創造的な思考力の向上　－総合学習 BIWAKO TIME を幹に，カリキュラム・マネジメントによる学びを深める学習指導－」をテーマに校内研究を推進する。平成 29 年度に実施した学校アンケート・学校評議員会等を踏まえ、特に同一市内への研究成果の還元が、研究校として不十分な側面があるという課題が見られた。そこで本年度は、校長・副校長の命を受け、地域社会への本校の研究成果の還元を積極的に進めるとともに、地域の学校のリーダーとして今後活躍が期待される本校教職員の一人ひとりが、各教科の授業改善や本校のカリキュラム・マネジメントに主体的かつ実践的に関わる機会を設定する。

活動の成果：

年間 15 回の校内研究会を計画し、実施中である。とりわけ 9 月 1 日(土)に実施した研究協議会では、昨年度より進めていた、カリキュラム・マネジメントの成果を公開し、全国 18 都道府県から約 200 名の参会者の中、本校および今日の教育現場が有する諸課題や研究成果について議論した。さらに、今後の実施予定も含め６回の授業公開と校内研究会(研究協議会)の公開を通して、原則として全教職員が学校組織の各担当のリーダーおよびフォロワーとして活躍する機会(研修)を確保し、本校が提案する探究的学習活動の意義とカリキュラム・マネジメントとをつなぐ工夫について提案した。本校の全国学力・学習状況調査 B 問題の生徒の無解答率の低さが示すように、参会者からも「思考を働かせながら授業に臨む姿が見られた」という声が寄せられた。本校 35 年間の研究のあゆみと、現在・未来を共有するべく、全職員で実践事例を執筆し書籍化した。OB からも「今後とも、県下はもとより日本のリーダーとして頑張って欲しい」という励ましを受けた。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・校内研究でカリキュラム・マネジメントの検討を行う際や各教科で授業改善を行う際、日常的に思考ツール等の活用を推進し、全校体制で情報の見方や考え方に関する指導を、教科横断的に実施した。
・研究授業・校内研究会等を広く公開し、全教職員が本校に課せられたミッションに対する共通の課題意識を持ち、学校組織のリーダーおよびフォロワーとして、活躍する機会を確保できるよう実践した。
・中堅教員研修での他校との交流の際に、自校の強み・弱みとともに学校目標の具現化を行う局面で課題意識を持つ学校の多さが明らかになった。学校のミッションやビジョンの共有化を図る際や、全職員の意識を高め、個人の責任や役割の明確化を進める際に、中堅教員として職務の整理が求められていることが明確になった。
・本校 35 年間の研究成果と、現在の校内研究の姿を振り返り、実践事例を全職員で執筆し、書籍化した。

写真１　本年度のカリキュラム検討の様子(昨年度末)

「研究主任を中心としたカリキュラムのスクラップ＆ビルド」「成果物を掲示して改善点を意識化」

写真２ 第４回中堅教員研修「カリキュラム・マネジメント」･･･付箋を用いた SWOT 分析等による課題分析

「各校の実態から浮かび上がった課題分析成果物」「付箋を用いた分析結果の発表と本校課題の洗い出し」

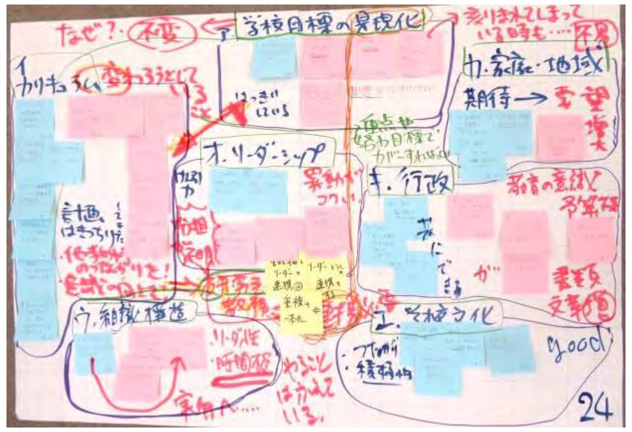


図１　全職員がカリキュラム・マネジメントを意識化

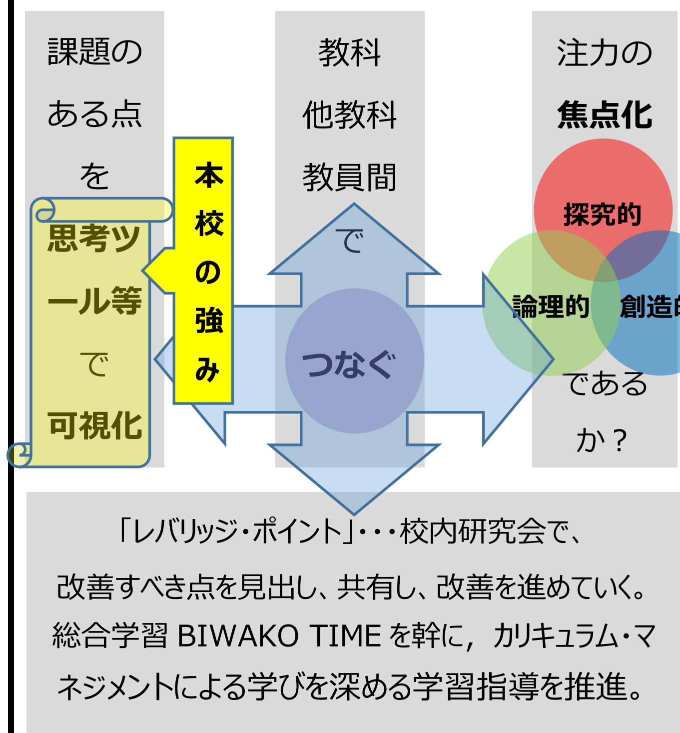


写真３　市研修の新規受入れ

(感想を職員にフィードバック)

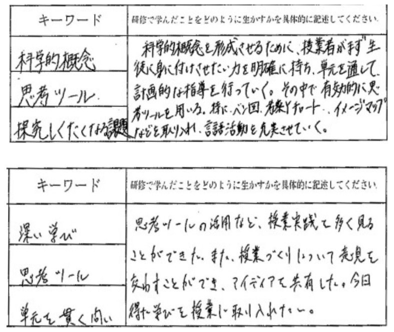


写真４　本校 35 年間の歩みと現在・未来をつなぐ書籍の出版

(2018 年９月)

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：Ａ－ ４	部門 平成３０年第２回副校長・教頭等研修	学校名・氏名 東海大学付属浦安高等学校　中出　光政
	活動名 新しい机上型防災訓練 被災後３０分・６時間・３日の訓練	

課題の設定：

今回研修を受講した中で、石巻市大川小学校を実例とした危機管理講習に強い影響を受けた。改めて、「我々は生徒一人一人の命を毎日預かっているのだ」と実感した。しかし、現在本校で行われている避難訓練は「被災直後の校庭への避難のみの訓練」であり、その脆弱さを解消するために防災訓練を立案した。

方針・計画：

防災訓練を、フェーズ１（被災３０分後）・フェーズ２（被災６時間後）・フェーズ３（被災３日後）に分割し、その時々に起こる負傷者対応や生徒の保護や学校再開についての課題を、組織で解決していく訓練を計画した。実施に際しては、学園のスケールメリットを生かし、大学本部の協力も仰いだ。

活動内容：

①2018 年 10 月 15 日（月）１３時～１５時に実施。生徒は下校。全教職員で実施。
②「震度７、浦安市直下型、負傷生徒１５名、校舎の一部倒壊、被災から３０分経過」の設定で訓練開始。「対策本部の立ち上げ作業」や「立ち入り禁止区域の設定」などを速やかに設定した。（３０分）
③続いて「公共交通手段の断絶、一部の断水と停電、地域住民も校内に避難している、被災から６時間後」の設定で訓練開始。「生徒の宿泊準備」や「保護者への生徒の引き渡し作業」を実施。（３０分）
④最後に「公共交通機関の一部断絶、断水と停電は復旧、校舎の安全確認終了、被災から３日後」の設定で訓練開始。「学校再開を３日後とし、緊急メールで保護者・生徒に連絡」などの対応を実施。（３０分）　　以上で訓練終了。

活動の成果：

被災３０分後・６時間後・３日後では、それぞれ対応するべき課題が違う。継続して起こる問題や新たに起こる問題があり,それが複合的に絡み合うため、教職員組織を分掌ごとにしっかり統括して、対策本部からの指示・命令系統をしっかり保つことの大切さが再確認できた。また、現在の防災マニュアルでしっかり対応できている部分と、そうでない部分を認識することができたので、更に対応の精度を高めていきたいと感じることができた。また、学園本部や外部の方々にも訓練を公開し、意見交換できた点が有意義であった。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

①被災状況の想定を外部の担当者にお願いすることによって、想定外の事態に対応する訓練ができる。
②情報を精査し、「学校が判断する」という姿勢を貫くことが、大川小学校での悲劇を繰り返さないこととなる。
③防災の対策班を分掌ごとに分けたので、訓練後も分掌会議において防災訓練の課題解決を継続検討することができた。また、情報の可視化を意識したホワイトボードの使用が高い評価を受けた。
④全国の小中高校で、「防災訓練の実施日は知らせるが、時間は一部の管理職以外には教員にも生徒にも知らせずに実施する」、「校庭への避難訓練だけでなく、被災３０分後・６時間後・３日後を想定した訓練を実施する」ということをできるところから実施し、生徒の命をしっかり守る学校づくりをしていってほしい。

＜写真、図表添付欄＞

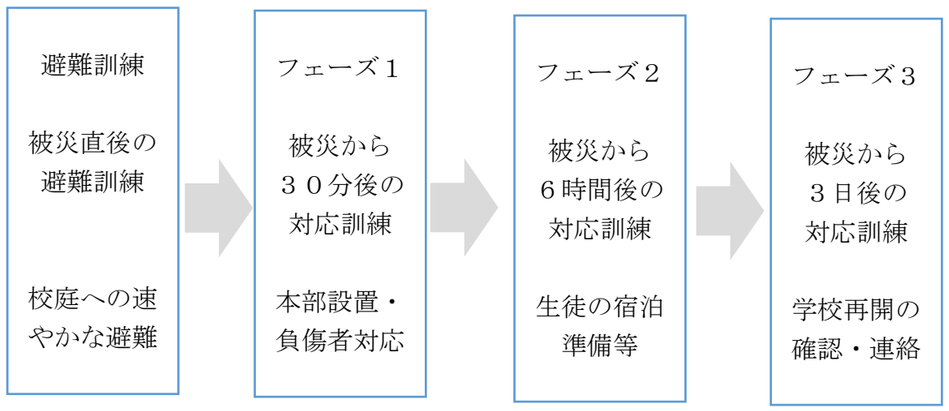
写真：校庭への避難（従来の訓練）

写真：フェーズ１（対策本部）

写真：フェーズ２（情報の可視化）

写真：フェーズ３（組織で学校再開へ）

図１



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞	部門　研修成果活用　部門 平成 28 年度 第４回中堅教員研修	学校名・氏名 山口県立岩国工業高等学校 穂森　克彦
※ 事 務 局 記 入 欄 No.：　A － 5	活動名 コミュニティ・スクール実践 みんな先生　町のみんなが繋がっている	

課題の設定：

①実業高校である本校は、ものづくりに関するある程度の技能・技術を習得した教員がいる。
②学校外での活動は少なく、コミュニティ・スクールを実践するにあたり、外部との接触が必要と考えている。
③地域のニーズに応える学校づくりが必要。学校運営協議会の発足、学校を核とした地域の創生。
　以上から、学校内の技能・技術を発信するため、4 つの学科が連携して活動する、「岩国工業高校４科連携・ものづくりによる地域貢献」を平成 29 年４月から始めた。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

　岩国工業高校 4 学科（機械科・電気科・都市工学科・システム化学科）で学んだ技術・技能を生かしものづくりで岩国市を PR しようと教員団で計画を発案。名勝「錦帯橋」など観光資源を活用することを考え、PTA、岩国市役所・市民協働推進課に連絡する。岩国市の観光 PR などを手掛けられないか相談。高校生でもできるものづくりによる地域貢献が実践できるのではないかと考えた。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

　①名勝「錦帯橋」は全国的にも有名で知名度が高く岩国市の観光資源の一つである。他の観光施設にもあるフォトスポットに自撮り用のスタンドを設置すれば、全員が美しい景色をバックに写真撮影ができると考え、自撮りスタンドを製作し取り付けることを提案した。
　②玖珂地域に伝わる「玖珂縮織り」の技術の伝承と地域名産品の PR を行ってはどうか。と考え、機織り機を製作し、実演を行うことを提案した。
　③岩国レンコンが特産品として有名なので、収穫の労働力を軽減できる装置ができないか、特産品をもっと知ってもらうためにお菓子などの商品開発ができないかと考え、レンコンチップスを作ることを提案した。
　④JR 岩国駅の新築工事が行われており、新しい駅舎に岩国市の観光案内マップを設置してはどうかと考え、3D プリンターで立体的な建物を配置した観光案内マップを製作することを提案した。

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

　機織り機を製作し、観光案内所に展示していただくことで、玖珂縮の存在を知っていただく機会となった。また、玖珂縮の会による土・日曜日に実演教室を開催することになった。当初は生徒が実施する計画であったが、３年生を対象にしていたため卒業を迎えてしまったので、生徒による実演は出来ていない。
　２年目を迎え、社会福祉協議会の企画である「錦帯橋を車いすで渡るプロジェクト」への協力参加を決め、本年度の４科連携ものづくりによる地域貢献活動とした。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

・生徒主体で活動し、生徒の自己有用感、自主性が養われ、学校外の関係者と話をすることで、コミュニケーション能力が向上した。また、技能・技術の向上が実感できた。
・地元の特産品や技術を知ることができ、問題を一人で抱えず発信し共有することで、その生産者や技術者とも関係が持てたり、解決策を持っている人と繋げてくれたり、ネットワークの大切さを実感できた。

＜写真、図表添付欄＞　　生徒の岩国のイメージ

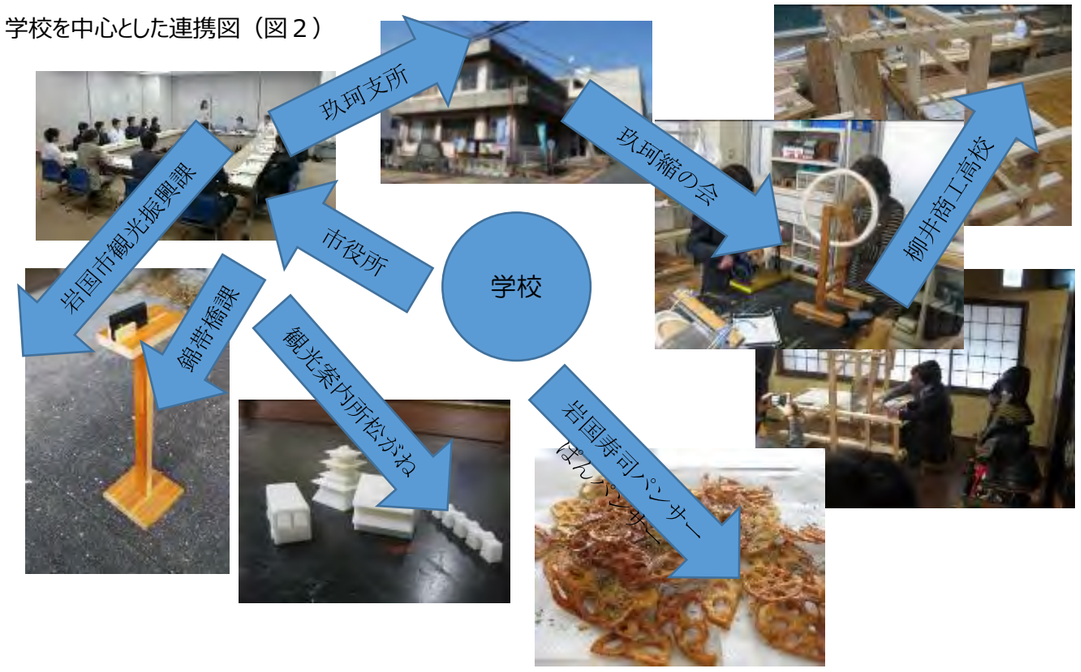
　岩国工業高校４科連携ものづくりによる地域貢献を行うにあたり、生徒の岩国市に対するイメージを挙げ、地域の活性化や身に付けた技術、技能を生かせることができる場面を考えた。（図１）

生徒が考える岩国市のイメージ（図１）

　図１のようなイメージから、自分たちに出来ること、やってみたいことを話し合いにより４つに絞る。
①錦帯橋のフォトスポットにスマホスタンドを設置したい。②玖珂縮をＰＲして有名にする。
③特産品の岩国レンコンの新商品を開発する。④観光案内マップを製作してＪＲ岩国駅や錦帯橋付近に設置したい。

　生徒のイメージを形にするために、「何処に」、「誰に」、「何を」聞いたらよいのか教員団で打ち合わせ、根回しを行う。
　生徒は、主体的に「何処に」、「誰に」、「何を」聞いたらよいのか話し合いを重ね、電話連絡を取る。

学校を中心とした連携図（図２）



　学校の活動に対して行政や企業はどのように関わってよいか分かっていない。また、教員も関わる方法を知らない。このような状況だったが、まずは「やってみよう」という精神で思いをぶつけてみた。行政や企業も同じ思いで関わり方が分からないだけで、何かしたいとは考えていたようだった。さらに、各担当者はいろいろなアドバイスや要求を生徒に分かりやすく伝えてくれたので、生徒もイメージしやすくいろいろなものづくりを実行することができた。
　平成３０年度は社会福祉協議会が行っている「錦帯橋を車いすで渡ろうプロジェクト」や「防災マップづくり」、「スマホスタンドづくり」を行っている。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※事務局記入欄 No.： A－ 6	部門 研修成果活用部門（平成 28 年度キャリア教育指導者養成研修）	学校名・氏名 神戸市立神港橘高等学校 高野剛彦
	活動名 地域協働型キャリア教育 地域資源を総動員した「人財」育成	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

- ３年生「通年型インターンシップ」を実現するには、地元企業・事業所・行政の支援が不可欠。
- 約半数が就職希望。就職先の確保には、大手だけでなく、地元の中小企業の協力が不可欠。
- 生徒の多くは地元企業・事業所に関する知識・理解に乏しい。地元に目を向けてもらうためにも、３年間を通じた系統的なキャリア教育プログラム（MIRAI 探究）で地域課題を取り上げる必要。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

- 通年型インターンシップは地元企業・事業所にとっても大きな負担。ご協力いただくには、日ごろの付き合いを通した信頼関係の醸成と、企業側・事業所側にとっても何らかのメリットがあるウィンウィン型の関係づくりが必要。低学年から地域に目を向けさせ、地域に密着した地域協働型課題解決学習が不可欠。
- １年生から実施している課題解決型道徳教育（モラルジレンマ学習）で討議した社会的ジレンマ課題を学校内や授業での学びに収斂させることなく、地域課題に実際に取り組むことで、学びの有効性や意義を再確認できるとともに、学習成果を実践するフィールドにもなる。
- 商業の専門科目での学びを商品開発やインターンシップなど実習を通して応用し、地域に還元する。（学年間・科目間の連環だけでなく、学校と地域との連携も含めたカリキュラム・マネジメントを実施。）

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

１年生（平成 28 年度）	① 神戸を知る（校内ゲストティーチャーによる講義＋外部講師による講演） ② 神戸ディスカバー（夏休み、神戸について自分で設定したテーマについて調査・研究し、レポートにまとめる。２学期の特別時間割でプレゼン作成、発表）
２年生（平成 29 年度）	③ 橘タウンミーティング（地域の産官学公から講師を招き、地域の現状と課題を知る） ④ 私の流儀（夏休みに職業人＝プロフェッショナルにインタビュー、やりがいや流儀を聞き出し、２分間の動画作品に仕上げる）
３年生（平成 30 年度）	⑤ 課題研究「橘プロジェクト」（地域課題を発見し、解決策を考え提案する） ⑥ インターンシップ（朝９時～夕方４時まで毎週木曜日に実施。実習先とコラボした課題研究を実践） ⑦ 若者議会（課題研究の発表会。地域の産官学公の代表者にも参加してもらい、コンペ形式でプレゼン）

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

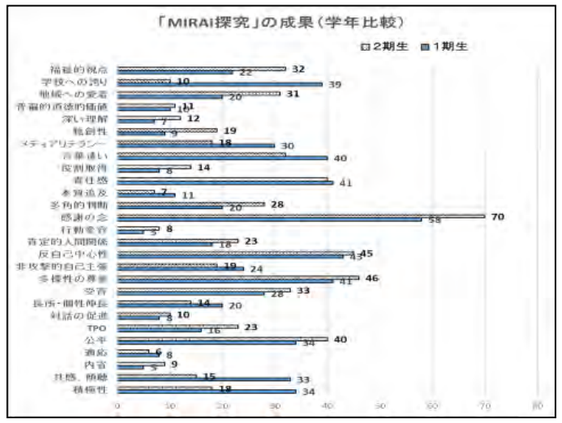
- 地元新聞に何度も取り上げられ（写真 1・2）地域の認知度が向上、入学志願者も増加（グラフ２）。
- インターンシップや探究活動の成果を用いて難関大学の AO 入試に合格、職員の理解が深まった。
- 年度末の総括評価（グラフ１）や客観的検査の結果、取組み成果が有意に見られた（グラフ３）。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

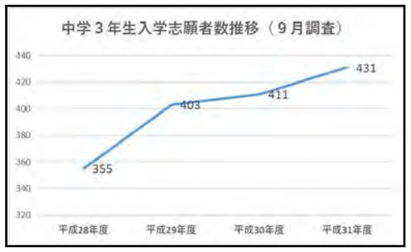
①地元兵庫区社会福祉協議会・兵庫区まちづくり課（官）、神姫バスツアーズや近畿日本ツーリスト（民）、CODE 海外災害援助市民センターや CS 神戸などの NGO・NPO（公）、神戸学院大学や流通科学大学・甲南大学（学）など地域の社会資源を結び付け、総動員してキャリア教育を展開。
②通年型インターンシップ、タウンミーティング、若者議会などは研修時に全国のキャリア教育先進校・実践校との交流・情報交換の中でヒントを得、研修終了後、本校でアレンジ・実現。タウンミーティングで出会い、インターンシップで深め、課題研究で解決を図るという、ウィンウィン型の系統的な流れを確立することができた。
③積上げ式のキャリア教育プログラムで学習成果は JAPAN e-Portfolio に蓄積。平成 33 年度からの高大接続改革にもいち早く対応。（総合型選抜、学校推薦型選抜での進路実現を図る商業高校のモデル。）

写真１

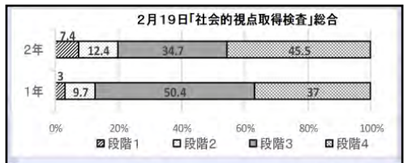
グラフ１



グラフ２



グラフ３

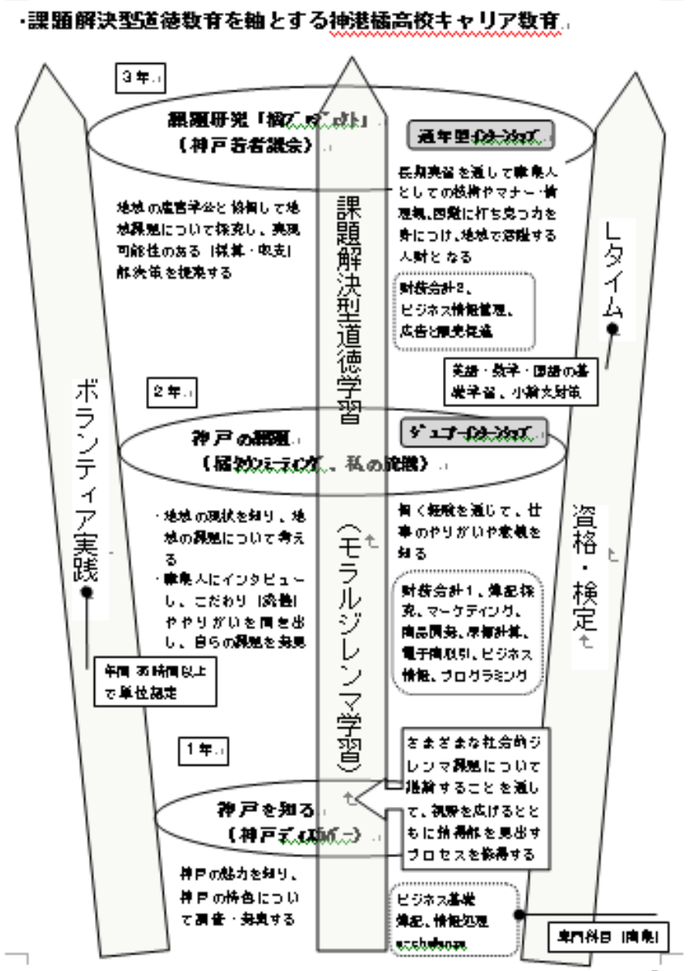


各段階	相対的出現率
段階1（主観的役割取得）	0%
段階2（自己省的役割取得）	22.3%
段階3（相互的役割取得）	68.1%
段階4（社会及び習慣のシステムの役割取得）	9.6%

写真２

通年型インターンシップの調印式に臨んだ神港橘高の生徒と受け入れ企業・団体の代表ら

図１



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

<エントリーシート> ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：Ａ － ７	部門 平成２９年度学校組織マネジメント指導者養成研修	学校名・氏名 熊本県立八代工業高等学校　増田　健治
	活動名 強みを活かす集団づくり（12 文字以内） 学校組織マネジメントの当事者になろう!!（16 文字以内） ※どのような課題をどのような手法で解決したのか、わかりやすく伝える案件名を記入してください。	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

（課題）年度初めに掲げられる教育目標についての認識が浅いことが第一に上げられる。そして、自校の「強み」と「弱み」について、個々の教員がそれぞれ漠然としたイメージとして持ってはいるものの、共通の言語として認識されておらず、せっかくの「強み」を打ち消し合い、「弱み」を増長しあっている面がある。さらには、学校組織マネジメントに関する研修の機会を得ていない職員については、その重要性についての理解が乏しい面がある。
（目標）自校の「強み」と「弱み」を共通の言語で認識し、すべての教職員が組織的な教育目標の実現に向けて「弱み」を補い合い、「強み」を高め合えるチームワークを育む。その上で、全ての教職員が学校組織マネジメントを担う当事者であることを再認識する。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

教育目標と自校の「強み」がどの程度リンクしているのか、また「弱み」がどの程度目標達成の阻害要因として存在しているかを、言語的かつ視覚的に共通認識することができれば、個々の教職員が組織の一員として前向きな役割を果たしやすくなるのではないか。さらには、学校組織マネジメントの意味や意義についての講義を行うことにより、個の努力と能力に頼りがちであった旧来の体制から、組織力を重視した教職員集団に変化していくことの意義とその必要性を見いだし始めるのではないかという仮説を立てた。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

自校の全教職員（定時制職員も含む）に対して、職員研修という形で取組んだ。まず、自校の教育目標を再認識すべく、関連するキーワードを各自付箋に思いつくままに書き出し、これを分析シート（広用紙）に整理しながら貼り付ける。次に、自校の「強み」と「弱み」について同様に書き出し、教育目標と関連付けながら分析シートに貼り付け、グループ内で協議分析を行う。最後に、グループ毎に得られた分析結果を発表あった。まとめとして、学校組織マネジメントについての基本的な講義を行い、活動内容を研修の目的目標と重ね合わせた。

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

グラフ１は、研修実施後にとったアンケート結果である。Q1～Ｑ３について、およそ ９ 割の教職員から肯定的な回答が得られた。Q4 については、15%の職員が「とても高まった」と答え、「まあまあ高まった」と答えた割合も70%に及んだ。「弱み」はいくらでも出てくるが、それを改善するには？を考えるいい機会だった。初めての内容で興味が湧いた。（「強み」を活かす雰囲気が高まれば）仕事が楽しくなるなどといった肯定的な声が聞かれた。建前ばかりで本質が見えないという厳しい声もあったが、全体的には、「強みを活かす」というプラス思考傾向が高い集団への期待は大きいと感じた。また、Q4,5 に関しては補足的に調査したものだが、比較的自身のスキルアップに対しても意欲関心が高い集団であることが分かった。今後の取組に活用していきたい。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

〇教職員支援機構での研修成果を踏まえた上で、学校長や教頭と研修の狙いと目標を共有し、指導助言を仰ぎながら企画した。〇研修後、理屈ではなく気持ちの上で、前向きな姿勢になっていただけることを最大の狙いとして研修内容を構築した。〇気の合う仲間や意識の高い職員を巻き込み、事前の準備やグループ分け等の業務を分担した。〇可能な限り難しい文言は控えた。使用したとしても分かりやすい解釈を心がけた。

1　研修プレゼン資料（一部）

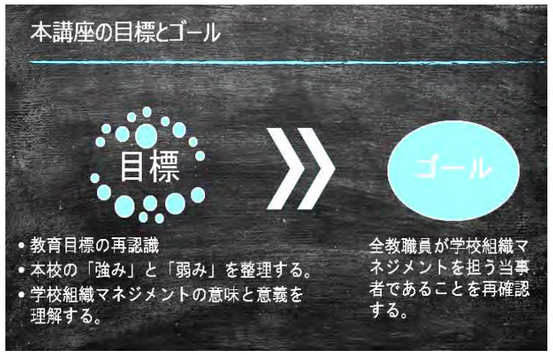


図１　本研修の目標とゴール

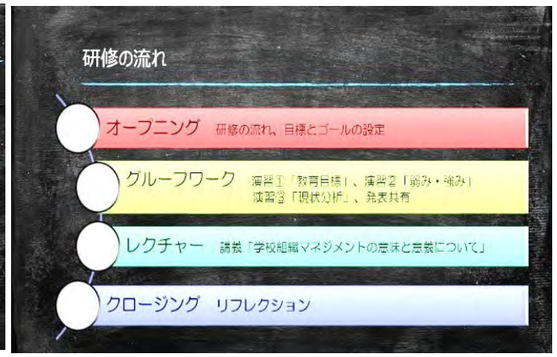


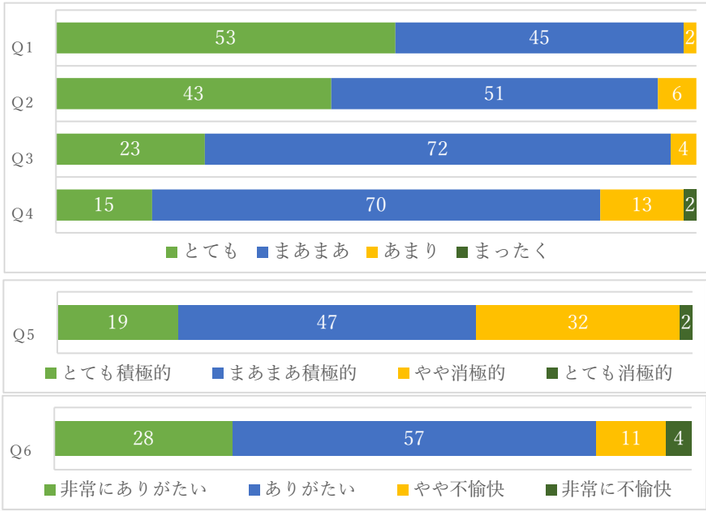
図２　研修の流れ

2　研修の様子

参加者は管理職と全日制、定時制の職員合せておよそ 100 名。どういった雰囲気になるか不安だったが、近年ワークショップ形式の研修の機会も多くなっており、和気藹々と円滑に進行することができた。本校に赴任して８年目になるが、学校組織マネジメントに関する研修は初めてだと記憶している。

3　研修後のアンケート結果

Q1 本校の教育目標や重点的取組について、再確認する機会になりましたか？
Q2 本校の「強み」や「弱み」について認識する機会となりましたか？
Q3 学校組織マネジメントの意味や意義について、理解できましたか？
Q4 学校組織マネジメントや学校改革に取組む意欲は高まりましたか？
Q5 自分の教育的スキルやノウハウ（失敗を含む）を他の先生と共有することに対して積極的ですか？
Q6 自分の教育的手法に対して、他者から指摘を受けることについてどう感じますか？



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：A － 8	部門 研修成果活用部門 （平成 30 年度カリキュラム・マネジメント指導者養成研修	学校名・氏名 大分県教育庁義務教育課　後藤竜太
	活動名 各学校におけるカリマネの実現 ―評価手法の活用を踏まえて―	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

学校の教育目標の達成に向けた具体的な取組を全教職員で推進する方途を見出すことができる。
・県内の小中学校の教務主任を対象に、学校の教育目標の達成に向けた具体的な取組や方途について、「評価から始めるカリキュラム・マネジメント」の体験を通して見出した自校のよさや課題の共有と改善策及び体験した手法を学校評価と関連付けて実施することを目的とした。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

・評価手法を体験し、明らかになった自校のよさについての取り組み方を共有したり、課題についてアドバイスし合ったりして評価手法のよさを実感する。
・評価手法を自校の学校評価と関連付けることによって、成果と課題を明確にすることが可能。さらに、その結果について全教職員で協議し、その解決のための具体案を立案することにつながる。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

・評価手法（SBCDE）を体験する。
・体験して明らかになった自校のよさを共有し、課題についてのアドバイスを交流する。
・カリキュラム・マネジメントを学校全体で進めている県内の小中学校による実践発表。

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

・４件法によるアンケート結果、99.２％の参加者が「参考になった」と回答。
・学校の教育目標の見直しのプロセス等について、県内の小中学校の実践発表を位置付けた。教務主任として今後どのようなことに取り組んでいけばよいのか、具体的な方途を見出すことができた。
・学校の教育目標を全員で話し合って決め、ベクトルをそろえることの重要性の理解。
・体験した調査方法（SBCDE）他の職員と取り組み、間主観的に考えることへの意欲の醸成。
・今回の協議を機会に、客観的で多様な観点での学校評価に取り組んでいきたいという機運の高まり。

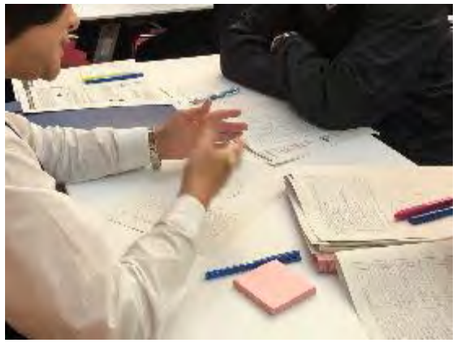
アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

① カリキュラム・マネジメント指導者養成研修で実際に作成した成果物の画像でイメージを持たせた。
② 評価手法の具体的な取り組み方や、自校での活用方法について理解させることができた。
③ 学校評価の項目の見直しやカテゴライズする必要性に気付かせることができた。
④ カリキュラム・マネジメントを全教職員で行うことのイメージを持たせることができた。
⑤ 実践発表により、今後取り組む方向性を見出すことができた。

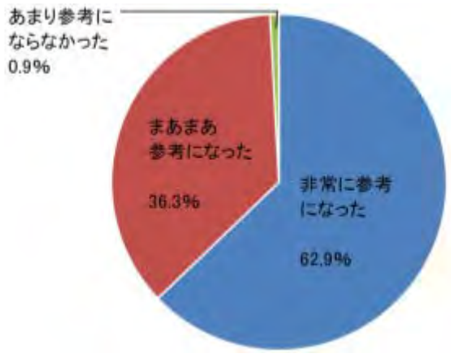
＜写真、図表添付欄＞

【写真１】評価手法の体験

【写真２】評価結果の共有と交流



【参加者の感想等】



【参加者の感想等（一部）】

○演習をした他地域の方との交流により、学習が深まり、自校の見直しもできた。今後に生かしたい。
○評価結果をレーダーチャートに反映することで、本校の課題が見えてきた。今後どう授業や研究等について取り組んでいけばよいのか参考になった。
○SBCDE という手法により、自校の教育活動を見直すことにつながった。学校に持ち帰り、全教職員で取り組んでみたい。

【今後の取組】

H29
・総則、総合的な学習の時間、道徳についての新教育課程説明

H30
・評価手法の体験及びカリキュラム・マネジメントに係る各学校の取組について協議
・カリキュラム・マネジメントについての実践発表（小中）
・特別活動についての説明

H31

【各学校】
各学校の実態に応じたカリキュラム・マネジメントの実践

【協議会】
①各学校のカリキュラム・マネジメントに係る取組及び成果・課題をまとめ、協議
②今後求められるカリキュラム・マネジメントや教務主任等の役割について、大学教授による講義

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：Ａ－ ９**	部門　１．研修成果活用　部門 平成 30 年度 学校安全指導者養成研修 （７月９日～１３日）	京都市教育委員会 体育健康教育室 別井　真一
	活動名 危機管理体制の強化 ～教職員緊急時対応実地訓練の普及～	

課題の設定：日々の学校現場で起こるケガや事故。未然防止策（リスクマネジメント）を講じるとともに，万が一事故が起きた時（緊急時）に迅速且つ適切な判断と行動がとれる力を身に付ける。

方針・計画：安全意識と安全スキルの向上を図り，一般化を目指す。研修会及び実地訓練の普及

学校安全指導者養成研修にて学校事故事例報告を聞かせてきたいただき，これまで以上に学校での危機管理体制や危機管理マニュアルについての必要性を認識した。学校現場では，絶えず何らかの事故（軽微なものから重篤なものまで）が起きている。教員は学習指導のスキルだけでなく，緊急時（事故や事件の発生時）に対応できるスキルも身に付けておかなくてはならない。事故の未然防止策（リスクマネジメント）を講じることと同時に，事故発生時にどのような役割があり，どのような動きをしなくてはならないのかを理解し実践できる力（クライシスマネジメント）を自分のものにするためには，繰り返し研鑽したり，訓練をしたりしなくてはならないと考える。そして，それらの訓練が各校の学校安全計画に反映されるよう働きかける。

活動内容：支部や各校における緊急時対応実地訓練（ロールプレイ型・机上訓練型）の実施

支部の安全主任研修会や各校での安全実地研修において，実際にロールプレイ型と机上訓練型の緊急時対応実地訓練を行う。事例はその学校や支部の要望に合わせ，アナフィラキシー（食物アレルギー）対応や，転落・衝突事故対応の緊急時を設定する。訓練を行うだけではなく，事後の振り返りや研鑽会を特に大切にする。また，実際に行ってみて気づいたことを集約し，今後行われる学校や支部での実地訓練に生かしていく。

活動の成果：訓練を行うことの有意性が確認できた。また，どこの学校でも行う必要性を実感

訓練を行うことによって，それぞれの緊急時にはどのような役割があり，適切な動きがどのようなものであるのかということは確認することができた。【（例）役割：本部・記録・現場対応・児童対応・救急車対応・保護者対応等//動き：人を集める・時系列でホワイトボードに記入する・児童の意識を確認する・救急車の進入路を確保する・第一報を丁寧に知らせる等】 訓練後の振り返りでは，自分たちに何が足りなかったのか，気づいていないことや新たに発見することが数多く挙げられ，次回の訓練に生かされることとなった。実地訓練に数年取り組んでいる養徳小学校では，実際に起きた遊具からの転落事故による救急搬送の際，教職員が適切且つ迅速な対応ができたということである。緊急事態は，いつ・どこの学校で起きるのかは分からない。自分の学校では起こらないという間違った認識をせず，適切且つ迅速に行動できるスキルを高めていく必要性を感じた。

アピールポイント（アイディアや工夫）：ロールプレイ型と机上訓練型の併用＋事故リスクマップの活用

実際に動きを伴うことで，伝達に関わる困難・現場での苦労・タイムラグ等の緊急時におけるトラブルに気づくことのできるロールプレイ型と，実際の動きは伴わないが，紙上で全体の流れ・それぞれの役割・必要なことや言葉かけが一目瞭然である机上訓練型を併用することで，現実に事故が発生した時の対応（実践場面）がスムーズになると考えられる。また，各校での事故の発生状況（発生頻度やケガ・事故のレベル）をまとめた事故リスクマップを活用し，自校での事故発生の特徴に合わせた訓練につなげることも可能である。このような訓練を行うことによって，万が一事故が発生した場合（未然防止策を徹底して行うことは大前提）にはどの学校のどの教職員が対応しても，ある一定レベルの対応（迅速かつ適切な）ができるようになると考える。

緊急時対応訓練（ロールプレイ型）の様子

◆現場に駆けつけ状況判断
◆何が優先されるのか迅速且つ適切な判断が必要
◆応援を呼ぶ方法は？二次被害を防ぐためには？
◆現場での困難やトラブルを明らかにする。

写真１

写真２

◆最優先は児童の命と安全確保
◆現場対応・児童対応，それぞれが役割と行動を理解した上で連携を図る。
◆救急救命講習で学んだ事や訓練してきたことを活用・実践する。

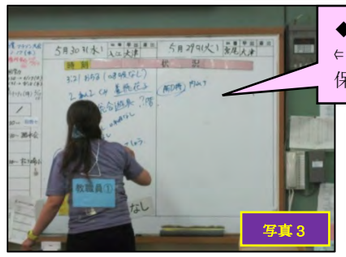


写真３

◆本部での動き【記録・救急車要請・保護者対応等】
⇦ 時系列でホワイトボードに記載（情報公開にも）
保護者への第一報は丁寧に，正確に対応すること⇒

●訓練後のふり返りでは，それぞれの役割での動きについて話し合い，改善点をマニュアルに反映させる。

写真４

緊急時対応訓練（机上訓練型）の様子

写真５

写真６

写真７

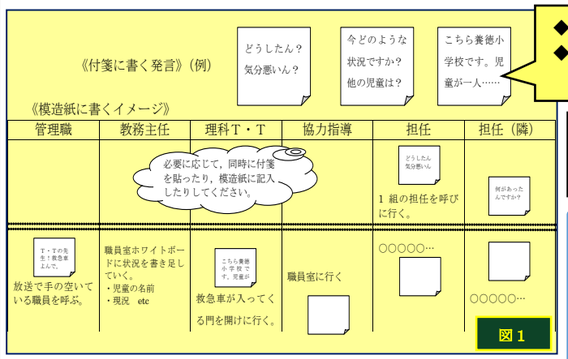


図１

◆机上訓練型では各校の必要性に応じて，事例や人数を決める。
◆付箋には，セリフ（その場でいうであろう言葉かけ）を記す。
⇦ 動きは紙上に直接記載し，時系列で進むように付箋を貼る。

●訓練後のふり返りで，役割ごとの動きの確認や，どのような言葉が使われているかを共有する。

◆学校管理下でのケガや事故を洗い出すための表を作成
◆自校でのケガ・事故発生の特徴から未然防止策を計画
◆自校に必要である事例から緊急時対応訓練に繋げる。

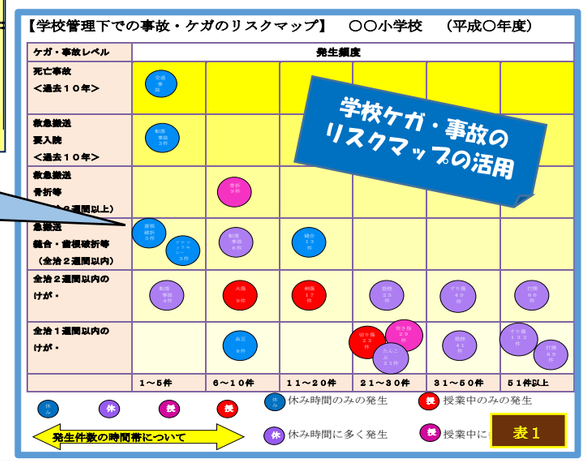


表１

★子どもの命を守りきるために
安心・安全な学校づくりをめざす！
★想定外を想定内にできるよう
様々な経験と訓練を大切にする！

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※事務局記入欄 No.：A - 10	部門 研修成果活用部門 平成 30 年第４回中堅教員研修	学校名・氏名 薩摩川内市立海陽中学校　倉元　賢一
	活動名 ICT 活用指導力校内研修 -APDCA サイクルとルーブリックの活用-	

課題の設定：

・ルーブリックを活用して，ICT 活用指導力を適切にアセスメントした上でマネジメントする。
・APDCA サイクルで自己の課題と成長を実感しながら研修を進められるように工夫する。
・ICT 機器別に活用事例を整理し実践しやすい環境を整備する。
・新しい活用法を考案したり発見した場合は説明カードに追記して共有するなど教師の同僚性を活用する。

方針・計画：

・ICT 活用指導力を的確にアセスメントするためには，質問紙の内容を具体的にすればよいのではないか。
・校内での研修プログラムを整理することで，研修がより活性化するのではないか。
・ルーブリックで自分の ICT 活用指導力を把握することで，研修を効率よく行えるのではないか。

活動内容：

・ICT 活用指導力をアセスメントしやすくなるように，質問紙に説明や事例を加える。（図１）（表１）
・UNESCO 2010 ICT TRANSFOMING EDUCATION を参考に ICT についての学習（主に機器活用），ICT を活用した指導（主に指導方法）について表のようなルーブリックを作成した。（表２，３）
・SAMR モデルによる ICT 活用事例を整理して，個人でも研修できるような参考資料を作成した。（表４）
・APDCA による校内研修プログラムを作成し，研修を効率よく行えるように整備した。（図２）

活動の成果：

・ルーブリックを活用して自身の ICT 活用指導力を的確にアセスメントすることで，次に何ができるようになれば良いかがわかり，自己の課題を明確にすることができた。
・ICT 機器の接続に難しさや不安を覚える教師が多いことが分かったため，接続の仕方の研修や常に接続しておける環境を整備して機器の活用を促進した。（表５）
・SAMR モデルによる ICT 活用事例を整理することで，教師の「こういうことがしてみたい」という希望からどのような機器を使えばよいかというアドバイスや実践をサポートすることができた。
・実際に ICT 機器を操作する研修機会をつくることで，教師の不安が解消して，授業で ICT を活用することができるようになることが分かった。
・学校組織の同僚性を有効に活用し，ICT 活用が得意な先生に聞きながら研修をしていくメンター方式の研修が有効であることがわかった。（表６）

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・ルーブリックを活用して，APDCA の流れで研修を行うと，自分のできる事できないことを整理することができて，研修が効率よくできるようになる。
・SAMR モデルによる ICT 活用事例を整理することで，「こんな授業をしてみたい」というニーズに対して教師が同僚性を活用して相互にアドバイスしながら研修を進めることができる。
・ICT 活用に関する個々の教員の課題に応じて学校ベースで行われる OJT(On the Job Training)やメンター方式の研修を進めるうえでも APDCA モデルは有効である。

図１　質問に具体例を加えた

「B 授業中に ICT を活用して指導する能力」
教員がコンピュータや提示装置などを活用して
資料や教材をわかりやすく提示すること

授業の中で、教員が資料を説明したり課題を提示したりする場面や児童生徒の知識定着や技能習熟を図る場面において、教員が ICT を活用する能力

B-1 学習に対する生徒の興味・関心を高めるために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。
具体的には？
教員がコンピュータや提示装置などを活用して、
資料などを拡大して提示することで、学習内容に対する児童生徒の興味や関心を高めて、主体的な学習が展開できるようにする
4 わりにできる　3 ややできる　2 あまりできない　1 ほとんどできない

B-2 生徒一人一人に課題意識をもたせるために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。
具体的には？
教員がコンピュータや提示装置などを活用して、
児童生徒に課題解決のイメージを持たせ、課題を明確につかませて、自ら学び自ら考える主体的な学習が展開できるようにする
4 わりにできる　3 ややできる　2 あまりできない　1 ほとんどできない

B-3 わかりやすく説明したり、生徒の思考や理解を深めたりするために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。
具体的には？
教員がコンピュータや提示装置などを活用することにより、
児童生徒に課題解決の糸口を与えることが可能であると考えられる。課題解決の場面において、教員が ICT を活用して、児童生徒の思考を深めたり理解を深めたりする
4 わりにできる　3 ややできる　2 あまりできない　1 ほとんどできない

B-4 学習内容をまとめる際に生徒の知識の定着を図るために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などをわかりやすく提示する。
具体的には？
教員がコンピュータや提示装置などを活用して、
資料や教材をわかりやすく提示することで，児童生徒の知識の定着や技能の習熟を図ることが可能となり、学習をまとめる場面において教員に必要な能力
4 わりにできる　3 ややできる　2 あまりできない　1 ほとんどできない

図２　PDCA に A を加え適切な実態把握へ

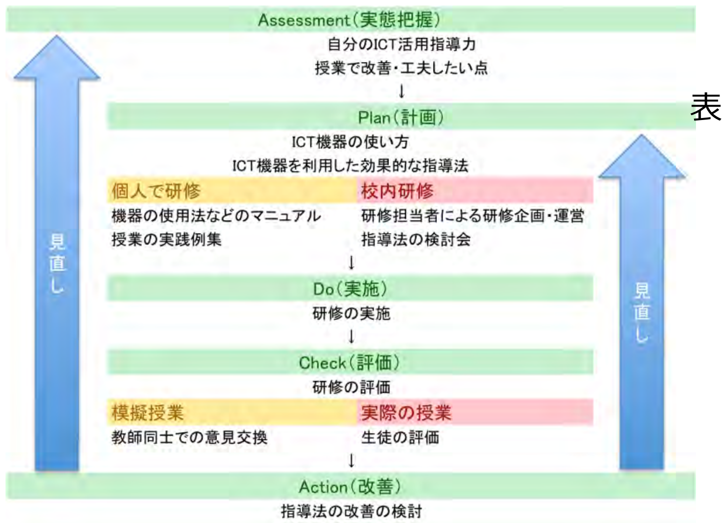


表１　活用例を教科ごとに例示しイメージしやすくした

B	授業中にICTを活用して指導する能力	
B-1	学習に対する生徒の興味・関心を高めるために，コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。	
B-1-01	生徒にインターネット上にある豊富な作品や事例を紹介して学習に対する興味・関心を持たせる。	共通
B-1-02	生徒にインターネット上にある最新の情報や最先端の技術を紹介して学習に対する関心を高めさせる。	共通
B-1-03	生徒に現実感のある仮想映像やシミュレーションを提示して学習への興味を持たせる。	共通
B-1-04	学習活動のイメージを持たせるために動画やアニメーションなどを短時間提示する。	共通
B-1-05	体験することの難しい状況をシミュレーションソフトで体験させて学習に対する関心を持たせる。	共通
B-1-06	インターネット上でライブカメラによる映像を配信しているサイトを生徒に見せて学習に対する興味を持たせる。	共通
B-1-07	まとまった文章を書く指導において，生徒のイメージを広げたり書く意欲を高めたりするために音声教材を効果的に活用する。	国語
B-1-08	古典や文学教材を扱う授業の導入段階などにおいてインターネットなどを活用して様々な作品と出会わせ，興味・関心を高める。	国語
B-1-09	歴史的分野の学習で，地域の史跡や文化財への関心を高めるために，公共機関や博物館，郷土資料館などのWebサイトの情報をプロジェクタで提示する。	社会
B-1-10	南鳥島の地図や映像をプロジェクタで拡大して提示し，島の景観の変化に関心をもたせる。	社会
B-1-11	動画コンテンツをプロジェクタで提示して，和算や地域の数学的教材などへの興味・関心を高める。	数学
B-1-12	正負の数の加減の学習において，数量が数直線上で変化する様子をアニメーションで提示して生徒の興味・関心を高める。	数学
B-1-13	火成岩の学習で，キラウェアなど様々な火山の噴火と溶岩の動画を提示して，岩石の性質とでき方についての興味・関心を高める。	理科
B-1-14	実験・観察での器具の誤った操作や危険な操作のビデオクリップを提示し，安全な実験・観察への生徒の興味・関心を高める。	理科
B-1-15	速度や強弱を変えた曲を聴くことによって，速度や強弱の働き及びそれらによって生み出される楽曲の雰囲気や曲想の変化に興味をもたせる。	音楽
B-1-16	世界の音楽を紹介するWebページを視聴することで，日本の音楽及び世界の諸民族の音楽における楽器の音色や奏法と歌唱表現に興味・関心をもたせる。	音楽

表２

	S	A	B	C
ICTについての学習	ICT活用に精通	ICTをいつどう使うか理解	教科でICTをどう使うか学ぶ	ICTを知る
	トラブルが起こっても対処できる	自ら機器を接続し使用することができる	マニュアルを見たり、補助をもらいながら準備し使用することができる	機器の用途やできることを知っている
ICTを活用した指導	革新的でオープンな学習環境を創造し管理する	多様な指導方法で学習を促進する	従来の指導を拡張する	道具を使う
	機器の効果的な活用法を駆使し授業に生かすことができる	授業の中でICT機器を使用することができる	授業の中で活用してみたい場面がある	授業の中で使用することで効果があることを知っている

UNESCO 2010" ICT TRANSFORMING EDUCATION"を参考にルーブリックを作成

表３

（　　）月（　　）日	実物投影機	パソコン室	教室パソコン
ICTについての学習	S	S	S
	A	A	A
	B	B	B
	C	C	C
ICTを活用した指導	S	S	S
	A	A	A
	B	B	B
	C	C	C

表４　SAMR で分類

段階			活用事例	電子黒板	実物投影機	パソコン室	デジタルカメラ	DVDなどの録画再生機	タブレットPC
Transformation(変換)	再定義	Redefinition							
	変更	Modification	協働学習支援ソフトウェアを活用	○		○			○
			タブレットPCをで見ることで、自分が操作しているからこそ資料と積極的に向き合い、気づきが生まれた						○
			画像や動画を保存することにより、いつでも提示することができる	○		○	○	○	○
			タブレットPCに映し出し、グループ全員が視覚的に共有できることでグループ活動が進んだ						○
Enhancement(強化)	機能有効利用	Augmentation	共有したデータに書き込みをする	○		○			○
			個々のタブレットPCの画面を巡回表示						○
			写真や動画を取り込めるプレゼンソフトを使った	○					○
			地図アプリを使った	○		○			○
			指先で拡大・縮小						○
			三角形の頂点の位置の高さを変えずに動かしながら変形	○		○			○
			図形が動く	○		○			○
			作図ソフトウェアで図形を作成	○		○			○
			リアルタイムに書き込みながら説明	○	○				○
			2量が同時に動くコンテンツの提示	○					○
			タッチパネルを操作しながら説明	○					○
			自己のフォームを客観的に捉える	○		○	○		○
	代替利用	Substitute	電子黒板にデータを写す	○		○			○
			モデルを映像で確認	○		○			○
			電子黒板を使って説明	○		○			
			実物投影機によるノート提示	○	○	○			
			解説の根拠をデジタル教科書で説明	○		○			○
			自分のデータを提示して発表	○	○	○	○		○
			デジタルカメラで撮影してデータ化	○	○	○	○		○
			フラッシュカード	○	○	○	○		○
			具体物を動かしながら三角形の仲間わけを行う	○	○	○			○
			友達の考えに線を引く	○	○	○			○
			作品の見本の提示	○	○	○	○		○
			クリップ動画	○		○	○		○
			音とりのためにタブレットPCを用いた						○
			市販のDVD教材の視聴	○		○		○	
			大きく拡大提示	○	○	○	○		○

表５　研修の成果

B 授業中に ICT を活用して指導する能力		事前			事後			事前			事後		
		わりにできる	ややできる	合計	わりにできる	ややできる	合計	あまりできない	ほとんどできない	合計	あまりできない	ほとんどできない	合計
B-1	学習に対する生徒の興味・関心を高めるために、コンピュータや提示装置など を活用して資料などを効果的に提示する。	10.0%	60.0%	70.0%	20.0%	60.0%	80.0%	30.0%	0.0%	30.0%	20.0%	0.0%	20.0%
B-2	生徒一人一人に課題意識をもたせるために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。	10.0%	40.0%	50.0%	20.0%	50.0%	70.0%	50.0%	0.0%	50.0%	30.0%	0.0%	30.0%
B-3	わかりやすく説明したり、生徒の思考や理解を深めたりするために、コンピュ ータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。	10.0%	50.0%	60.0%	10.0%	70.0%	80.0%	40.0%	0.0%	40.0%	20.0%	0.0%	20.0%
B-4	学習内容をまとめる際に生徒の知識の定着を図るために、コンピュータや提示 装置などを活用して資料などをわかりやすく提示する。	10.0%	50.0%	60.0%	10.0%	60.0%	70.0%	40.0%	0.0%	40.0%	30.0%	0.0%	30.0%

表６　実際に ICT を使うことが次の研修のきっかけに

	2013ベネッセ	事前	事後
ICTを活用した授業事例などの授業案を知ることができたから	31%	33%	67%
どのような教材があるのかを知ることができたから	35%	22%	44%
実際にICTを活用した授業を見ることができたから	38%	22%	56%
実際にICT機器を操作する機会があったから	49%	44%	89%
授業計画の作成をICT支援員にサポートしてもらったか	25%	0%	22%
機器操作のサポートをICT支援員に行ってもらったから	45%	0%	22%
その授業でどのような力が身につくのかが明確に分かった	15%	0%	33%
学校で研究として進めていたから	13%	0%	33%
その他	9%	0%	0%
あてはまるものはない	8%	0%	0%

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

<エントリーシート> ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：A － 11	部門 研修成果活用部門 平成 30 年度体力向上マネジメント指導者養成研修	学校名・氏名 北海道札幌市立白楊小学校 教諭　菅野　順一
	活動名　「体力向上プロジェクト」 ～全職員で取り組む子どもの体力ＵＰ～	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

子どもの体力向上を目指し、平成 ２９年度より体力向上プロジェクトを立ち上げた。さらに、札幌市教育委員会から体力向上に関わる教諭の加配及び、体力向上に関わる研究開発事業研究校の指定を受けた。平成 30 年度は、「子どもの運動意欲と技能の向上」、「週に５日以上運動する子を全校の８０％以上にする」という目標を設定した。ただ、取組を進める中での課題としては、『一部の教職員だけの負担になっている』、『運動意欲の２極化』という２点が新たに生まれている。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

子どもの運動意欲の向上と運動時間の増加を図るために、体育の授業の充実と運動環境の整備に努める。さらに、運動意欲を持続させるために、取組の工夫、改善を繰り返し行う。研修で学んだことを活かし、年間カリキュラムを作成し、全教職員で今後も無理なく進めていける体制を構築する。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

①子どもが思わず体を動かしたくなる環境づくりと日常的に体を動かす場の設定（写真１）
②体育授業の充実に向けた教具の整備と校内研修（写真２）
・楽しい体育授業をどの教員でも実現できるよう、場づくりや技能に関する指導法を中心に研修会を行った。
・ＴＴ、専科指導を活用して、どの子も安心して運動に関わることができるように、運動が苦手な子への手立てなどを工夫した。
③全教員で継続して取り組むための組織づくり（表１）
・年間指導計画を改定することで、いつ、何をするのかがはっきりと見えるようにし、さらに行事や児童活動で取り組む内容とも関連付けた。
・体力向上プロジェクトを組織し、いつ、誰が、どのように、を明確にすることで、全職員の共通理解を図った。
④全校一斉の取組（写真３～５）
マットウィーク、跳び箱ウィーク、水泳、スキー、体力テスト(年２回)、委員会活動、ふれあい活動等全校で一斉に運動に取り組む活動を増やした。
⑤児童の実態調査と合わせたＰＤＣＡサイクル(年間２～４サイクル)の確立

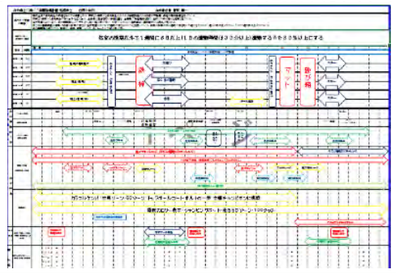
活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

・短時間で複数回の校内研修を充実させることで、どの教師でも運動が苦手な子への手立てを共有でき、系統性を重視した授業をすることができた。子どもの意欲・技能の向上だけではなく、教師の自信にもつながった。
・最新の調査では、「体育が好き」、「運動が好き」な児童が、ともに 29 年度、及び５月の調査を上回った。
・休み時間の子どもたちの運動量と共に外で遊ぶ児童数も増え、目標の数値を上回ることができた。
・全職員で同じ目的をもち、共通理解を図ることができた。それぞれの役割が明確になることで、取組を継続しつつ、改善、発案していく学校体制を作ることができた。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

〇楽しい体育の授業から『運動が好き』につなげるための教師のスキルＵＰ
〇ＴＤＬから学ぶ運動意欲を持続させる「思わず体を動かしたくなる」運動環境の継続的な工夫
〇全校統一の〇〇ウィーク、〇〇デーで意欲と技能ＵＰ
〇全教職員で共通理解を図るための組織づくりと保護者地域との一体化を目指す

☆体力向上・健康教育の年間指導計画と役割分担（表１）

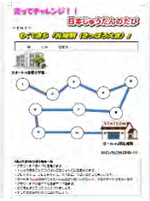


☆運動環境の整備と日常化に向けた取組（写真１）

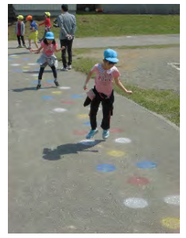
どこだれハクトピア

ジャンプジャンプタイム

リズム縄跳びに挑戦



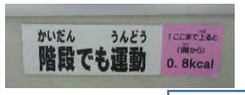
走ってチャレンジ



カラフルケンパ

竹馬ゾーン

アスレチックエントランス

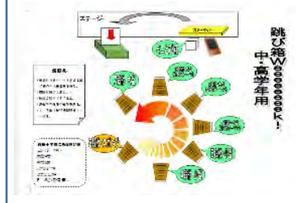


階段カロリー表示

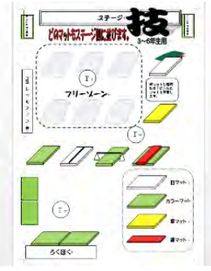
その他：５０ｍ走コース・ドッジボールコートの常設、ボルトの一歩・立ち幅跳びチャンピオン記録に挑戦ゾーン

☆授業の質を高めるためのミニ研修会（写真２）

☆マット・跳び箱ウィーク（写真３）



☆委員会とのタイアップ（写真４）



☆異学年グループでの登山遠足、長なわ大会（写真５）

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：A － 12	部門 **研修成果部門** **（平成３０年度副校長・教頭等研修）**	学校名・氏名 **茨城県白鳥学園那珂市立瓜連小学校　教頭　武居　幸雄**
	活動名 **「チーム学校」を具現化するための教頭の役割** **教職員が力を発揮できる環境整備**	

課題の設定：

不登校児童，特別な配慮を要する児童への支援，保護者対応等が増加するするとともに，児童の個別のニーズに応じた対応が求められるなど，学校が直面している課題が増加するとともに複雑化している。
そこで，担任を孤立化させることなく，教職員一人一人が自信とやりがいをもって学習指導や生徒指導にあたれるよう，「チーム学校」の具現化を目指すための教頭の役割を追求する。

方針・計画：

○ 教職員一人一人の課題対応力と子ども一人一人と向き合える教育活動環境を整備することにより，教職員の自信とやりがいをもって教育活動を実践することができるようにする。
・人材育成の充実→教員人事評価の活用，教頭だよりの発行，校内研修の充実　等
・業務環境の改善→職員会議の効率化，生徒指導・特別支援教育体制の充実，メンタルヘルス対策　等

活動内容：

・人材育成の充実については，主に校内研修の充実に取り組み，教職員からの要望の多かった教育相談研修と授業改善研修に取り組んだ。授業改善研修については，若手教員の育成に重点を置き授業参観シート等を活用して良かった点や改善点について指導助言を行った。写真１・２
・業務環境の改善については，主に生徒指導体制を構築するとともにケーススタディを実践することで「クライシスマネジメント」としてのチーム体制の機能の充実に努めた。図１

活動の成果：

・教員評価面談の中で自己申告書作成の模範モデルを示したり，組織目標の意識化を図ったりすることで各教職員がグランドデザインの数値目標の達成に向けての意識が高まった。（教職員アンケート図２より）
・教育相談研修の充実及び教頭だよりを通して最新の教育情報や教育技術を提供することで担任の課題への対応力や授業力が向上し，教職員の自信とやりがいの高揚がみられた。
・職員会議の効率化により，１時間以内で会議が終了するようになった。また，企画会から学年会への伝達を確実に行うことで，情報漏れが少なくなり起案内容や学校運営の共通理解・共通実践につながった。
・「クライシスマネジメント」としてのチーム体制の構築により，職員の動きが明確でスムーズに分担・分業が容易にできるようになった。ケーススタディを充実させることで教員の資質能力の向上につながり，学校現場の協働体制の構築に結びついた。担任を孤立化させることなくチーム学校として課題解決に当たれるようになった。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・ベテラン教員の自己申告書をモデル化し，目標の連鎖や達成可能な目標数値の設定を助言した。
・教頭だよりを適宜発行（年間８０号）し，最新の教育情報や教育技術等を紹介した。
・教頭が専門性を生かして校内研修の講師となり，教育相談研修や授業改善研修を行った。
・ケーススタディを行うことで「その時学校はどうするのか」についての教職員のリスクマネジメントに対する意識を高めた。
・教職員による教頭の評価や要望について，アンケート調査を行った。

写真１ ＜校内研修の充実：教育相談＞

グループ・エンカウンター

傾　聴　訓　練

写真２ ＜校内研修の充実：授業力向上＞

授業参観チェックシート

番号	項目	授業の観点	本時	よかった点	改善点
1	目標設定	学級の実態に応じた目標設定になっているか。			
		本時の学習内容や活動の流れが提示されているか。			
2	学習指導の在り方	実態に即した，学習形態になっているか。(ペア・グループ・全体)			
		精選された発問がされているか。			
		板書が構造化されているか。			
		教材・教具は一人一人の実態に合っているか。			
		興味・関心を生かした自主的・自発的な学習活動となっているか。			
		児童相互の主体的にかかわる場の設定がなされているか。			
		教員間の役割分担や連携ができているか。(ティーム・ティーチングの場合)			
3	評価の工夫	「振り返りの時間」が確保されているか。			
		「何が分かったか」について児童一人一人が自分の考えを書くことができているか。			
4	その他	指導案に必要な事項が分かりやすく表現されているか。			
		家「記の観点に「協議したい観点」がない場合，記入する。			

若手教員授業力向上研修

課題の提示１
【良かった点】
・課題提示を視覚化して児童の関心をひきつけた。
・挙手の仕方（黙って挙手）や答え方等の規律が定着している。
【改善点】
・注目させる指示がほしい。
・指示，説明の強弱をつけて話す。

図１ ＜生徒指導体制の充実＞

ケーススタディの実践

○ 生徒指導主事の補佐　○ 臨時生徒指導部会議
○ 短縮事例法
① **アセスメント**　② **個人→全体**
③ **担任の感想**　④ **指導・助言**

「誰が・誰に対して・何を・いつまでに」を明確に！

自校アセスメント表

ジェノグラム（家族構成及び家族関係を示した家系図）

児童の不適応行動・原因・現時点での対応

学　習　面	生　活　面
【不適応行動】	【不適応行動】
【原　因】	【原　因】
【対　応】	【対　応】

得意なこと・自信をもっていること

生徒にとっての援助資源（影響力のある人物）	その他の情報

今後の支援計画

だ れ が	な に を	いつまで

図２ ＜教職員による教頭の評価と要望＞

○　教頭便りで共通理解や教育情報を確認することができた。
○　職員室の雰囲気が明るく，居心地がよかった。
○　気がつくと教室にいて児童を支援してもらえて助かった。
○　職務への意識が変わった。

1	管理職として必要な知識（法的・事務処理等）をもち，教職員に適切な助言ができたか。
2	学校事故（児童の怪我等）等の不測の事態に対し，教職員へ迅速・適切な指示が出せたか。
3	児童及び教職員が安全で安心な学校生活及び教育活動が実践できるよう環境の整備に努めていたか。
4	生徒指導や保護者対応等，チーム学校として対応ができるよう努めていたか。
5	教職員との人間関係づくりに努め，職員室内を相談しやすい雰囲気にしていたか。
6	教育情報や教育技術について適切に情報提供したり，具体的な助言をしていたか。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：A - 13**	研修成果活用 平成 28 年度カリキュラム・マネジメント指導者養成研修	新潟県立教育センター　副参事　山碕　孝幸
	活動名 カリマネ推進の取組 新潟プラン２８による学校改善	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

県内各校の教育活動の質の向上を図るために、教育課程を中心に組織的かつ計画的に実施するためのカリキュラム・マネジメントの在り方を明らかにする。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

1. 先行事例や文献によりカリキュラム・マネジメントの推進の視点を策定する。
2. 協力校における実践により検証を行う。
3. 年度末に実践の成果を公表するとともに次年度に向けた改善を図る。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

- チームメンバーでカリキュラム・マネジメントを推進するための視点を検討する。
- 実践に向けたカリキュラム・マネジメント新潟スタイル『ＣＭＮ28』の提案資料を作成する。(図 1)
- 協力校における実践を支援し、その成果を分析する。※GPS-Academic 検査（ベネッセ）の活用
- 実践の成果と課題を基に評価を行い、改善を図る。

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

○ 実践協力校の取組から、次のことが分かった。管理職及び研究主任などのリーダーシップの発揮が職員の協働性や円滑な教育活動の推進につながる。
・教科横断的なつながり、校内外の多様な人とのつながりを意識して単元を構成することにより、教科横断的な見方・考え方を活用した深い学びの実現につながる。(図 2)
・研究主題や学校課題に向けた明確な目標設定が全職員の共通理解を図り、円滑に活動を推進する。（図 3）
・全職員によるワークショップ型研修を用いて、職員一人一人の考えを大切にしながら、具体的な方策をモデル化（視覚化）することが日々の活用につながる。
・校内外の評価の機会を複数回もつことで、小さなＰＤＣＡ（CAP-Do）サイクルを繰り返す工夫が大切である。
○ 客観的なデータを活用しながら、学校と生徒の実態を正確に把握し、目指す学校像を描くことができた。それを受け、「キャリアガイダンス」「よいた学(地域学習)」という２つのカリキュラム開発を実現できた。（図４）

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

① 学校運営の推進に向けた指標としての CMN28 の提案
実践協力校の相互の取組を比較する視点として有効であった。
② CMN 分類表による学校運営の可視化
年度始め実態把握（Check・Action）や計画（Plan）段階から実施に向けた視点を明らかにできた。
③ CMN 分類表のデータ蓄積
３校のデータを分類表に加え、理論の強化を図ることができた。次年度はチェックリストを策定する。

図１　カリキュラ・マネジメント新潟スタイル（CMN28）

図２　小学校の取組（生活科・総合的な学習の時間を中核にした取組：研究主任のリーダーシップ）

図３　中学校の取組（職員の参画意識・協働性の向上：校長のビジョンとリーダーシップ）

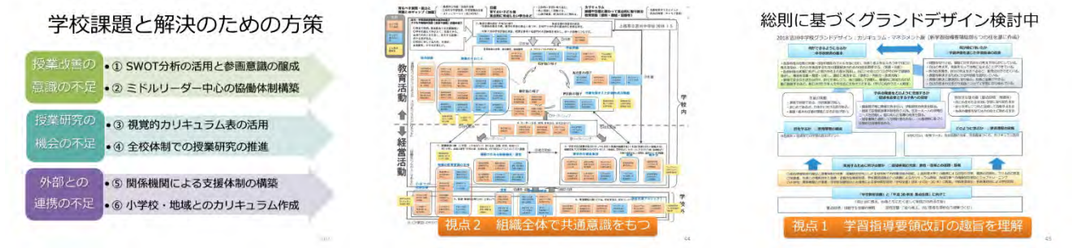
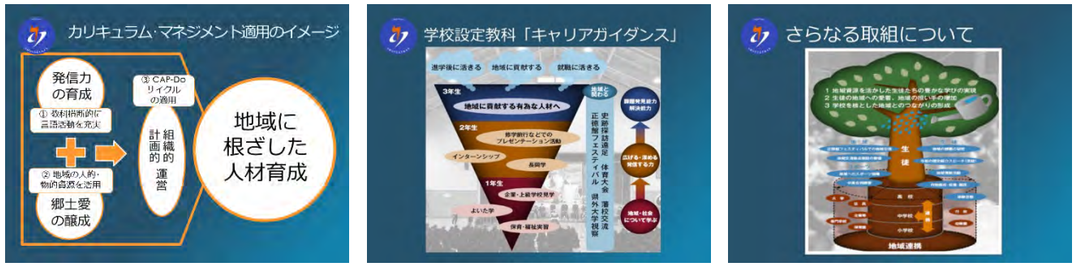


図４　高等学校の取組（言語活動と探究的な学習の推進：教務主任のリーダーシップ）



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※事務局記入欄 **No.：A－ 14**	部門　研修成果活用部門 平成 30 年度学校組織マネジメント指導者養成研修	学校名・氏名 埼玉県鳩山町立鳩山小学校 工藤泰輔
	活動名 組織・運営に関する課題 地域の教育力の活用と学校間の連携	

課題の設定：①鳩山町における幼保小中高大の連携の現状と課題を明らかにし、より一層連携を推進していくための教頭の役割を考察する。②地域の教育力を最大限に生かすため、教育委員会や地域社会と連携をする上での教頭の役割と課題を考察する。

方針・計画：（１）研究主題の検討、決定（２）各校及び教育委員会における実践事例や課題等の現状把握（３）現状から見えてきた課題に対する検討（４）レポート作成（５）研究の成果と課題のまとめ

活動内容：鳩山町は、埼玉県のほぼ中央に位置し、比企郡に属している。町東部の丘陵地帯では昭和４０年代後半に開発された新興住宅街「鳩山ニュータウン」があり、東京のベッドタウンとなっている。周辺には「東京電機大学埼玉鳩山キャンパス」、「山村学園短期大学」、「宇宙航空研究開発機構地球観測センター」、「日立製作所中央研究所（鳩山地区）」といった大規模な教育機関や研究機関の施設が集中している。人口は約 14000 人で少子高齢化が進んでいる。学校は、小学校３校、中学校１校、高校１校ある。このような現状を踏まえ、「鳩山町の特色を生かしながら教育活動を進める学校運営と教頭の役割」を考えるために、まず各小中学校、鳩山町教育委員会で SWOT 分析を行い、現状と課題を洗い出した。そして、鳩山町の目指す姿に近づけるために、「連携教育の推進」「地域の教育力の活用」を柱立てとして、その具体的な取組と教頭の関わりを戦略マップにして明確にしていった。

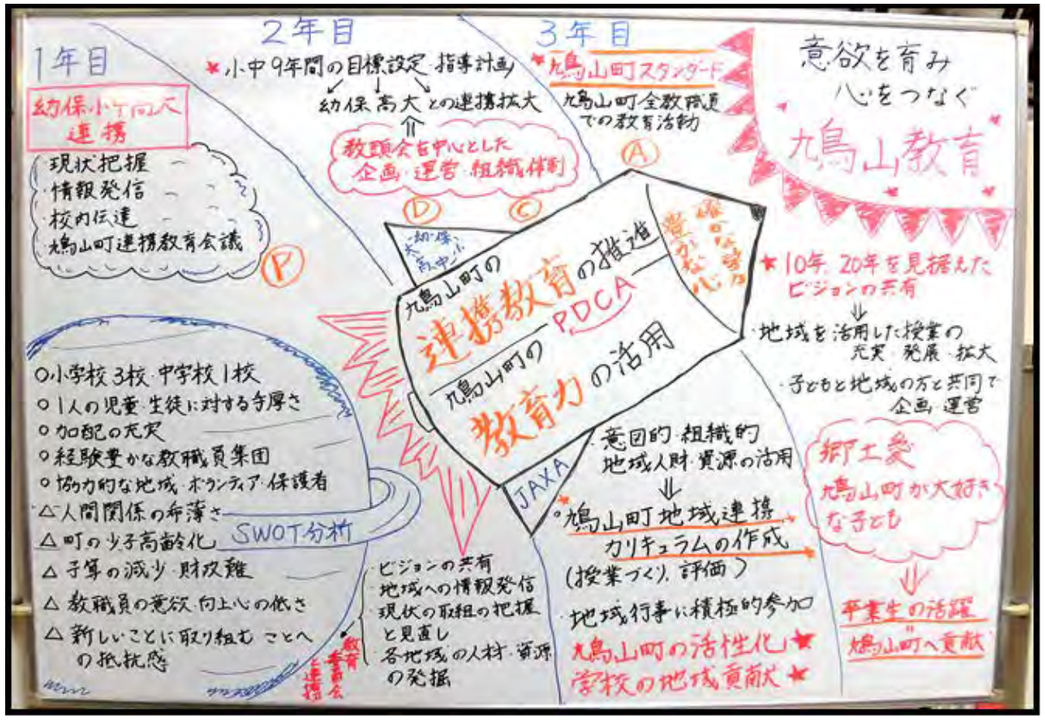
活動の成果：①各校教頭と教育委員会指導主事で毎月教頭会を開催し、そこで情報共有を行う。そして、情報共有したものを積極的に自校へ伝達していくことができた。②教頭会の中で児童生徒に特にどのような力を身に付けさせるべきか、そのために幼保小中高大がどのような連携ができ、どのような手立てを講じるのか話し合い、具体的な取組を実現させるために企画、組織作り、日程調整を行っていく計画を立てた。③義務教育９年間を見通して特にどのような力を身に付けさせるべきか小中学校職員が協議し、方針や手立てを共有するための合同研修会を企画・運営していく。④教育活動の補助や指導者として保護者や地域の方からボランティアを募り、学校応援団の一員として組織し、協働を通した体制を整備した。⑤地域の教育力を生かした活動を各学年の年間指導計画に位置づけ、組織的・系統的・継続的に取り組めるよう、教務主任、教科主任、学年主任を指導し、計画・運営させた。⑥教頭自ら積極的に地域に出たり地域の行事に参加したりして関係を築き、学校の様子を地域に積極的に発信した。

アピールポイント（アイディアや工夫）：鳩山町の教育をより一層推進していくための教頭の役割として、①各校の連携の現状を踏まえて今後は情報を共有し、小学校間での横の連携、幼・保・高・大との連携を発展、拡充させ、鳩山スタンダードを作成していくことができる。②各校各地域の特色を生かした取組をしているので、今後も継続的に各校の情報を共有し、人材・資源を発掘し、鳩山町全体の地域連携カリキュラムを作成していく。そして、町全体の教育資源・教育力を結集し、町内全教職員で心豊かに力強く生きていく鳩山の子を育てていくことができる。

◎鳩山町４校の SWOT 分析から見える現状と課題

	強み（Strength）	弱み（Weakness）
内部環境	・小規模校（少人数の学級）による一人一人の児童に対する手厚さ ・加配、さわやか相談員、SSWの充実 ・経験豊かな教職員集団 ・各教室にエアコンの導入 ・広い校庭、新しいプール ・充実したICT機器環境 ・学校全体が落ち着いた雰囲気	・年齢の高い教職員集団 ・教員数が少なく、組織的な取り組みの希薄さ ・校務分掌の偏り ・児童数が少なく、児童同士の関わりの固定化 ・施設、設備の老朽化 ・教員の意識、意欲の低さ ・新しいことに取り組むことへの抵抗感
	機会（Opportunity）	**脅威（Threat）**
外部環境	・協力的な保護者、地域ボランティア、学校応援団、PTA活動 ・警察、消防との連携と見守り体制 ・近隣の幼保小中高大、教育委員会との連携 ・35人学級を実現する町費常勤講師 ・町バスの活用 ・町からの各種補助金 ・伝統芸能への関わり	・通学に長時間かけて通う児童がいる ・少なからず不審者情報がある ・少子高齢化 ・空き家が多い ・駅から遠い ・新しい事業への受け入れに時間がかかる ・町の予算が減少

◎鳩山町の組織・運営に関する戦略マップ



<エントリーシート> ※事務局記入欄 No.：A－15	部門 平成 29 年カリキュラム・マネジメント指導者養成研修	学校名・氏名 知立市立知立小学校 橋本　宰
	活動名 ＰＤＣＡによる授業改革　～大規模校での課題克服をめざして～	

課題の設定：

・児童８６０人・教員５０人・全３０学級の大規模校において、研究主題における理論の共通理解や意思疎通には時間がかかる。勤務形態も多様化し、決定事項の浸透に関しては工夫が必要とされる。
・職員の数が多いため役割も分散し、研究推進は特定の教師に偏りがちである。また、達成度の把握も容易ではない。学校全体での授業改革の取り組みには、何より各教員の主体的な取り組みが必要となる。
・新学習指導要領で明示された「主体的・対話的な深い学び」に基づいた授業改革を職員の共通理解と主体性によって活性化させたい。そのために PDCA の明確化に努めることにする。

方針・計画：

・「授業改善に基づく研究主題の推進に際して、PDCA の明確化を核とする授業評価システムを構築すれば、一定の成果を自主的に発揮しようとする意識が高まり、授業改善の取り組みは活性化するであろう。」との仮説を立てて、活動内容を設定した。

活動内容：

・P 段階は主題の方針を４月の初旬で伝え、最低限行うべきことを明示して(図 1)、年度当初から実践に入るようにした。また、主題の組織を再編し(表 1)、全員が主題に何らかの形でかかわることができるようにした。さらには、PDCA を意識できるように図で示した（図 2）。
・D 段階は主題の一人一実践公開を設定し、主題の解釈を実践で示すように求めた。
・C 段階は全員が参加する主題全体会・協議会(写真 1)・夏季研修会(写真 2)のあり方を検討し直し、カリキュラム・マネジメントの観点から大学の先生にも評価を仰いだ(写真 3)。また、実践ごとに報告書を作成し（写真 4）、多くの成果と少々の課題を明示した。
・A 段階ではこれまでの課題を明確にし、次に行われる実践で意識して行うように求めた。

活動の成果：

１１月に教員に対して意識調査を行った。道半ばではあるが、「ハンドサインを活用しているか」といった質問では、７０％の担任が「できている」「どちらかといえばできている」と示すなど、少しずつ意識は高まっていると感じる。また、一人一実践報告書「主題より」を通じて他の教員の取り組みを知り、自身の実践に生かそうとしていることがアンケートから伺えた(図 3)。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・学校のカリキュラム・マネジメント力が問われている。しかし、学級担任に求める際にはより具体的に提示していかねばならない。そのために主題研究の流れを PDCA を提示して、全体的なイメージを捉えるようにした。
・教員が目の前の児童への指導の過程で、授業改善の意義や方針を理解し、その実践が教育目標の達成につながっていることを実感していくことが大切である。そのために、一人一人の授業実践からその都度成果と課題を明示して示すようにした。
・多くの教員が勤めている大規模校の実態をふまえ、研究組織の再構成や授業研究・研究協議会の方法をあらため、一人一人の主題研究への参加意識を高めて、研究実践への主体性を高めていくようにした。

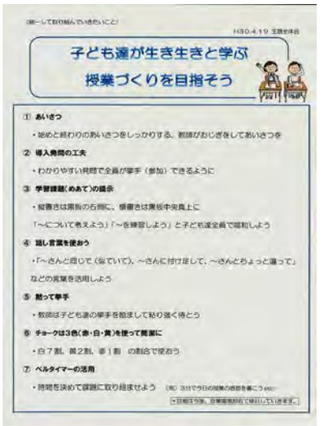


図１　学習ルールの確認

各部会の取り組み

①	授業部会（10 名）	子ども達の主体的な学びを目指して、指導案の検討、教科間のつながりを考える。
②	授業環境部会（10 名）	学習のきまりを考える。またそのきまりが守れているかチェックを行い、検証していく。知小アンケートの作成。
③	学習スキル部会（10 名）	子ども達の言語能力を高めるために、毎週火曜日のおあさごタイムを充実させ、コミュニケーション力を高める取り組みを推進する。
④	学級づくり部会（10 名）	スキル部会と連携し、おあさごタイムを充実させていく（エンカウンター）。また、道徳の別葉の作成を行う。

表１　研究主題四部会と各部会の取り組み

図２　主題研究を主とする PDCA

写真１　ワークショップ方式による主題協議会の様子

写真 2 単元名配列表の作成より教科のつながりを確認

写真３ 名古屋大学准教授久野弘幸先生からの評価

写真４　一人一実践の報告書

「主題より」

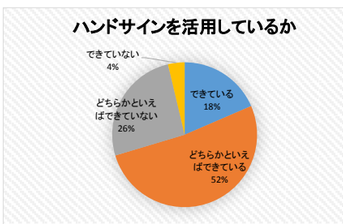


図３　職員へのアンケート

ハンドサインの活用について

・普段他の先生の授業を見に行くことができないので参考になる。
・常に意識付けとなり刺激を受ける。
・具体的にどういうことを意識して他の方がやっているか分かる。
・成果や課題がはっきりする。
・他の先生がどのように主題を捉えているか分かり勉強になる。

「主題より」の感想

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし，行間・文字間，上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図，写真，表，グラフなどは，（写真 1）（表 1）などと文中に記載し，右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上，貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は，変更可能です。
※いずれの場合も，必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：A － 16	部門 平成 30 年度 第４回中堅教員研修	学校名・氏名 鹿児島県鹿児島市立吉野中学校 教諭　大重　嘉孝
	活動名 効率的で安全な部活動運営～業務改善とリスクマネジメントから～	

課題の設定：

文科省の「学校における働き方改革に係る緊急対策」（以下,緊急対策）やスポーツ庁の「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」（同,ガイドライン）をもとに，視点Ⅰ「業務改善の一環として部活動をどのように効率的に運営するか」を設定した。また，リスクは不可避的に存在することを踏まえつつ，安全性を確保しながら健全な成長を支えるリスクマネジメントの考えを取り入れた視点Ⅱ「部活動におけるリスクマネジメントをどのように実行すべきか」を設定し，この２つの視点から活動に取り組んだ。

方針・計画：

部活動は学校教育の一環としての教育的意義が大きい一方で，適切な休養を伴わない過度な活動は，スポーツ障害の増加やバランスのとれた心身の成長の阻害，教員の業務負担増等にもつながる。部活動の在り方に関して速やかに見直しを行い，適正化を図ることが重要な課題であると考え，顧問を務める卓球部（部員数 53 人 顧問数 4 人）において，業務改善とリスクマネジメントの視点から実践や改善を推進した。その際，緊急対策やガイドライン，本校の部活動運営方針等に則った活動内容になるようにした。

活動内容：

視点Ⅰ（業務改善）に基づき，次の４点の活動を行った。　※各項目の右記はその具体的内容
(1) 卓球部運営方針の作成：運営方針を作成（明文化）することによる業務の明確化（資料 1）
(2) 顧問等の役割分担の決定：顧問等の具体的な業務範囲（指導・支援内容）の策定　（資料 2）
(3) 練習計画表作成に係る協議：ガイドラインに基づき顧問で協議・調整した練習計画表（資料 3）
(4) 部活動便りの発行：活動内容の充実や「開かれた部活動」等を目的とした部活動便りの発行（資料 4）
視点Ⅱ（リスクマネジメント）に基づき，次の３点の活動を行った。 ※同上
(1) 活動前の健康観察の実施：安全意識向上のための面談形式での健康観察（資料 5）
(2) 卓球台運搬に関する安全学習会：危険体験等を基にした安全な運搬方法の習得（写真 1/資料 6）
(3) 熱中症予防に関する安全学習会：生徒どうしで考え議論する活動を通した熱中症対策（写真 2）

活動の成果：

(1) 週当たり２日以上の休養日が確実に定着した結果，昨年度と比較して休養日が大きく増加し，生徒や職員の心身に余裕が出てきた。（グラフ 1）
(2) 例年のように発生していた骨折や重度な熱中症等の大きな事故等がなく，健康及び安全を意識した活動ができるようになった。（資料 5）
(3) 練習計画表作成の過程で，業務改善や事故防止の視点から活動時間や内容の見直しを顧問どうしで定期的に行うようになった。（資料 3）
(4) 部活動便りの発行や保護者との定期連絡により，部活動運営への理解や協力が高まった。（資料 4）

アピールポイント（アイディアや工夫）：

(1) 年度当初にガイドラインの内容を生徒や保護者に説明し，理解や協力を得て活動に取り組んだこと。
(2) 顧問の業務範囲を明確にして，顧問の長所や得意領域を生かした指導・支援体制に変更したこと。
(3) 部活動便りを活用した安全学習会を定期的に実施し，家庭でもその内容を復習できるようにしたこと。
(4) 生徒の体験談や実演・実技等を取り入れた安全学習会をすることにより，安全意識の向上を図ったこと。
(5) 自主的に取り組める内容（理論・トレーニング）を部活動便りで紹介して時間の有効活用に努めたこと。

（資料１）　卓球部運営方針

1 生徒の健康と安全を最優先とし，過度な練習や日程等は組まない。また，下校時間を厳守する。
2 学校生活及び学業が重要であり，その延長線上に部活動があることを常に伝える。
3 自分自身で考えたプレーや行動をとり，互いに高め合うチーム作りを目指す。
4 保護者や後援会との緊密な連携を図り，事故等が発生した際は速やかに報告や説明等を行う。
5 顧問の健康や生活も大切にし，体調不良や所用・繁忙期には練習参加を顧問どうしで分担・交代する。

（資料２）　顧問等の役割分担

顧問等	主 な 分 担 内 容
A 男性	1 部活動全体の総括（総監督） 2 理論や技術の指導 3 メンタル面の強化
B 男性	1 健康・安全管理の責任 2 後援会や他校・協会との連携 3 文書作成や用具の管理
C 女性	1 顧問A・Bのサポート 2 女子部員の支援（相談窓口） 3 メンタル面のサポート
D 男性 （コーチ）	1 技術指導のサポート 2 ゲームアドバイザー登録 3 後援会への助言

（資料３）　練習計画表（調整段階）

卓球部　8月練習・大会計画表（第2案　顧問用）　7月5日現在

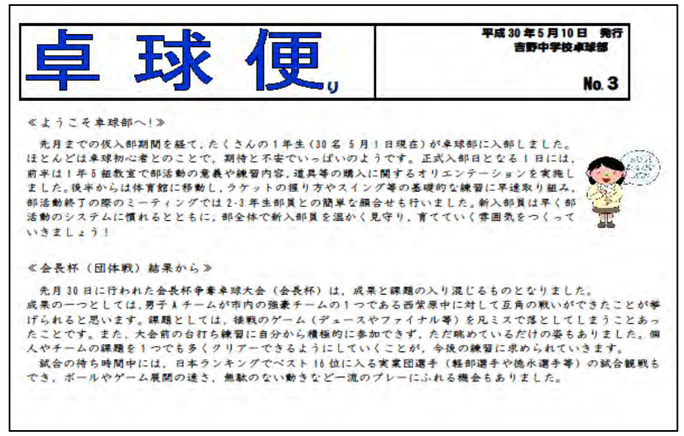
日	曜	練習時間等	大会・練習内容等	学校行事等	顧問A	顧問B	顧問C
1	水	13:00～16:00	基礎練習・課題練習	出校日	○	○	○
2	木	13:00～16:00	基礎練習・課題練習		○	○	○
3	金	8:00～11:00	基礎練習・課題練習		○	×	○
4	土	8:00～11:00	基礎練習・課題練習		○	○	×
5	日		（休養日）	吉野の日			
6	月	14:00～17:00	基礎練習・課題練習		×	○	○
7	火	8:00～11:00	基礎練習・課題練習				
8	水	13:00～16:00	基礎練習・課題練習				
9	木		（休養日）				
10	金		（休養日）				
11	土		（休養日）				
12	日		（休養日）				
13	月		（休養日）				
14	火		（休養日）				
15	水		（休養日）				
16	木		（休養日）				
17	金		（休養日）				
18	土		（休養日）				
19	日	13:00～16:00	課題練習・実践練習	親子奉仕作業	○	×	○
20	月	13:00～16:00	課題練習・実践練習		○	×	○
21	火	13:00～16:00	課題練習・実践練習	出校日	○	×	○
22	水	8:00～11:00	~~課題練習・実践練習~~		×	×	×
23	木	13:00～16:00	課題練習・実践練習		○	×	○

吉野の日は、各地区で清掃や交流活動があるので、休養日にします！

休養日を例年より長く設定
→ 自主トレメニューをミーティング内で各自で考えるようにしましょうか？

22日は3名とも不在のため、休養日にしますがよろしいでしょうか？

（資料４）　部活動便り


卓 球 便り

平成 30 年 5 月 10 日　発行
吉野中学校卓球部
No. 3

≪ようこそ卓球部へ！≫

先月までの仮入部期間を経て，たくさんの１年生（30 名 5 月 1 日現在）が卓球部に入部しました。ほとんどは卓球初心者とのことで，期待と不安でいっぱいのようです。正式入部日となる１日には，前半は１年５組教室で部活動の意義や練習内容，道具等の購入に関するオリエンテーションを実施しました。後半からは体育館に移動し，ラケットの握り方やスイング等の基礎的な練習に早速取り組み，部活動終了の際のミーティングでは 2-3 年生部員との簡単な顔合せも行いました。新入部員は早く部活動のシステムに慣れるとともに，部全体で新入部員を温かく見守り，育てていく雰囲気をつくっていきましょう！

≪会長杯（団体戦）結果から≫

先月 30 日に行われた会長杯争奪卓球大会（会長杯）は，成果と課題の入り混じるものとなりました。
成果の一つとしては，男子１チームが市内の強豪チームの１つである西紫原中に対して互角の戦いができたことが挙げられると思います。課題としては，後戦のゲーム（デュースやファイナル等）を凡ミスで落としてしまうことあったことです。また，大会前の台打ち練習に自分から積極的に参加できず，ただ眺めているだけの姿もありました。個人やチームの課題を１つでも多くクリアーできるようにしていくことが，今後の練習に求められていきます。
試合の待ち時間中には，日本ランキングでベスト 16 位に入る実業団選手（軽部選手や徳永選手等）の試合観戦もでき，ボールやゲーム展開の速さ，無駄のない動きなど一流のプレーにふれる機会もありました。

（資料５）　観察内容

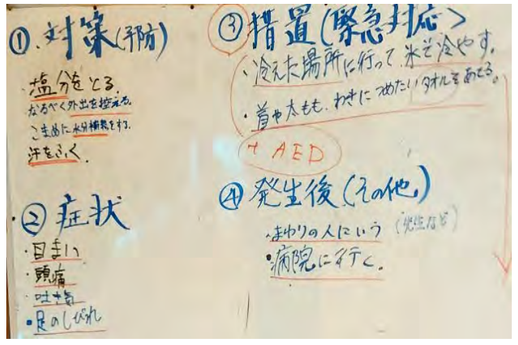
1 睡眠時間は十分とれたか。
2 食事をとったか。
3 熱や頭痛，体調不良等ないか。
4 水分補給をしたか。
5 医師や保護者からの指示はないか。

（写真１）安全学習会の様子

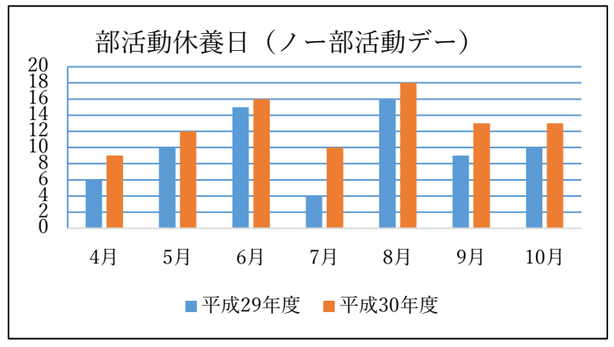
（資料６）卓球台の安全な運搬方法

1 台の移動・設置は 2 人以上で行い，協力して行う。
2 移動中に台に乗ったり寄りかかったりしない。
3 設置時は台の脚がどこにあり，どこに置くか確認する。
4 台を移動する際は，無理に押したり引いたりしない。
5 設置後は台の脚が不安定になっていないか確認する。
6 設置した台に手をついたり座ったりしない。
7 危険箇所に気づいた時は，すぐに顧問に連絡をする。

（写真２）　生徒から出された熱中症対策等



（グラフ１）



＜エントリーシート＞ ※事務局記入欄 **No.：A－ 17**	部門 平成 29 年度カリキュラム・マネジメント指導者養成研修	学校名・氏名 京都府総合教育センター 森山　隆仁
	活動名 カリ・マネ研修成果の普及 出前講座の実践と工夫・改善	

課題の設定：

京都府では全国と比して、カリキュラム・マネジメントが十分に機能しているとは言い難い現実がある（表１）。しかしながら、実際には教科等横断的な学習を取り入れた総合的な学習の時間の取組、評議員による学校評価を活用した PDCA など各学校で様々な実践が行われている。

そうしたデータと実践の乖離の原因の一つに「カリキュラム・マネジメントとは何か」という、理念の普及不足がある。逆に言えば、理念に対する理解が深まれば、これまでの実践をカリキュラム・マネジメントの視点で見直されるのではなかろうか。そして、そうした営みを通して、新しい学習指導要領で求められている「全ての教職員が取り組むカリキュラム・マネジメントの実現」が期待されると考え、本課題を設定した。

平成29年度全国学力・学習状況調査　学校質問紙（中学校）　※京都市除く

番号	質問事項		1	2	3	4
(28)	指導計画の作成に当たっては，各教科等の教育内容を相互の関係で捉え，学校の教育目標を踏まえた横断的な視点で，その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していますか	**府**	**9.4**	**60.4**	**29.2**	**1.0**
		国	16.0	62.3	21.1	0.5
(29)	教育課程表（全体計画や年間指導計画等）について，各教科等の教育目標や内容の相互関連が分かるように作成していますか	**府**	**15.6**	**58.3**	**25.0**	**1.0**
		国	21.2	56.3	21.6	0.9
(30)	生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき，教育課程を編成し，実施し，評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立していますか	**府**	**4.2**	**74.0**	**21.9**	**0.0**
		国	25.3	62.5	12.0	0.2
(31)	指導計画の作成に当たっては，教育内容と，教育活動に必要な人的・物的資源等を，地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせていますか	**府**	**14.6**	**61.5**	**20.8**	**3.1**
		国	17.7	56.9	24.6	0.8

1：よくしている　　3：あまりしていない
2：どちらかといえば、している　　4：していない

（表１）京都府の「カリキュラム・マネジメント」の実態

方針・計画：

「全ての教職員が取り組むカリキュラム・マネジメントの実現」のため、その理念を普及するには、以下の二つの方法が有効であると考え、出前講座のプログラムに取り入れた。

①各学校、教育委員会、教育局での出前講座でそれぞれの要望に応じた内容でカリキュラム・マネジメントの意義や概要について講義し、現場レベルでの共通理解を図る。
②「具体的に何から取り組めばよいかわからない」という声に応えるために作成したワークシートによる演習を通して、基本的な考え方を身に付け、全教職員がそれぞれの立場で取り組めるよう理解の深まりを図る。

また、出前講座を通して得た知見から、出前講座のプログラムそのものをカリキュラム・マネジメントし、一年間を通してより効果の高いものに改善する。

活動内容：

平成 29 年 12 月に「カリキュラム・マネジメント指導者養成研修」を受講した後、基本プログラムを作成。京都府総合教育センターの所員研修会で講義を行い、指導者養成研修での学びを普及するとともに、指導主事からいただいた意見をもとに基本プログラムの改善に取り組んだ。

平成 30 年 5 月から受付を開始した出前講座には、年間で 11 件の申し込みがあり、延べ 400 名を超える受講者を対象に「カリキュラム・マネジメント講座」を実施した。そして、それぞれの出前講座でのアンケートをもとにプログラムを評価し、講義中心から演習やワークショップを中心とするプログラムへと改善するとともに、複数のコンテンツを依頼元のニーズに応じて組み替える方法を取り入れた。

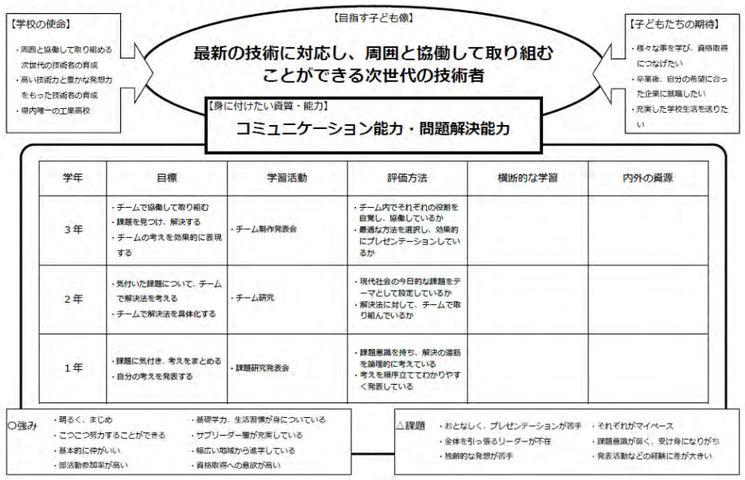
活動の成果：

出前講座についてはおおむね高い評価を得ることができ、各校の校内研修だけでなく、指導主事や事務職員、教務主任対象の研修会や小中学校の校種間連携を進めるための合同研修会など幅広い依頼をいただいた（表２）。

依頼元のニーズも「チーム学校の実現」「高等学校の新しい学習指導要領の要点」「集団づくりを活性化させる方法」といったように多様であったため、幅広いコンテンツを作成することができた。また、「現状の把握」「目標設定」とカリキュラムをつなげるための思考ツールとして「カリキュラム・マネジメント実現シート」（図１）を作成し、カリキュラム・マネジメントの理念について普及を図った。

	実施日	研修会	申込数（人）	内容満足度（%）	資料満足度（%）	役立ち感（%）
1	5/28	教育局指導主事研修会	20	90.9	100.0	100.0
2	5/30	小学校校内研修会	12	90.9	100.0	100.0
3	7/31	小学校校内研修会	23	100.0	100.0	100.0
4	8/1	教育局中堅教員研修会	14	100.0	90.0	100.0
5	8/20	幼保小中合同研修会	60	90.2	88.5	93.3
6	8/21	小中合同研修会	60	90.5	92.9	95.2
7	8/22	小中合同研修会	30	100.0	92.3	92.3
8	9/27	高等学校校内研修会	30	96.6	100.0	96.4
9	10/3	中学校校内研修会	15	92.3	92.3	100.0
10	10/30	教育局事務職員研修会	130	100.0	100.0	98･9
11	2/19	教育局教務主任研修会	120			
		合計・平均	514	95.6	95.6	97.1

（表２）出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」実施状況



（図１）カリキュラム・マネジメント実現シート

受講者は出前講座の学びに対する活用意欲が高く、講座終了後に学年会議を行ったり、自身の活動を振り返ったりするなど、それぞれで変容を見ることができた。

【受講者の声から】
・「実現シート」を作成するとなかなか埋まらない箇所があり、いかに視野が狭かったかがわかった。「つかさどる」の方法が少しつかめたように思った。チーム学校の実現にこの学びを生かしたい。（事務職員研修会）
・教務主任の立場から「＝教育課程の編成」というイメージを持っていたが、日々の授業や活動を「点」ではなく「線」でつなぐという意識をどの先生も持つことが大切だという事が分かった。（小中学校合同研修会）
・目標を具体的に設定することで評価しやすくなることが分かった。PDCA の"D"ばかりに目を向けず、評価や改善の視点を持って、2 学期の目標を設定したサイクルをイメージできてよかった。（小学校校内研修）

アピールポイント（アイディアや工夫）：※3～5 つ程度の箇条書きしてください

・本府の直面する課題に対応した課題の設定
・出前講座の依頼元の要求に応じたコンテンツの作成
・カリキュラム・マネジメントによる研修プログラムの実施・評価・改善

<エントリーシート> ※事務局記入欄 No.：A－ 18	部門　平成３０年度 カリキュラム・マネジメント 指導者養成研修	学校名・氏名 神奈川県厚木市立依知南小学校 川上美穂
	活動名　教育課程の評価改善～評価と改善の一体化の工夫～	

課題の設定：

本校は教育課程の編成を校長のリーダーシップの下全教職員で行っている。教育課程を編成するにあたり，研修を重ねることで新学習指導要領について理解を深めたり，全教職員で協議する場を設定したりしている。しかし，課題を改善につなげ，次年度の教育課程を編成していくという過程に課題が残った。そこで，教育課程の評価・改善を次年度の計画につなげることに重点をおき取り組んだ。

方針・計画：

仮説① 評価(C)・改善(A)をひとまとまりで考えることで，PDCA を効果的にまわすことができるのではないか。
仮説② 教育課程編成や学校評価のスケジュールや方法を見直すことで，ひとまとまりに考えた評価(C)・改善(A)を教育課程編成に効果的に活かすことができるのではないか。

活動内容：

○教育課程編成方法の工夫・・・評価(C)・改善(A)をひとまとまりで考えることで，PDCA を効果的にまわす
・教育課程の評価・改善の一体化→「評価したらすぐに改善案を考え，次に活かす」
・教育課程の評価点・改善点の視える化
→シールや付箋の使用。拡大した行事予定を会議室全面に掲示。評価の整理。
・教育課程編成会議の内容及び方法の工夫
→全体，学年，学校運営組織の３段階での協議。個で考える時間の確保。
○教育課程編成会議や学校評価のスケジュールや方法の見直し

活動の成果：

《教職員の声》
○教育課程編成会議では，全体→学年→学校運営組織→個と段階をふんで協議することで，行事について成果と課題を考えることができた。
○一度に１年間を評価するので，来年度の年間の見通しをもって改善案を考えることができた。（１年間の評価の土台には，行事などが終わったらすぐに行う評価の時間での話し合いがある。）
○今までは教育課程について少々他人事に考えていたが，自分のこととして考えることができ勉強になった。
○協議をしたり，話し合ったり，立ち話をしたり，たくさんの先生方の考えを聴くことができ，自分たちの教育課程を創ることができた。
○学習指導要領を意識して読み，学ぶことが多かった。（教職員の意識改革・授業改善につながった。）

アピールポイント（アイディアや工夫）：

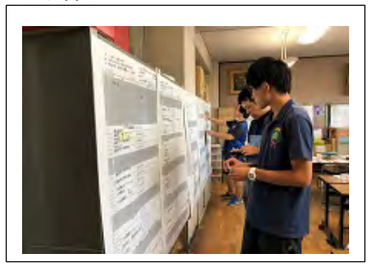
○評価・改善の一体化→「評価したらすぐに改善案を考え，次に活かす」
○評価・改善の視える化→評価の整理。全教職員で共通認識（共有）化。
○会議内容および方法の工夫→内容の精選。時間の有効活用。
○教職員の意識改革→学習指導要領を拠りどころとして考えることの習慣化。
○教職員の授業改善→単元のまとまりを意識し，知識・技能を活用させる授業のデザイン化（見通し）。

○教育課程編成方法の工夫・・・評価(C)・改善(A)をひとまとまりで考えることで PDCA を効果的にまわす

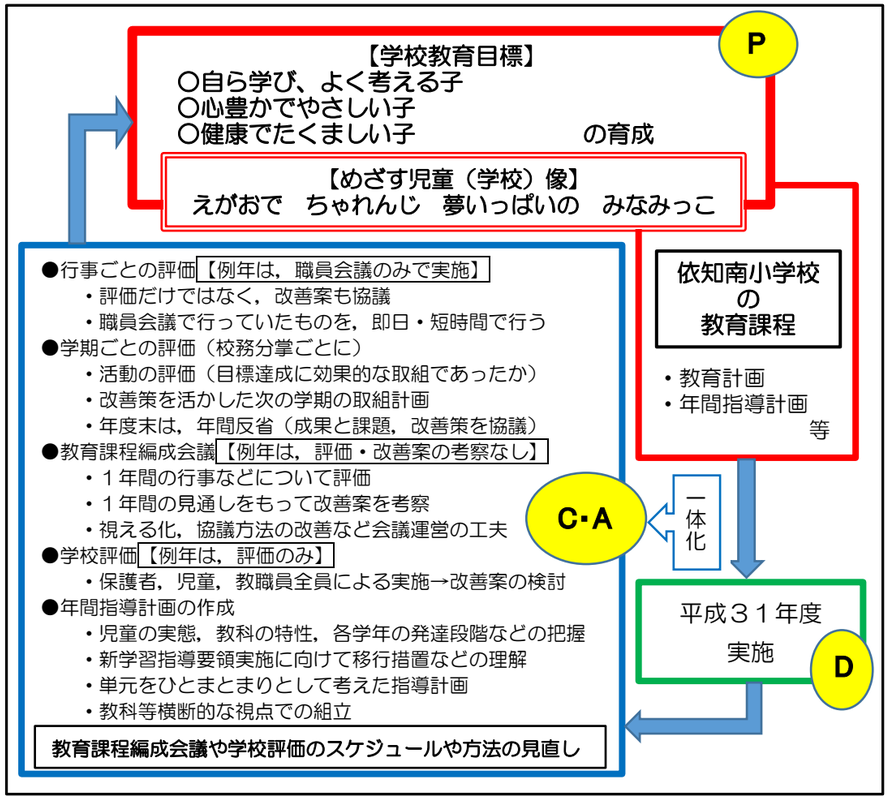
●教育課程の評価・改善の一体化
→「評価したらすぐに改善案を考え，次に活かす」

●教育課程の評価点・改善点の視える化
→シールや付箋の使用。拡大した行事予定を会議室全面に掲示。

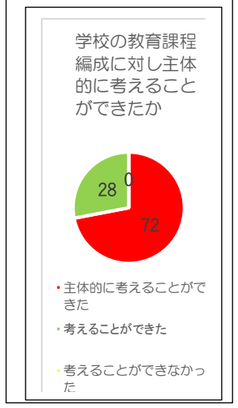
●教育課程編成会議の内容及び方法の工夫
→全体，学年，学校運営組織の３段階での協議。個で考える時間の確保。



○教育課程編成会議や学校評価のスケジュールや方法の見直し



○教職員の声



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：A － 19	部門 学校教育の情報化研修	学校名・氏名 愛知県日進市立梨の木小学校・上田　慶二
	活動名 主タイトル：教育の情報化推進活動 副タイトル：教職員の意識変革と行動変革の取組	

課題の設定：教育の情報化に対する教職員の聞き取り調査結果（資料１）から、情報通信ネットワーク社会で便利さを実感しているにもかかわらず、教育現場は旧態依然とした変わらないスタイルであり、第４次産業革命に活躍する児童の未来は遠いと感じた。そこで、児童が楽しく ICT を活用する機会を増やすことが必要であると考え、(1)教職員の意識改革と情報教育のリーダー育成 (2)ICT を活用した授業の推進 (3)ICT を活用する時間の確保 (4)家庭や地域の理解を目指し、次のような方針・計画を立てた。

方針・計画： (1)①教頭会②情報教育担当者会③地区の教職員（有志）の学習会を通して、教育の情報化の必要性と必然性について理解を促し、市内の教職員の意識を高める。(2)校内において、ICT を活用した示範授業を行うことで、児童の授業に対する意識の変化を可視化する。(3)教頭や情報教育担当者を中心に、校内の教育活動で児童が楽しく ICT にふれる機会を模索する。(4)保護者や地域に学校 ICT 活用の場面を観てもらうことで、今日的な教育の一端について知ってもらう。次に、それぞれの活動内容を示す。

活動内容：(1)①学校運営の推進役・調整役である教頭が、プログラミング教育のアプリやソフトなどを実際に体験し、楽しさや面白さを実感する。②情報教育担当者が推進教師としての役割と責任の自覚をもたせるために、児童が楽しく ICT にふれる活動計画を立て、事例集を作成する。③ICT 活用とプログラミング教育についての学習を深め、児童や教職員にその必要性と必然性を発信する。(2)校内にある ICT 機器、ソフトやコンテンツなどに光を当て、教頭や情報教育担当者が、ICT を活用した授業を行う。(3)①ICT クラブを創設する。②PC 室の開放に向けて準備をする。(4)①公開授業で ICT を活用した授業を行う。②PTA 総会や委員会で ICT を積極的に活用する。次に、それぞれの活動における成果を示す。

活動成果：(1)①新学習指導要領の特筆事項の理解とプログラミング体験を通して ICT 活用の必要性と必然性を実感した（写真１）。②各校での事例（資料２）を市内共有フォルダーに保存し、すべての教職員の閲覧を可能とした。③「未来社会に生きる子どもたち」をテーマに、プログラミング教育の重要性を中心に据えたテキスト（資料３）を作成し、さらに ICT を活用する演習（資料４）を通じて、指導者も学習者も心と体がフル回転することを実感した。(2)校内で眠っている ICT 機器や、使用頻度が少ないソフトやコンテンツなどを活用した授業が児童の集中力を高めた(写真２)。(3)ICT のクラブ創設で、児童が選択してプログラミングソフトを楽しむことができた(写真３)。現在、PC 室の開放に向けては安全安心面で整備途中である。(4)公開授業の参観者、PTA 総会や委員会の参加者から、「わかりやすい」と好評であった。

アピールポイント（アイデアや工夫）(A)教頭が率先して、ビスケットやスクラッチなどのアプリを使った授業公開を行った。(B)教職員の聞き取り調査から、情報教育を進めるにあたっての課題が明確となった。特に、「小学校プログラミング教育」の目的・目標・内容が浸透していない現状。(C)テキストや事例集の編集が情報教育を進めることで、教職員の不安が少し取り除けた。(D)児童が ICT を活用する時間の確保として、「PC 室開放」の提案に、大部分の教職員が食いついた。(E)備品点検の折に、ICT 機器やソフトを探し、授業で使用した。

≪資料１実態調査結果≫

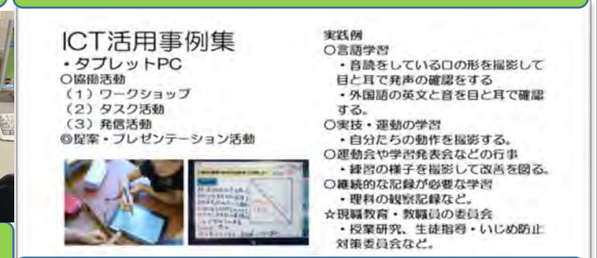
なぜ、ICT機器やソフトを使わないのですか
第1位 黒板とチョークがあれば事が足りる
第2位 操作に不慣れで授業が止まる不安がある
第3位 デジタル教科書を使うと、授業が時間内に終わらない
枠外 授業でICTを使うほどの内容がない
少人数ではICTは必要がない
どんなプログラム言語を使うのか不明だから

児童がタブレットやパソコンにさわる機会を増やすにはどうしたらよいか
第1位 授業を工夫してパソコンやタブレットを使用する機会を増やす
第2位 教職員がICTに対する知識や技能を高め自信をもって支援にあたる
第3位 ICT支援員を増やす
枠外 長い放課に図書館と同様にPC室を開放する
事例集があればよい

小学校のプログラミング教育の必修化に向けてどのような準備が必要だと思いますか
第1位 「小学校プログラミング教育とは何が何をするのか」から学ぶ必要がある
第2位 カリキュラム編成（各教科、総合的な学習の時間）
第3位 ICT機材やソフトウェア、コンテンツの充実などの環境整備
枠外 ICT機材やソフトウェア、コンテンツを積極的に使う
指導方法について研修と研鑽をする
専門職員を配置する

≪写真１　教頭会研修の様子≫

≪資料２ 情報教育担当者会 活用事例集の一部≫



≪資料３　ICT テキスト（P!）≫

1　未来の世界

未来は、コンピュータで制御された乗り物や通信機器が、わたしたちの暮らしは便利になっていることでしょう。現代社会においても、IoT（物のインターネット）やAI（人工知能）が登場し、わたしたちの暮らしには、コンピュータやタブレット、スマートフォンなどが欠かせないものになってきています。きっと、未来は、ドラえもんや鉄腕アトムなどのロボットが地球上の生き物と共生しながら活躍している時代になっていることでしょう。みなさんで未来の世界について話し合ってみてください。

≪資料４　学習会の演習の一例≫

≪写真２　ICT 活用授業（書写編）≫

棚の中に眠っているICTの活用

≪写真３　ICT クラブでの様子≫

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：A － 20	部門 平成２９年度 学校組織マネジメント指導者養成研修	学校名・氏名 熊本県立教育センター　　福山　尚美
	活動名 「チーム学校」の実現へ 学校マネジメント実施へのサポート	

課題の設定

（１）「チーム学校」の実現のためには、管理職のみならず、全職員がそのイメージを持ちながら積極的に学校運営に参画していくことが重要である。しかし、本教育センターで実施しているスクールサポート事業では、学校経営についてのサポート依頼が少ない状況があった。そこで、「学校マネジメント」の全体像を把握できるイメージ図(図１)を作成して啓発に努めることとした。
（２）「働き方改革」の緊急提言を受け、本教育センターにおいても次年度の研修に盛り込むこととなった。広い視野で情報を収集しながら、経験者研修を想定して、プレゼンテーションを作成した。
（３）中堅教諭等資質向上研修において、ミドルリーダーの育成を目指し、「SWOT 分析」等を実施した。

方針・計画

（１）「チーム学校」を実現するために、「学校経営・運営(図２)」「学校改革（校務改革・授業改善）(図３)」「働き方改革(図４)」の 3 つの視点をバランス良く実行していくことが必要であると考える。それぞれの関係性と具体的実践事項をキーワード化し、分かりやすく図に表すことで全職員の理解を促していく。
（２）「学校における働き方改革に係る緊急提言」（H29.8.29）を受け、教職員の長時間労働の見直しが図られた。「働き方」から「働き方・休み方」への意識の変革、本来業務の抜本的見直しが必要となるため、研修受講者の深層心理に訴えるような内容をプレゼンテーションに組み込んでいく。(図５)
（３）中堅教諭等資質向上研修において、研修者自身が自校のビジョンの共有化を図り教育目標の達成に寄与するため、「ケースメソッド事例の作成」⇒「ケースメソッドの実際」⇒「自校の SWOT 分析・課題把握」⇒「自校における実践」⇒「実効策実践レポートの発表」の流れで研修を実施していく。

活動内容

（１）「学校組織マネジメント」の視点から、学校主体による課題解決に向けた支援を行うチラシを作成した。
（２）経験者研修の「働き方改革」講話・演習に向けたプレゼンテーションを作成・提案した。
（３）中堅教諭等資質向上研修における選択研修「学校マネジメント」受講者に、講義・演習の中で「課題解決の主な手法」を伝え、ｅラーニングの個人研修も含め約１年間継続的に指導・助言を行った。

活動の成果

・昨年度、「学校組織マネジメント指導者養成研修」を受講し、学校経営目標の達成には、全職員の『理解と納得』が必要であることを学んだ。管理職のみならず、職員一人一人が、「チーム学校」の実現イメージと自らの参画意識を持って携わることの重要性を鑑み、啓発のためのイメージ図を作り上げ、所属する経営研修室で提案し検討を重ねるとともに、サポートに向けての共通理解を図ることができた。
・中堅教諭等資質向上研修では、本教育センター作成のテキスト及び当該研修で学んだ手法等を積極的に活用し、これまでの教育活動を振り返り、「今後１０年後のあるべき姿」を想像することで、ミドルリーダーとしての自覚を持たせた。それぞれが学校の中堅として課題解決に取り組む姿が、実践レポートに表れていた。また、研修内容に対しての有用感は、1.1（４段階設定）と、高い評価を得た。
・本年度は、担当業務が変わったため、「学校マネジメント」に係る研修には携わっていない。昨年度使用したプレゼンテーション、資料等を次の担当者に引き継ぎ、更なる研修の充実に努めている。

アピールポイント（アイディアや工夫）

・県の研修機関としての役割を踏まえ、学校教育における今日的課題を解決するための手立てを考えたこと。
・管理職のみならず、すべての教職員にとって「学校マネジメント」を理解できるようなチラシを作成したこと。
・研修受講者の意識変革を促すことができるように、プレゼンテーションの内容やレイアウトを工夫したこと。
・ｅ ラーニングにより、提出物等の進捗管理を行うとともに、継続的に研修受講者を指導・支援することで研修へのモチベーションの維持・向上に努めたこと。

図１：「チーム学校」の実現に向けた学校マネジメント（イメージ図）

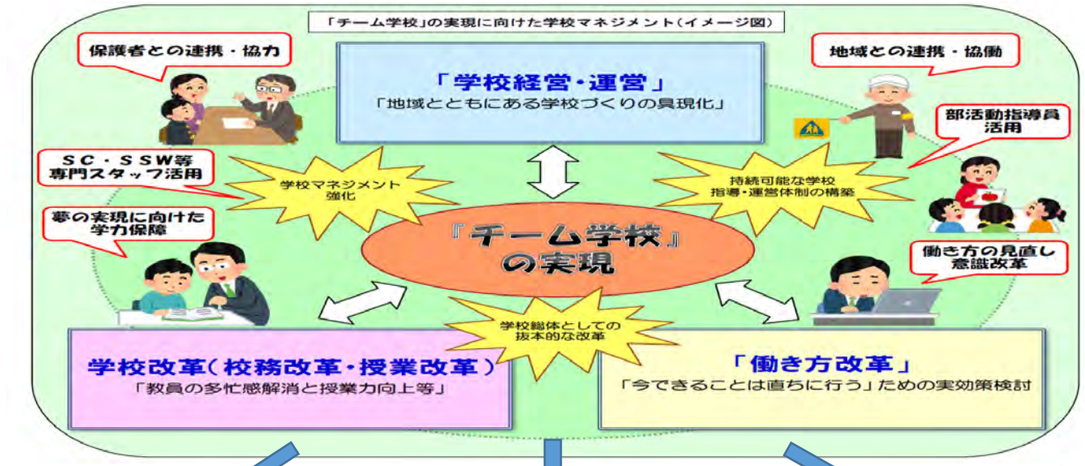


図２：支援計画①

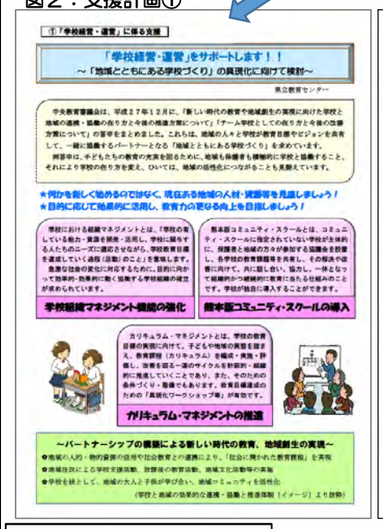


図３：支援計画②

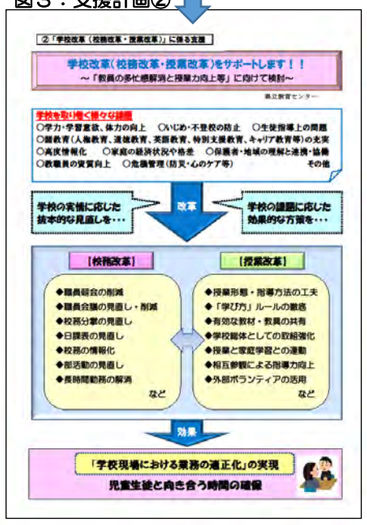
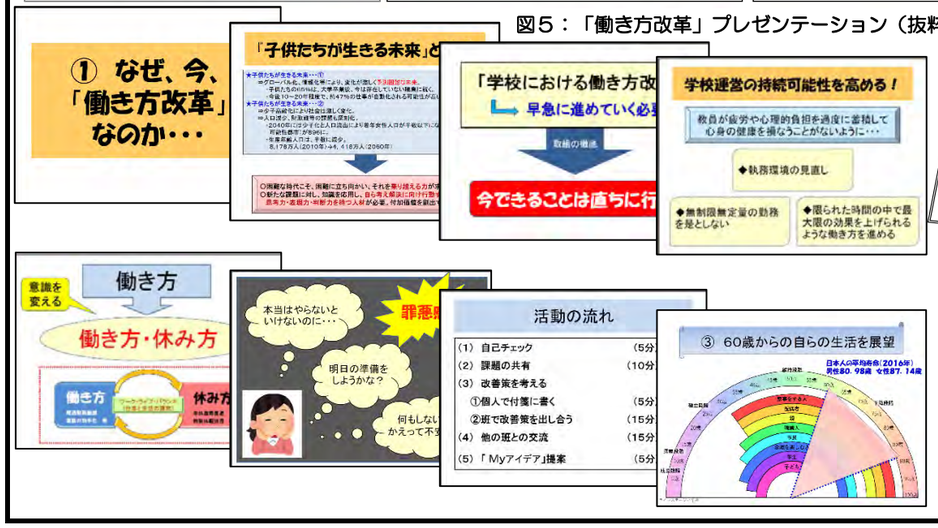


図４：支援計画③

図５：「働き方改革」プレゼンテーション（抜粋）



経験者研修「働き方改革」講話・演習のプレゼンテーションを作成した。キーワードは、「意識の変革」「働き方・休み方」「本来業務の抜本的見直し」「チーム学校」である。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：A － 21**	部門 研修成果活用部門 （平成 29 年第１回学校組織マネジメント研修）	学校名・氏名 いわき市総合教育センター　研修調査室 指導主事　坂本　義仁
	活動名 主体的な中核教員の育成 学校組織マネジメント演習の体系化	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

「実践の充実～実践の深化」のライフステージにある教職員が学校の中核を担うには、学校経営参画について具体的・実践的な視点が必要である。しかし、研修者の意識を確認すると、「ミドルリーダーとしての役割とは何か学びたい」と、自己の役割を認識できていない研修者も多い。自校を見つめる視点が必要なことがわかる。
基本研修Ⅰ【11 年目・16 年目・21 年目】の研修において、学校経営参画の視点を明確化し、自己の強みを生かして課題解決にあたる教員を育成すべく、学校組織マネジメント研修を次のように位置づけた。
「学校組織マネジメントの理論を身につけ、的確な校長のリーダーシップと経営理念のもとに戦略を構築し、学校内外の資源を活用することができるようにする。」

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

学校経営ビジョン及び自校の学力向上グランドデザインについて、以下の仮説に基づき研修を進めた。
仮説１：　自校の学校経営ビジョン（学力向上グランドデザイン）について、１分析　２工夫改善　する手法を学び、自校の戦略を見直していくことで、中核教員として学校ビジョンの推進について実践的な理解を深め、方策を具体化することができるであろう。
仮説２：　事例校の学校経営ビジョンについて分析・工夫改善策を検討し、会議運営についても研修を深めることで、自校の取組についても再検討し、PDCA サイクルで業務推進することができるであろう。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

○　基本研修Ⅰ【経験者研修Ⅱ(11 年目)・ミドルリーダー養成研修(16 年目)・経験者研修Ⅲ(21 年目)】：組織マネジメントの視点から自校について SWOT 分析をし、所属校の強み及び自分の強みを生かして課題解決のための方策を検討した。
○　学校組織マネジメント講座（希望研修及びミドルリーダー悉皆）：組織マネジメントの視点で手法研修を進めた。

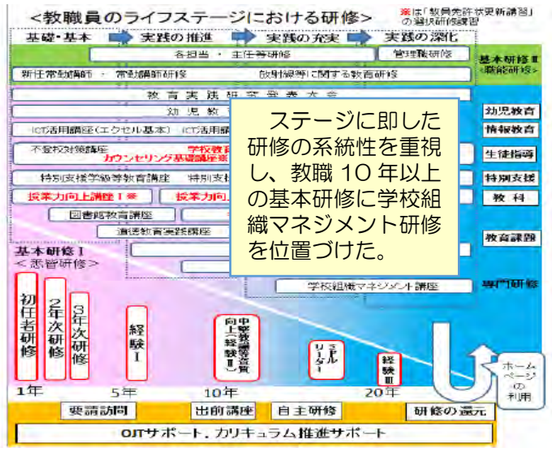
活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

○ グループ協議では、校種や校務分掌など、それぞれの立場からの意見が出され、活発な協議となった。
→ 発表の場面では、学校経営参画のポイントとして焦点化したテーマで発表するグループが複数あり、学校経営で大切にすべき要素の共通点を見出すことができた。
○ 研修参加者からは、学校経営参画についての実践意欲の高まりや、課題解決に向けての具体的な方法を身に付けているような感想が多数見られた。（資料２）
○ アンケート結果からは、本研修が学校経営参画について考えるきっかけとなり、今後の実践的指導力の向上を目指すものとなった。（表１）

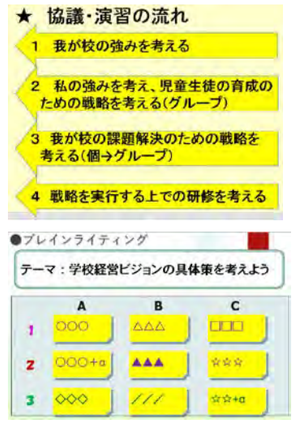
アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

○ 手法研修を複数回、段階的に位置づけ、校内実践できる具体的な知識と技能を得られるようにした。
○ 基本研修においては、各自の学校ビジョンを分析する手法を演習し、機会と場を確保することで、個々の研修者のニーズに応じた研修支援を進めた。
○ 学校組織マネジメント講座では、演習用の資料を準備することで、客観的に協議し、深められるようにした。

（図１：市教職員研修の系統表）



（図２：各研修で演習の柱）



←中堅教諭等資質向上研修等、基本研修においては SWOT 分析により自校及び研修者自身の分析を実施した。

←学校組織マネジメント講座においては事例校を設定し、学校経営ビジョンに即した課題解決策を検討した。

（写真１：基本研修Ⅰにおける、自校の課題解決に向けての取組）

←所属校についてのSWOT分析から、共通課題を設定し、自分の強みを生かした方策を検討していった。

（資料１：学校組織マネジメント講座演習資料）

（写真２：学校組織マネジメント講座の様子）

←事例校となる小学校を設定し、「学校ビジョンを具現化するための方策を検討する」ための手法研修を実施した。実在しない学校であることから、客観的な意見を積極的に出し合うことができた。

（資料２：研修者の感想から）

・　自分の強みを客観的にみることができた。
・　進んで学校運営に関わりたい。学校を見る力の必要性を感じた。
・　話合いの進め方や、演習で検討した方策が大変具体的であり、今回の研修は自校で活用できそうである。
・　ミドルリーダーとして、意見をまとめ発信する立場にあるので、どんどん活用したい。

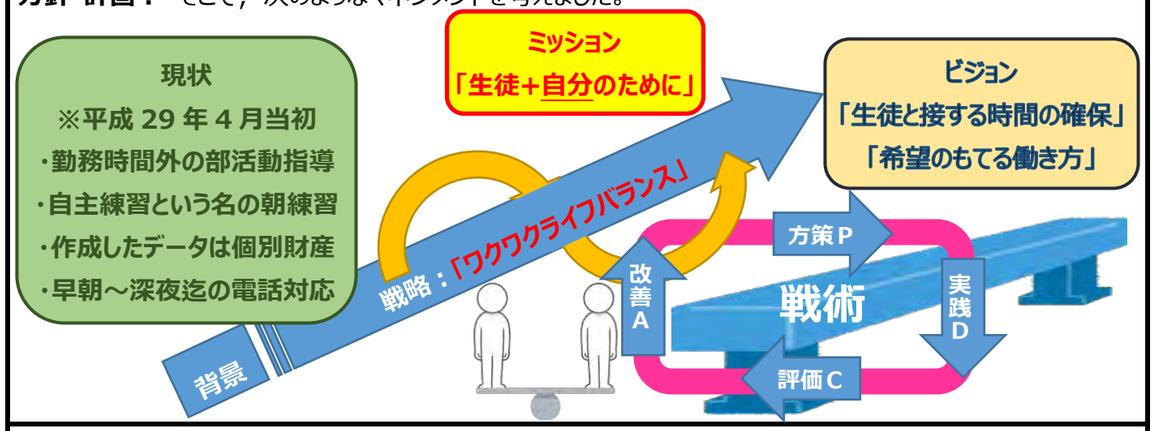
（表１：アンケート結果※4 段階評価）

研修で、知識や技能を得ることができたか	3.55
研修の内容は、今後の実務の中で活用できるか	3.52
研修の内容は、課題解決に向けて役立つか	3.52

<エントリーシート> ※事務局記入欄 No.：A－ 22	部門 研修成果活用部門 平成 30 年第４回中堅教員研修	学校名・氏名 宮城県岩沼市立玉浦中学校 主幹教諭　安田　弘秋
	活動名 ワクワクライフバランス 学校マネジメントからのアプローチ	

課題の設定： OECD の調査（H25）では，参加 34 か国のうち，勤務時間の最も長い国が日本でした。
（勤務時間　参加国平均：38.3 時間，**日本：53.9 時間**）※グラフ１
授業時間は参加国とほぼ同じなのに，課外活動や事務業務が特に長いことが分かりました。
（課外活動時間　参加国平均：2.1 時間，**日本：7.7 時間**）※グラフ２
（事務業務時間　参加国平均：2.9 時間，**日本：5.5 時間**）※グラフ３
このような実態を受け，宮城県岩沼市では平成 29 年度より教職員の働き方改革推進委員会を立ち上げ，具体策を盛り込んだガイドラインを策定しました。しかし，先生方の情熱あふれる指導「生徒のために」が働き方改革の壁になっていました。

方針・計画： そこで，次のようなマネジメントを考えました。

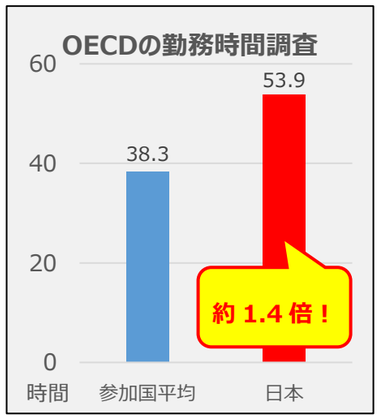


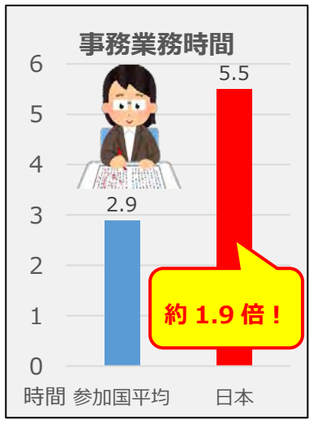
活動内容：具体的な手立て（戦術）の一部を紹介します。
① 時間外業務時間の月別目標を小・中学校別に数値化(H30：15%減→H31：25%減)※表１
② 教職員の時間に対する意識向上に向けた時間管理の徹底（タイムカードや留守番電話の設置）
③ 教職員・生徒の健康管理を目的とした部活動休養日（朝練習の禁止，シーズン別休養日の設定）

活動の成果：「ワクワクライフバランス」の充実→生活と仕事の相乗効果の一例

例：複合的に相乗効果をもたらした留守番電話の設置
設置したことで…**①夕方 18:30～朝 7:30 までの電話対応がほぼ無くなった！**
②保護者も勤務時間内に相談しようとすることで，内容が精選された！
③教員も 18:30 以降学校にいると，電話に出ないのはおかしいので退勤する！
緊急時の対応として学校で携帯電話を保持（管理職が管理）しているが，ほとんど連絡はなし！

アピールポイント（アイディアや工夫）：ワクワクライフバランスとはどちらかを犠牲にする事ではありません。
仕事のスキルをプライベートで身に付け，より短時間で仕事上の成果を挙げることで，生活を充実させます。本校では，私生活でも教職員が同じ趣味（野球観戦やマラソン）をもち，ライフを充実させています。

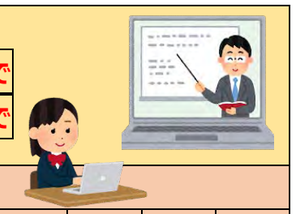




グラフ１　OECD による勤務時間の比較　　グラフ２　課外活動時間の比較　　グラフ３　事務業務時間の比較

表１ 宮城県岩沼市で掲げた時間外業務目標時間

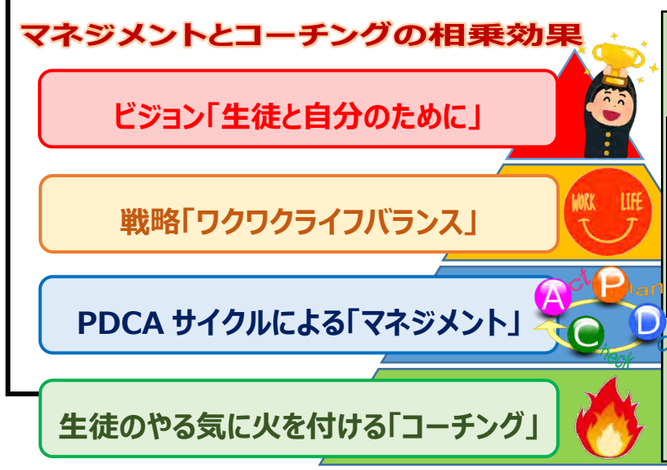
①岩沼市教職員個人目標
H.30：月当たりの時間外業務６０時間→１５％削減→**51 時間まで**
H.31：月当たりの時間外業務６０時間→２５％削減→**45 時間まで**



②岩沼市内小・中学校月別目標

小学校	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
H29 超過時間	44	47	52	37	11	48	46	43	34	33	40	
H30 目標時間	**37**	**40**	**44**	**31**	**0**	**41**	**39**	**37**	**29**	**28**	**34**	
中学校	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
H29 超過時間	55	66	57	54	19	60	55	52	43	36	43	
H30 目標時間	**47**	**51**	**48**	**46**	**0**	**51**	**47**	**44**	**37**	**31**	**37**	

研修成果を活用した今後の学校マネジメントビジョン



ＳＷＯＴ分析による職員評価の目標

	プラス要素	マイナス要素
内部環境	Strength 活かす強み	Weakness 克服すべき弱み
外部環境	Opportunity 機会を捉える	Threat 回避すべき脅威

強みを生かし，弱みを補うテーマの設定

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし，行間・文字間，上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図，写真，表，グラフなどは，（写真 1）（表 1）などと文中に記載し，右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上，貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は，変更可能です。
※いずれの場合も，必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：A - 23	研修成果活用部門 平成 28 年度 第３回中堅教員研修	学校名・氏名 宮城県栗原市立志波姫中学校・佐々木留理子
	活動名 教育計画作成の工夫　～学校評価の改善を通して～	

課題の設定

学校教育目標の具現化を具体的に実践できる教育計画を作成するために，ＰＤＣＡサイクルが確立した学校評価になるよう，評価項目や手順を見直し，改善する。

方針・計画

1　前年度までの学校評価の手順や項目をベースとし，校長の指導の下に改善する。
2　会議の日程・時間が増加しないよう，効率的な改善を行う。
3　全職員が協議や計画の作成に積極的にかかわれるようにする。
4　平成２８年度(９月)～平成２９年度(４～３月)で実践(改善した学校評価)を行う。

活動内容

1　研修で学んだことを参考に学校評価の手順を見直し，改善した手順を職員会議で提案：資料２
　①：本年度の重点目標について４段階で自己評価を行う。
　②：本年度の教育活動について，生徒・保護者アンケートを行う。
　③：自己評価，ｱﾝｹｰﾄの結果に基づき，学校教育目標を具現化するための課題を学年で話し合う。
　　(学年ごとのワークショップ)：資料１(写真１，写真２)
　④：①～③について，６部会に分かれ，課題の確認，改善策を話し合い，全体会に提案する。
　⑤：全体会で各部会から提案された改善策について協議し，具体的な内容(５Ｗ１Ｈ)を確認する。
　⑥：決定した内容を反映させた教育計画(重点目標，各活動の計画等)を全職員で分担して作成。
　　(校長が学校評価の結果を基に，次年度の重点目標・施策を作成)
　⑦：具体的な改善策(５Ｗ１Ｈ)をコンパクトにまとめた冊子を作成：資料１(写真３)
2　決定した学校評価の手順に従って実施(Ｈ２８．１２　～　Ｈ２９．３)
3　学校評価に対するアンケート実施(Ｈ３０．７)

活動の成果

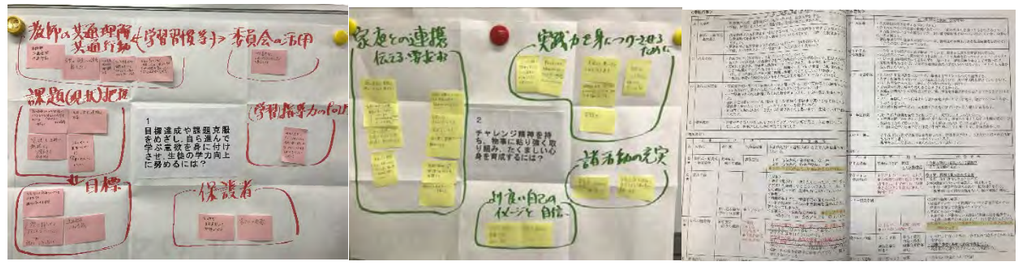
1　学校評価に対するアンケート(教職員対象)：(１)，(２)資料３
　(３)　より効果的な学校評価を行うために必要なことは何か。
　　・全体的に，かかわらないと見えない部分もあると思う。・より具体的な評価項目を増やす。
　(４)　本校の学校評価の手順をどのように変えたらより効果的になるか。
　　・現行のままで良い。・現状のままで十分だと感じている。・今のままで良い。・特に変える必要は無い。
2　成果　(１)　学校評価の全体会にワークショップを取り入れたことにより，話し合いが活発になった。
　　(２)　改善策の５Ｗ１Ｈを明らかにしたことにより，教育活動のＰＤＣＡサイクルが確立した。
　　(３)　学校教育目標の具現化をめざす重点目標を意識した教育活動が行えるようになった。

アピールポイント（アイディアや工夫）

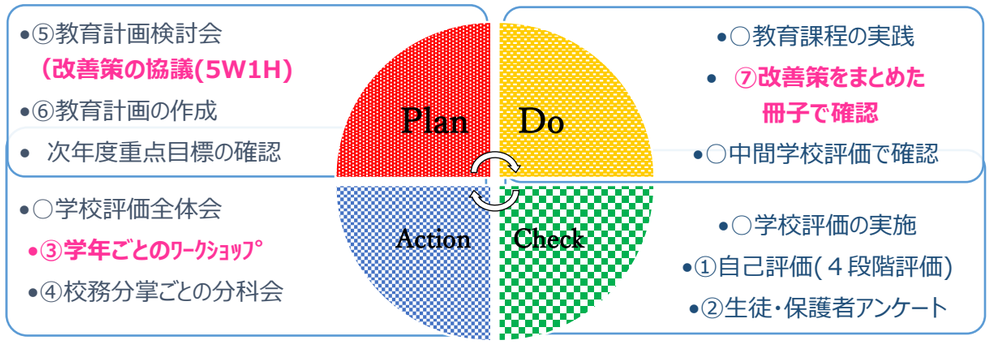
1　一斉による話し合いで意見があまり出なかった学校評価にワークショップを取り入れた。
2　本校校長が作成する学校経営の重点目標に学校評価の結果が反映され，学校教育目標の具現化を目指す活動が具体的になった。
3　会議日程・時間を増やさずに，効率的な学校評価が行えるようになった。

＜写真，図表添付欄＞

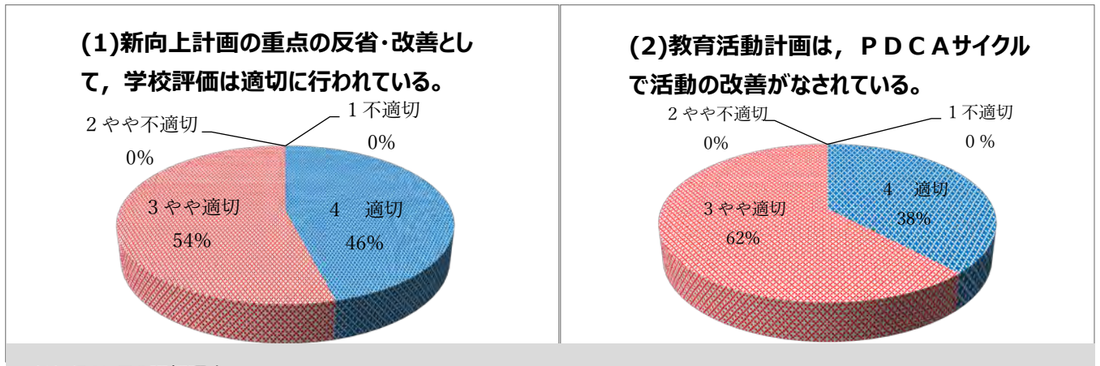
資料１　写真１　　写真２　　写真３



資料２：課題の設定図



資料３：学校評価に対するアンケート



(1) についての評価理由

評価４：校長先生の考えをもとに行われている。焦点化されている。教務主任の先生がリードしてやっている。
学校評価をもとに，具体的な改善が実施されている。

評価３：節目節目に評価がなされている。

(2) についての評価理由

評価４：反省から改善策を明確にして実施がなされている。広く意見を聞き，反省点をうまく生かしている。昨年の反省に基づいて，その都度改善されていると感じる。

評価３：気付かないところもあるかもしれない。年度始めに具体策が出されているので取組が改善されたものがあった。教務主任が計画的にやっている。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

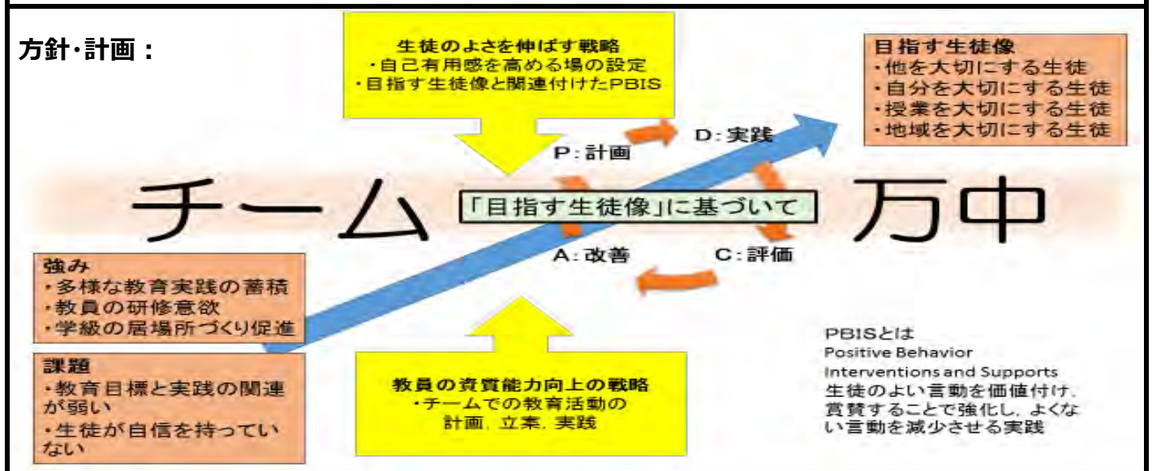
【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：A － 24	部門 研修成果活用部門 平成 30 年第４回中堅教員研修	学校名・氏名 宮城県石巻市立万石浦中学校 教諭　小山　晴美
	活動名 チーム万中グッジョブ作戦 目指す生徒像に迫るＰＢＩＳの実践	

課題の設定：３年間に渡って「だれもが行きたくなる学校づくり」の教育実践を行ってきて見えた成果と課題

（教育実践の面から）○多様な実践を行ったことによる実践の蓄積と，教員の研修意欲の高まり
△どの力が伸び，課題なのかを把握する指針が不明確
（生徒の実態から）　○学級の居場所づくりによって，不登校生徒が減少
△自分に自信を持てずにいる生徒が依然として多い

方針・計画：



活動内容：以下の活動を，教員がチームで計画立案し，学校・学年の共通行動として取り組んでいる

①「目指す生徒像」に基づいて，各月・各行事で取り組むべき課題を生徒とともに考え，可視化する。
②「目指す生徒像」に基づいた目標と，自己評価・相互評価を一体化した学校共通のシートを活用する。
③地域と関わる・地域に貢献する・異年齢と交流する活動を充実させる
④生徒間による互いの頑張りへの賞賛と，教師による生徒のよい行動への日常的な賞賛を可視化する

活動の成果：教師も生徒も同じベクトルを向かって取り組めていることを，日々実感！

①各教育活動で，「目指す生徒像」に即した目標を，教師も生徒も共有化して取り組むことができている。
②達成目標に基づいて，成果と課題を教師も生徒も把握し，次の教育活動に生かすことができている。
③生徒自身が，自分のよい行動に自信を持てるようになってきた。
④教師も生徒も，よい行動に注目することが多くなった。

アピールポイント（アイディアや工夫）：学校教育目標を達成するための近道！

①「目指す生徒像」に迫るために，必要な教育活動を厳選することで，スリム化が図られる。
②実践する教育活動が焦点化でき，より効果を上げることができる。
③どの学年も，どの学級も，共通した目標に向かって実践をするため，実践の質を高めることができる。
④チームで計画立案することで，多様なアイディアが生まれるとともに，各教員の負担が軽減できる。

＜写真、図表添付欄＞

全員の意見を反映できる組織づくり
一人一役で重複する組織は作らない

職員会議後に、各部のチーム会議を実施

授業研究部	ＳＥＬ部	ピアサポート部	ＰＢＩＳ部
・協同学習の時間集約 ・授業参観シート ・研究授業の運営・記録	・ＳＥＬ授業計画 ・模擬授業の運営 ・指導案の蓄積	・実践計画 ・生徒会との連携 ・小学校や地域との連携	・「きらめきだより」の発行 ・「きらめきコーナー」の運営 ・写真等による活動の記録

チーム会議で教育活動の計画・立案

授業づくりのための月１回模擬授業

<エントリーシート> ※事務局記入欄 No.：A - 25	研修成果部門 （第１回事務職員研修）	東京都江東区立深川第二中学校 小黒圭介
	事務職員から始めるカリキュラムマネジメント ～担当教科は“租税教育”科です～	

課題の設定：

江東区では学校事務の共同実施が行われているが、共同事務室で何を担っていくのか、どのような業務を担当すれば学校にとって有意義なのか、答えが出せていない状況でした。当機構の研修で、「つかさどる」学校事務職員として、国の動向や学校の教育方針を把握する、そのうえで事務職員としてやるべきことを考える、事務職員にも教育活動に関われることが多くある、ということを学びました。

方針・計画：

上記の学びから、教科横断的な視点で、経営資源を活用してカリキュラムマネジメントに取り組めないかと考え、事務職員に何ができるのか？事務職員にしかできないことはなんだろう？という視点から考え、導き出した一つの答えが租税教育でした。また、生徒自ら考え・行動することを重視するため、私は“情報発信”役になることにしました。

活動内容：

学校の光熱費の使用状況を掲示物として“見える化”する。（写真１）
子どもたちが目にしやすいモノには金額が分かるように記載する。（写真２）

活動の成果：

「光熱費のコストが区内でもトップクラスに高いので、何とかしたいと思っていた。生徒にとっても、職員にとっても、光熱費が“見える化”されることは非常によい。」（管理職からの声）
「プールの水道代がこんなにかかるということは、みんな知らないね。アナウンスしたら面白いかもね。」（先輩職員）

（※光熱費は時期によって使用状況も変化してくるので、来年度の使用状況と比較したい。）

アピールポイント（アイディアや工夫）

・東京都の他局の政策とも結びつける。東京都環境局の「チームもったいない」に加入した。
（局横断的な視点は行政職員としての強み）
・目に付く掲示物にするために、光熱費の使用状況だけでなく、関連する豆知識情報も入れ込んだ。豆知識情報は民間会社のホームページから引用したため、著作権の承諾も得た。
（民間会社の情報を活用することで、生徒により深い知識を提供できる）

国

「学校教育法　第21条第2号」
…環境の保全に寄与する態度を養うこと…

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　総則編」
…環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人の育成に資することとなるよう特に留意すること。…

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　社会編」
…飲料水，電気，ガスを供給する事業は，安全で安定的に供給できるよう進められていることや，地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解すること。…

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　社会編」
…税の負担者として租税の使いみちや配分の在り方を選択・判断する責任があることなどについて理解と関心を深めるなど納税者としての自覚を養うことが大切である。…

「国税庁ホームページ」
…次代を担う児童・生徒が、民主主義の根幹である租税の意義や役割を正しく理解し、社会の構成員として税金を納め、その使い道に関心を持ち、さらには納税者として社会や国の在り方を主体的に考えるという自覚を育てる…

学校

「教育目標を達成するための基本方針」
…生徒が環境に関心をもち、環境を守るためにリサイクル、節電、節水等を心がけた行動が主体的にとれる態度の育成を図る。…

「年間授業計画【社会】」
…租税と政府の役割について理解し、資料を活用しながら税の作文を書くことができる。…

事務職員

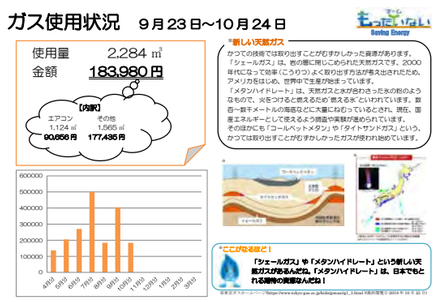


写真１

写真２

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

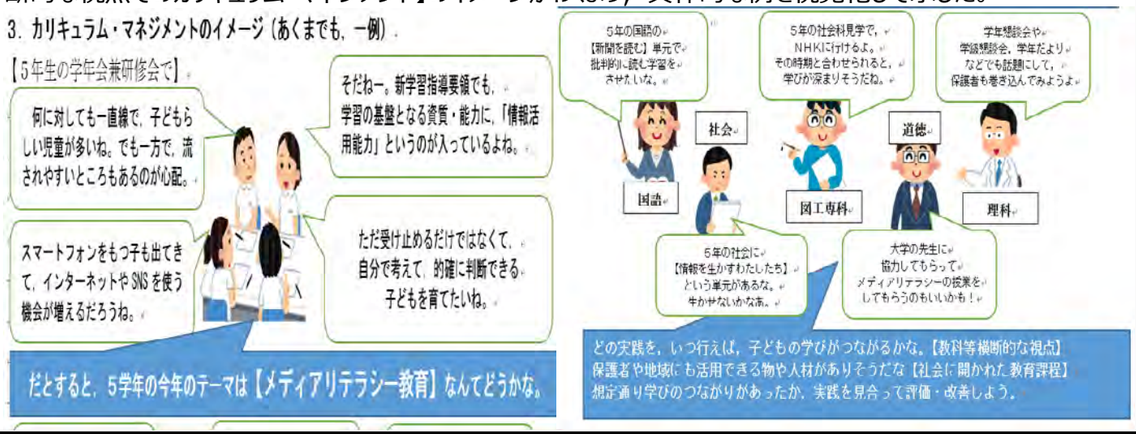
＜エントリーシート＞ ※事務局記入欄 No.：A － 26	部門 １．研修成果活用　部門 平成３０年度第１回中堅教員研修	学校名・氏名 千葉大学教育学部附属小学校 石井　桃子
	活動名：　教職員の強みを生かし，考え合う場としての校内研修を目指して ～学年ごとのカリキュラム・マネジメントの視点をもとに～	

課題の設定：【本校の特色】（〇強み　●弱み）

【教科研究が主となる学校の研究体制】全教科・領域の部会があり，一人一部会に属している
〇一つの教科を専門的に研究してきている教師が多い
〇研究教科の異なる教師が学年に配置されている
●研究教科以外の教科に関する情報の共有機会が少ない
●教科研究の視点は強いが教科横断的な視点は弱い
【中堅～若手教員が多い】20 代後半～40 代前半の教員が教職員の８０%を占めている
〇各々が自分の力で学級経営できる力をもっているため，学級ごとの児童の実態に合わせた取り組みができる
〇授業や行事に対して，常に全力で取り組もうとする
●学年としてどのような児童を育てていくか，そのために何をするべきか等を共有する必要感が少ない
●教師の多忙化により，明日の授業，目の前の行事に取り組むことで精一杯のため，学びのつながりや行事等を見据えた取り組みが難しい

方針・計画：上のような強みを生かした校内研修ができないだろうかと考え，次のような取り組みを試みた。
校内研修の目的を「教科横断的な視点でカリキュラム・マネジメントを行い，担当する学年の教育活動の充実を図る」と設定し，取り組むこととした。これは，次のような効果をねらうものである。
・カリキュラム・マネジメントを行うことで，行事や日々の授業，さらには次の学年への展望を踏まえた長期的な視点で学習活動を行うことができ，**効率的に児童の学びを深めることができる** だろう
・教科横断的な視点を打ち出すことで，**各教科の専門性をもつ教師の強みを共有できる** だろう
・各学年で行うことで，各学年の児童の実態や教師の専門性，行事等に沿った **学年独自のカリキュラム・マネジメントを行うことができる** だろう

活動内容：
①全職員が研修に取り組める研修体制の在り方を提案
全職員が研修に取り組んだり，日常的に意識したりできる研修体制を整えた。具体的には，各学年に１人研修部員を配置し，研修部員をリーダーに各学年の経営方針と関連させたカリキュラム・マネジメントの検討，実施，振り返りを行うこととした。また，研修部員は定期的な研修部座談会に参加し，他学年の進捗状況を知る機会を設け，その結果を週一回の学年会等で共有してもらうよう，促した。さらに，提案では，【教科横断的な視点でのカリキュラム・マネジメント】のイメージがわくよう，具体的な例を視覚化して示した。



②考える場としての校内研修
夏休みの研修全体会として，まずはカリキュラム・マネジメントについて全体で確認した。次に，同学年の教師を単位としたグループで，カリキュラム・マネジメントの構想を練る時間を設けた。グループには担任だけではなく，その学年を担当している専科教諭や，低学年指導者，教務部教員等も配置し，様々な教科・年齢で話し合いができるようにした。また，各学年には，「学校経営のグランドデザイン」「各教科領域等の年間指導計画」，「年間行事予定」，「カリキュラム・マネジメントの方法例」等を配布し，それらを参考にしながら，各学年が夏休み以降行うカリキュラム・マネジメントについて，図にまとめていった。最後に，各学年の考えを発表し合い，共有する場とした。

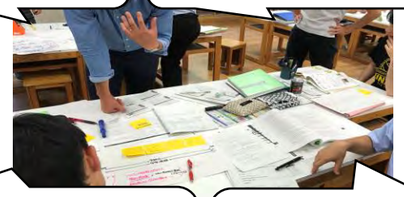
★全体で【カリキュラム・マネジメント】の意義を確認

・授業時数の不足解消や働き方改革の一つの解決方法
・各学年の特色ある学習活動に理論付けることができる
・「汎用性のある資質・能力」を育成する視点

カリキュラム・マネジメントを行うよさってなんなんですか
カリキュラム・マネジメントの目的がはっきりしないなあ

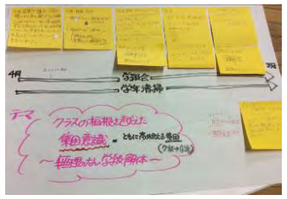
★各学年での話し合いの様子（第２学年）

特別活動を定期的に学年で行うのはどうですか
国語の学習でも，互いのクラスを相手に，本などを紹介する活動を取り入れられ



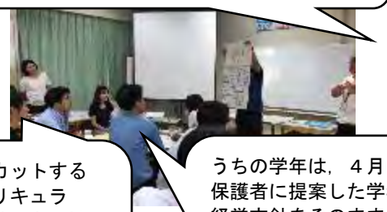
来年は，３年生。初めての学級解体が待ち受けているね。新たな学級を上手にスタートできるといいな
学級だけではなく学年を意識して交流できるように，今から育てていきたいですね

★話し合いを可視化し，テーマや構想を決定



★各学年の構想を共有

３年生は「気付く力」を学年全体で育みたい資質・能力に設定しました。



単に時数をカットするだけが，カリキュラム・マネジメントではないとすると，もう一度考え直す必要があるなあ
うちの学年は，４月に保護者に提案した学年経営方針をそのまま使えるな。でも，途中でカリキュラムを変更することもできるんだな

活動の成果：
【教科横断的な視点でのカリキュラム・マネジメント】を校内研修の柱とし，各学年の教師の実態，児童の実態に即した取り組みを考えていく活動を通して，それぞれの強みをもとにした各学年ならではの取り組みを見出すことができた。また，中堅の教員にとっては，若手と共に学年を経営していく柱として，若手の教員にとっては，行事や他教科との連携を見据えた授業づくりの視点として，カリキュラム・マネジメントの視点が生かされていた。その結果，中堅も若手も同じ方向を見て，共に児童の資質・能力を育もうとする姿が見られた。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

〇「つくりながら学ぶ」形を校内研修で取り入れたことで，受動的な研修から能動的な研修へ
〇【カリキュラム・マネジメント】の視点を柱に置くことで，中堅教員も若手教員も同じ土台に
〇【教科横断的な視点】を打ち出すことで，それぞれの強みを生かすことができる

<エントリーシート> ※事務局記入欄 **No.：A－ 27**	部門 平成 29 年度 学校組織マネジメント指導者養成研修	学校名・氏名 岐阜県教育委員会　教育研修課　寺井聡
	活動名 主タイトル 「12 年目研修における取組」 副タイトル 「ミドルリーダー養成研修として」	

課題の設定：学校組織マネジメント研修受講者の意識変革をねらいとした研修の改善について

「学校組織マネジメント」という名称の響きから、兎角、受講者は受動的なスタンスを取りやすい問題がある。いわば、「マネジメントは管理職の役目であり、他人事である」という感覚である。この場合、受講者は組織の一構成員の視点しか持ち合わせていない。学校運営において、その年代に応じた主体的な参画のあり方を思索しにくいという認知的な立ち位置にいる受講者に対して、その意識変革を目的として、研修内容と研修方法の改善に努めた。

方針・計画：基本方針 「他人事としての捉えから、自分ごととして捉える視点を獲得させる」

仮説として、受講者は、「目に見える」範囲で「ものを考える」傾向にある。そこで、研修では、12 年間にわたる教師としての経験を振り返らせることで、受講者自身の「視野の広がりや指導力の高まり」を再認識させる。かつまた、ロールモデルとしての先輩教師と自身を比較させることで、現在の自分が後輩教師にとってどのように見えるのか内省させる。さらには、若手であった頃の自身の課題と現在の自身の課題に「変化が見られない」ことを再確認させることで、「現状に甘んじてよいか」という問いを示し、教師としての「自尊心」に揺さぶりをかける。この一連の心理的往還を意図的に研修プログラムとして組織することで、学校運営に対する受講者自身の参画意識の醸成を図る。

活動内容：

当課においては、毎年、12 年目研修受講者（※ミドルリーダーとしての成長が喫緊の課題として求められる世代）に対し、悉皆研修として「学校組織マネジメント」の内容を位置付けている。そこで、学校組織マネジメント指導者養成研修受講者は、成果還元として研修内容の企画と講座講師を担当している。

活動の成果：

当研修において、様々なワークシートを作成させることで、受講者は「目に見える」範囲で「ものを考える」ことから、次第に「現状に対する自身の不満や不安」に気づき、「成長・向上に対する意欲が、日々の多忙感から減退していたこと」を自覚することができ、未来志向の意見を寄せるようになった。具体的な言葉として、「目指す学校像に対してのSWOT分析は、これから自分が何をしていくのかを考える良い機会となった」との意見が寄せられている。かつまた、ロールモデルとしての先輩教師と自身を比較することで、現在の自分の在り方や、組織において自身に求められる資質も、若手であった頃の自分とは異なり変化していることを再確認した受講者も多数みられた。具体的には、「最近になり、『これからの自分は（10 年後に向けて）どうしたいのか？』と考え始めたので良い機会となった」、「ミドルリーダーとして自分の在り方を見直す機会となった。今後、後進の育成に当たる立場になったことを肝に銘じた」など、自らの意識改革を表現するようなアンケートの記述が見られた。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

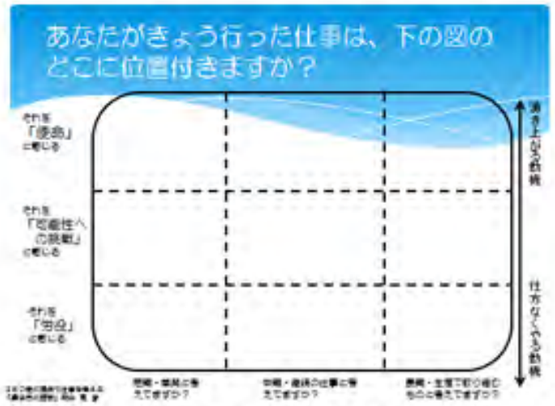
①「学校組織マネジメント」の概念の理解を受講者自身の気づきとするために、研修プログラムの在り方を、概念の説明ではなく、心理的変容のプロセスとして構築した点。
②学校運営への「主体的参画」のためには、受講者の意識変革が必要であるとして、「現在の自己の客観視」「ロールモデルとの比較」「過去の自分との比較」という作業を用いて、心理的・認知的な自己理解を促した点。

研修風景と展開・成果等

[研修風景]

[展開：講座後半 SWOT 分析]

[展開：講座前半 ワーク例「仕事の位置付け」]



「横を力の哲学」３６０度の視点で仕事を考える
（村山 昇 著）よりパワーポイント画面を作成

講座前半では、受講者自身に、「日々の仕事」の意味を内省させ、仕事の性格や優先順位等を整理させることで、仕事を「作業」として捉えがちになっている自分に気付かせるよう働きかけた。

講座後半では、グループによる SWOT 分析を用いた。そのねらいは、受講者毎に所属は違えど、「理想的な学校像」について語り合わせることで、初任の頃の「理想としての教師像」を思い起こさせるとともに、12 年間という教師経験の中で培ってきた、教師としての「学び」を意見交流という形で表現させた。

5 満足であった点、より良い講座とするために改善するとよい点をお書きください。

【満足であった点】
今まで思いつかなかった視点で物事を考えることができたこと　今自分が作っている仕事を見つめ直すきっかけがつかめたこと。授業は大切だが、それだけにとらわれずに学校という組織の在り方について考えることができたこと。

6 研修成果をどのように生かしますか？お書きください。
学校を組織として見た時に、自分の役割は何であるのかという点を考えて職務にあたろうと思いました。授業・校務分掌・HRにおいて自分のできること、やらなければならないことをきっちり知っています。

6 研修成果をどのように生かしますか？お書きください。
組織にいれば立場が変わって、みえるものも変わっていく。そのことは分かっているのだが、そういったものにどう対していくか…。そのヒントをいただけた。ただ、近道はなく、上の立場になればなるほど、足元をふり返って、足固めていく必要があることも感じた。

[成果 アンケートより]

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：A - 28**	部門　研修成果活用 （平成 30 年第１回 次世代リーダー育成研修）	学校名・氏名 青森県十和田市立四和小学校　寺沢陵子
	活動名 主タイトル（12 文字以内）コラボレーションの視点 副タイトル（16 文字以内）～今あるものをつなぐ・むすぶ～	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

・小中併置校のメリットを考える機会が少なかった。ともに過ごすことでどのような相乗効果が生じるのか，考えるきっかけが必要。
・多忙感から，じっくり時間をかけて業務を行うことができなかった。限られた時間の中でも，質の高いパフォーマンスが必要。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

・今あるもの（行事や活動等）をつないだり結んだりするコラボレーションの視点をもつことで，限られた時間の中でも質の高いパフォーマンスをすることができ，多忙感から充実感を得ることができるのではないかと考えた。
・そこで，喫緊の大きな行事（10 月 28 日小中合同文化祭と 11 月６日十和田市日本一事業交流発表会）の内容を同一のものになるよう組み立て，どちらのねらいも同時に達成できるよう工夫することにした。（図１）

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

８月30日…十和田市日本一事業交流発表会があることを学級児童に知らせ，その発表内容をみんなで考える。本校は「こころの輝き日本一～小中なかよしNo.１～」を目標に掲げている。
９月 14 日…家庭学習で小中併置のメリットや小中一緒に活動している内容等踏まえ,両発表のねらいを達成できる台本作りを全員で開始。（写真１）
10 月２日…プロジェクトメンバーを募り,劇の台本を熟考。全員のアイディアを盛り込んだ内容に仕上げる。
10 月 11 日…劇の練習開始。
10 月 28 日…小中合同文化祭で「僕たち小中なかよしNo.１」の発表と振り返り。（写真２・３）
11 月６日…十和田市日本一事業交流発表会で「僕たち小中なかよしNo.１」を発表。（写真４）
11 月７日…これまでの振り返り（写真５）

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

・発表を通して児童自身が小中併置のメリットを深く実感し,よりいっそう自校に対して愛着をもつことができた。
・全校児童生徒，保護者，地域の方々，市内全体に，これまで当たり前のように感じていた小中併置の良さを改めて実感してもらうことができた。（写真６）
・二つの行事のねらいを一つにまとめるというコラボレーションの視点をもつことで，時間短縮につながっただけでなく精神的余裕が生じ,「しなければいけない」という義務的思考から「したい！」という主体的思考をもつことができた。よって,限られた時間の中でも教師・児童ともに納得がいく充実感のあるパフォーマンスをすることができた。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

・コラボレーションの視点をもつことによって，準備や練習にかかる時間を減少することができる。
・教師が多忙感を感じていると児童にも悪影響を及ぼすが,精神的余裕が生じることで良い循環となり得る。
・今回は行事×行事だったが,小学校体育×中学校体育,子ども×地域課題,給食×起業家,学校×NPO など考えられる“今あるものをつなぐ・むすぶ”は限りなくあり,その効果も大きい。

図１：「コラボレーションの視点」について

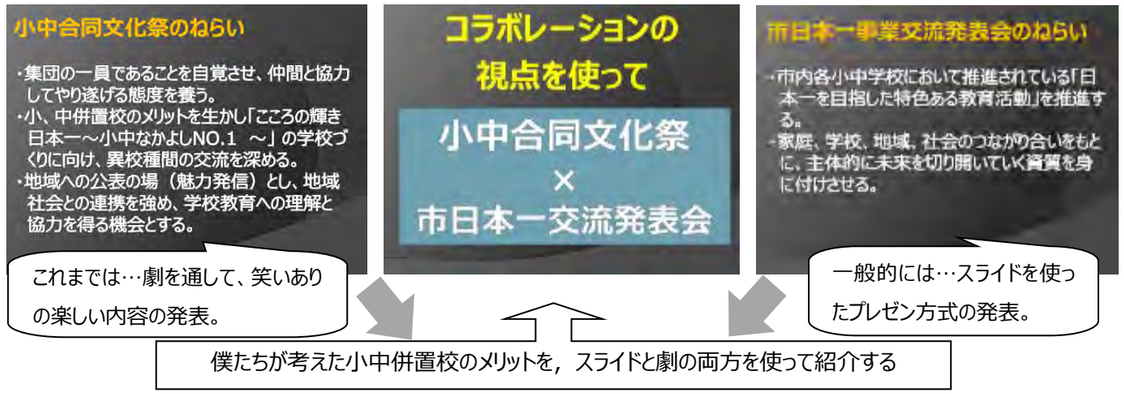
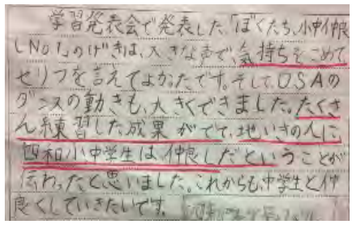
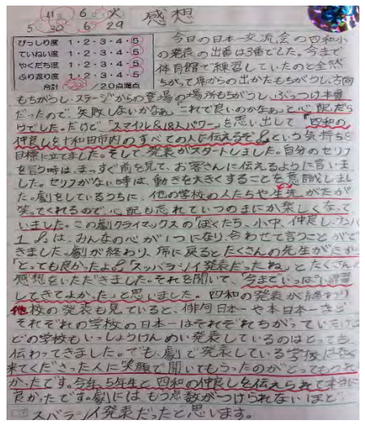


写真１～６：実際の活動の様子について

写真１	写真２	写真３
		
考えてきたアイディアをもとに台詞や構成を練り上げる。	小学生，中学生，保護者，地域の方々の前で笑顔で発表。	児童の振り返り。小中併置校のメリットを発表し，「小中なかよし」を再確認。
写真４	写真５	写真６
		
東奥日報（１１月８日付）にて，児童の発表内容が紹介される。	児童の振り返り。「四和のなかよしをたくさんの人に聞いてもらえて嬉しかった」	校長室だより，保護者の感想，中学生からのメッセージ。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：A - 29	部門 研修成果活用部門 （学校組織マネジメント指導者養成研修　Ａ日程）	学校名・氏名 杉並区立済美小学校（東京都） 竹内　明子
	活動名 （主タイトル）子供に伝統・文化教育を！（１２文字以内） （副タイトル）子供の意欲が湧く学校マネジメント（１６文字以内）	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

・目標：伝統・文化を大切にし、次世代へつなげていこうとする子供を育てられる教員の育成。
・課題：日本人としての自覚と誇りを育成するための「カリキュラムマネジメント」及び教員の「授業改善」

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

（１）方針：① 子供が深く理解するための、芸術家による本物の伝統・文化に触れるカリキュラムを充実。
② 他校・保護者・地域に発信することにより、活動の評価を高め、教員のやる気につなげる。
（２）計画：① 全学年の発達段階に応じた「伝統・文化体験授業」のカリキュラムマネジメントを実施。
② 各道の芸術家を講師とし、交流・体験活動を通して子供たちの理解を深めさせる。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

（１）発達段階に応じたカリキュラム作成（取り組み始めた平成 28 年度より毎年見直し）。→【図１】
（２）全学年における「伝統・文化体験授業」の実施（各道の芸術家が講師）。→【一例が写真１～６】
（３）各体験授業を特色あるビジュアルで紹介した「リーフレット」・「学校要覧」・「ホームページ」・「のぼり旗」などで他校・保護者・地域に発信（本校の誇るリーフレット・学校要覧御希望の方には配付可能）。
（４）東京都オリンピック・パラリンピック教育説明会で、本校の「伝統・文化教育」について、パワーポイントや映像・動画を使って都内の約 1,000 名の学校関係者や教員に紹介・発信（H30.4.23.）。

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入してください。

（１）本校教育調査の「伝統・文化教育」に関する児童・保護者の肯定的評価が、それぞれ ９３％・９０％と、高ポイントとなった。→【グラフ１・２】
→児童の声「歴史も理解でき親近感がわいた。」、「もっと調べてみたい。」、「心があり、世界に誇れると思う。」、「私の中で、どんどん面白いものに変化した。」、「人として生きる教養が身についた。」
（２）全学年の教員による、組織的かつ実施確実なカリキュラムマネジメント。
→教員の声「前年度からの PDCA を生かした全校カリキュラムを組めているので、学年に応じ、段階的に組織的に指導することができる。」
（３）講師（各道の芸術家）にも好評。持続可能な教育活動のための安定した講師活用が定着。
→講師の声「我々が大切に受け継いできた日本の伝統・文化を子供たちに伝えることができるのは、この上なく幸せなことでございます。」「こんなに組織的に取り組めている学校は、今まで見たことが無い。」
（４）組織的な「伝統・文化教育」の取組が、内閣府の「beyond2020」として認証された。→【図２】

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きにしてください

（１）本校の経営方針である「伝統・文化教育の推進」を全教員に理解させるため、年度始めと２学期始めに研修会を行い、全教員の共通理解を図った。→「組織的・計画的なカリキュラムマネジメントの実現」
（２）「日本の伝統・文化」に関する意識アンケートを６年生に２回実施。意欲・理解に関わる項目について調査し、体験授業を積むことによる児童の意識向上の変化を明瞭化した。→【グラフ３】
（３）作成したカリキュラムを基に教科横断的な計画・取組を行い、児童の学びを深めた（例：「百人一首と社会、三味線・長唄・箏・琵琶と音楽、着物と図画工作」など）。

【図１】
本年度のカリキュラム

« １年生 »
・伝統折り紙

« ２年生 »
・昔遊び

« ３年生 »
・箸の作法
・プロ棋士による将棋

« ４年生 »
・和菓子作り
・茶道
・琵琶

« ５年生 »
・箏
・着物の歴史と着付
・華道　・能楽

« ６年生 »
・糸操り人形ワークショップ
・三味線　・長唄
・百人一首　・能楽

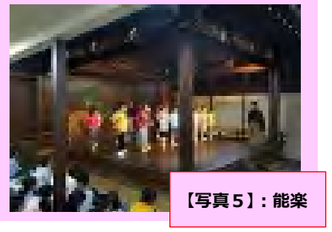
«全校»
・糸操り人形の観劇（文化庁）
・落語体験＆鑑賞

【写真１】：三味線・長唄

【写真２】：茶道

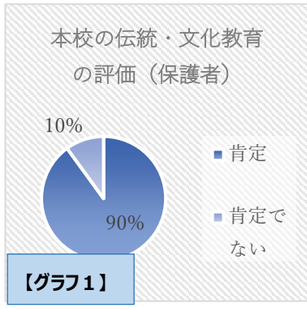
【写真３】：糸操り人形

【写真４】：プロ棋士の将棋

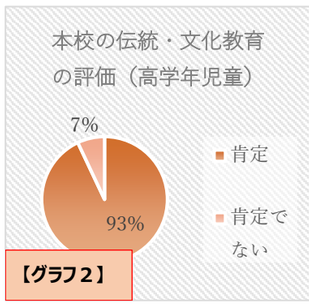

【写真５】：能楽

【写真６】：落語体験・鑑賞

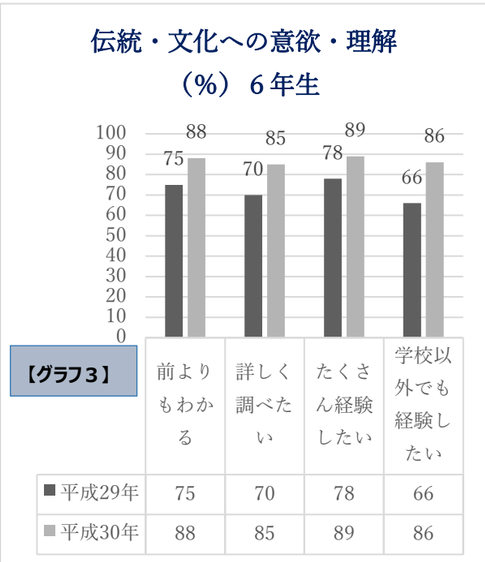
※上記写真は、体験授業の一例です。



【グラフ１】



【グラフ２】



【グラフ３】

【図２】
beyond 2020

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：A － 30**	部門 平成３０年度 第１回事務職員研修	学校名・氏名 仙台市立宮城野中学校　竹澤訓郎
	活動名 業務改善への意識高揚 話題提供とグループ討議をとおして	

課題の設定:
いま、自分たちがしている事務処理は教育にとって本当に正しいものといえるだろうか。
「業務改善」→「自分では考えられない」「時間がない」「大変」「自分は困っていない」→「このままで・・・」。そんな意識から脱却するために、事務職員同士で課題を共有し、話し合うことで前向きな気持ちを引き出していけないだろうか。業務改善に取り組むことで、事務職員だけでなく、教育の質の向上にもつながることを認識し、主体的に業務改善・学校教育に関わっていけるようにしたい。

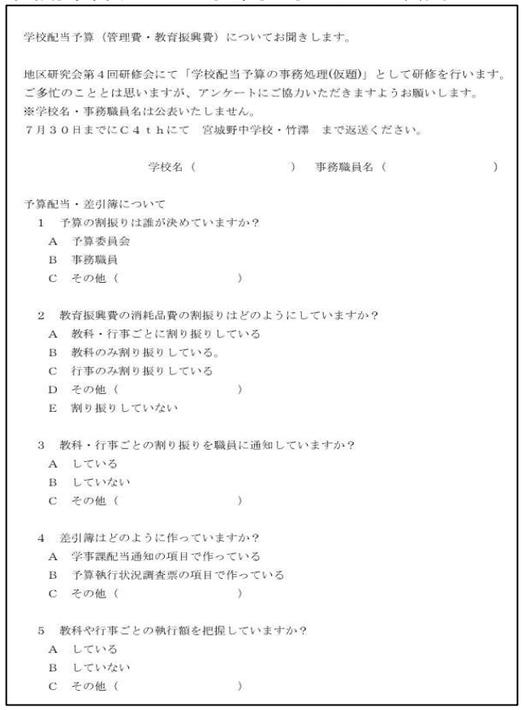
方針・計画:
事務職員は学校間の人事異動であれば基本的に仕事内容は変わらない。が、処理の仕方は学校によって違うことがある。単数配置を基本とする事務職員の仕事の処理方法は、経験の中で自己流が確立され、各校での勤務の際には、前任者の処理方法に自身のものを上書きし、統合していくものと思われる。
配当予算の執行処理を例に「異動ギャップ」と「規則と現場での処理の違い」、ギャップと違いが教育の質にもかかわっていくこと認識・共有し、根本的な業務改善を考えるきっかけづくりの場としたい。
研修会の設定
・地域の事務研究会が主催する研修会において「話題提供」「グループ討議」として企画する。
・話題提供は若年層(採用２年目の４名)が担当し自身が統括する。グループ討議は自身が担当する
・研修会での目標は「課題の認識と共有」「業務改善への意欲」とし、グループ討議の結果については内容を問わない。未来に向けて業務改善を考える、着手するきっかけにしたい。

活動内容:
① 予算執行処理を題材に、各校ごとの違い、規則での取り扱いとの違いを調べ話題提供として発表する。発表者は若年層とし、研究と発表の経験を積ませるとともに、不安や疑問を投げかけられるようにした。
② アンケート(写真 1)の回収。物品購入の際の購入決定方法や引き去り簿の作り方など、実処理での違いを調べた。対象は研究会の中で、研修企画を担当する研修部に所属する学校(16 校)。
③ アンケート内容の考察。教委が作成した支出処理についてのマニュアルの確認。学校現場での処理と規則上の処理の相違について洗い出し。
④ アンケート対象とした研修部との意見交換。(メリット、デメリットの説明)発表資料の作成。
⑤ 発表・話題提供(写真 2)(写真 3)
⑥ グループ討議(写真 4)　まとめ(写真 5)

活動の成果:
参加者の感想
・アンケートの結果、いろいろなやり方があることを知り、異動ギャップを感じるとともに不安になった。いつかギャップの少ない統一されたやり方に整理されるといい。
・学校現場の処理と規則で想定されている処理の乖離が大きい。乖離を埋めることで支出処理の煩雑さも解消されると思う。校内処理の統一化やシステム化により、教員にとっても異動ギャップがなくなるのではないか。
・予算配当から支出まで一連の処理について考えることでイメージを作りやすかった。意見の違いに新たな気づきがあった。考え方や視点を変えてみることも重要だと思った。
・改善には相当な労力と、それに対応する時間も必要だと感じる。しかし、どの学校に異動しても同じように仕事ができることは心理的にも体力的にもいいことだと思う。今回の支出に関して言えば、統一化されることで先生方にとっても、異動のたびにその学校でのやり方を覚える必要がなくなることと、予算配当についても先生方のやりたいことがどの学校でもできるようになるのではないかと思った。

アピールポイント(アイディアや工夫):
・異動ギャップを近いうちに経験する若年層(採用 2 年目の 4 名(うち 1 名は異動経験者))を発表とし、先輩事務職員に疑問や不安を話す機会とした。発表の場を規模の小さなものにし敷居を下げた。
・討議では、ランダムなグループ構成とし 1 グループ 7 名程度の人数にすることで、全員が意見を言えるようにした。

写真１　アンケート内容
・予算案の担当　・教育予算の振り分け
・引き去り簿の作り方　・購入決定の処理
異動ギャップについてを調べるための７項目


学校配当予算（管理費・教育振興費）についてお聞きします。

地区研究会第４回研修会にて「学校配当予算の事務処理(仮題)」として研修を行います。
ご多忙のこととは思いますが、アンケートにご協力いただきますようお願いします。
※学校名・事務職員名は公表いたしません。
７月３０日までにＣ４ｔｈにて　宮城野中学校・竹澤　まで返送ください。

学校名（　　）　事務職員名（　　）

予算配当・差引簿について
1　予算の割振りは誰が決めていますか？
A　予算委員会
B　事務職員
C　その他（　　）

2　教育振興費の消耗品費の割振りはどのようにしていますか？
A　教科・行事ごとに割り振りしている
B　教科のみ割り振りしている。
C　行事のみ割り振りしている
D　その他（　　）
E　割り振りしていない

3　教科・行事ごとの割り振りを職員に通知していますか？
A　している
B　していない
C　その他（　　）

4　差引簿はどのように作っていますか？
A　学事課配当通知の項目で作っている
B　予算執行状況調査票の項目で作っている
C　その他（　　）

5　教科や行事ごとの執行額を把握していますか？
A　している
B　していない
C　その他（　　）

写真２　発表資料
アンケート集計のグラフ化　　考察・メリットの記載
学校や教員に与える影響についても記載
疑問や課題の明示

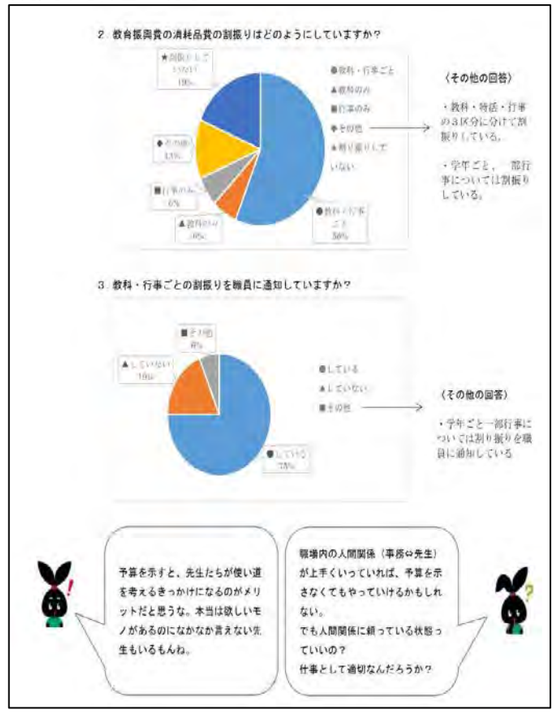
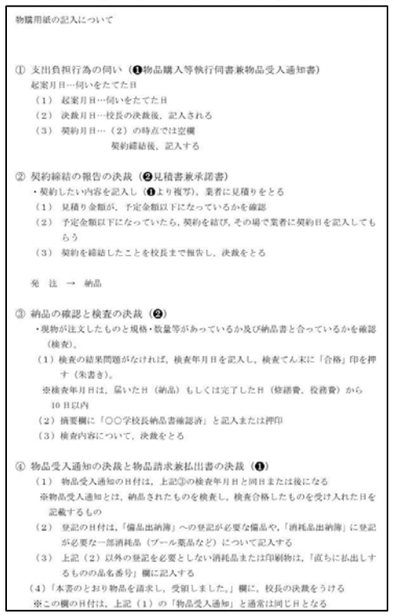


写真３
発表資料支出処理について規則上の取り扱いを様式毎、時系列に整理した


物購用紙の記入について

① 支出負担行為の伺い（❶物品購入等執行伺書兼物品受入通知書）
起案月日…伺いをたてた日
（1）起案月日…伺いをたてた日
（2）決裁月日…校長の決裁後，記入される
（3）契約月日…（2）の時点では空欄
契約締結後，記入する

② 契約締結の報告の決裁（❷見積書兼承諾書）
・契約したい内容を記入し（❶より複写），業者に見積りをとる
（1）見積り金額が，予定金額以下になっているかを確認
（2）予定金額以下になっていたら，契約を結び，その場で業者に契約日を記入してもらう
（3）契約を締結したことを校長まで報告し，決裁をとる

発　注　→　納品

③ 納品の確認と検査の決裁（❷）
・現物が注文したものと規格・数量等があっているか及び納品書と合っているかを確認（検査）。
（1）検査の結果問題がなければ，検査年月日を記入し，検査でん末に「合格」印を押す（朱書き）。
※検査年月日は，届いた日（納品）もしくは完了した日（修繕費，役務費）から10日以内
（2）摘要欄に「〇〇学校長納品書確認済」と記入または押印
（3）検査内容について，決裁をとる

④ 物品受入通知の決裁と物品請求兼払出書の決裁（❸）
（1）物品受入通知の日付は，上記③の検査年月日と同日または後になる
※物品受入通知とは，納品されたものを検査し，検査合格したものを受け入れた日を記載するもの
（2）登記の日付は，「備品出納簿」への登記が必要な備品や，「消耗品出納簿」に登記が必要な一部消耗品（プール薬品など）について記入する
（3）上記（2）以外の登記を必要としない消耗品または印刷物は，「直ちに払出しするものの品名番号」欄に記入する
（4）「本書のとおり物品を請求し，受領しました。」欄に，校長の決裁をうける
※この欄の日付は，上記（1）の「物品受入通知」と通常は同じ日となる

写真４
予算配当・予算配分の決定・物品購入・支出処理
４場面に分けて改善案や要望を付箋に書き込み
グループ討議を行った

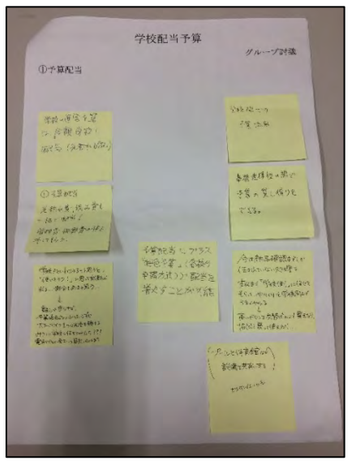
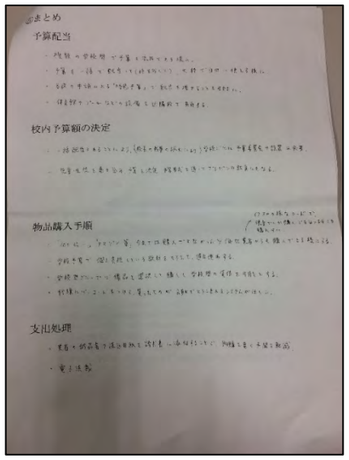


写真５　まとめ



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※事務局記入欄 **No.： A - 31**	部門 平成 30 年 第２回教頭・副校長研修	学校名・氏名 茨城県立佐竹高等学校・谷津　勉
	活動名 主題：　「カリキュラムマネジメント」 副題：～グランドデザインの作成を通して～	

課題の設定：

目標：次期学習指導要領のポイントであるカリキュラムマネジメントを推進する。
課題：次期学習指導要領は生徒の資質・能力の向上をめざすが，現状として教科横断的に生徒の資質・能力を向上させる方法を見いだすことが困難である。
これまで高等学校の各教科では，知識を中心とした学力の向上を目指してきたが，今後は学校全体を通して育成すべき資質・能力を明確にする必要がある。
※早稲田大学教授　河村　茂雄先生の講座などを参考に推進した。

方針・計画：

　学校全体で生徒の資質・能力の向上を図るため，学校の目指す生徒像を明確にし，それを下支えする資質・能力も明確にして，学校のグランドデザインを作成し，かつそれを各教科のグランドデザインに落とし込むことにより，教科間連携型の教育システムを構築する。
※平成 29 年度いばらき高等学校学力向上推進総合事業における茨城県立友部高等学校における取組
※別紙グランドデザインの考案者は横浜国立大学高木展郎教授である。

活動内容：

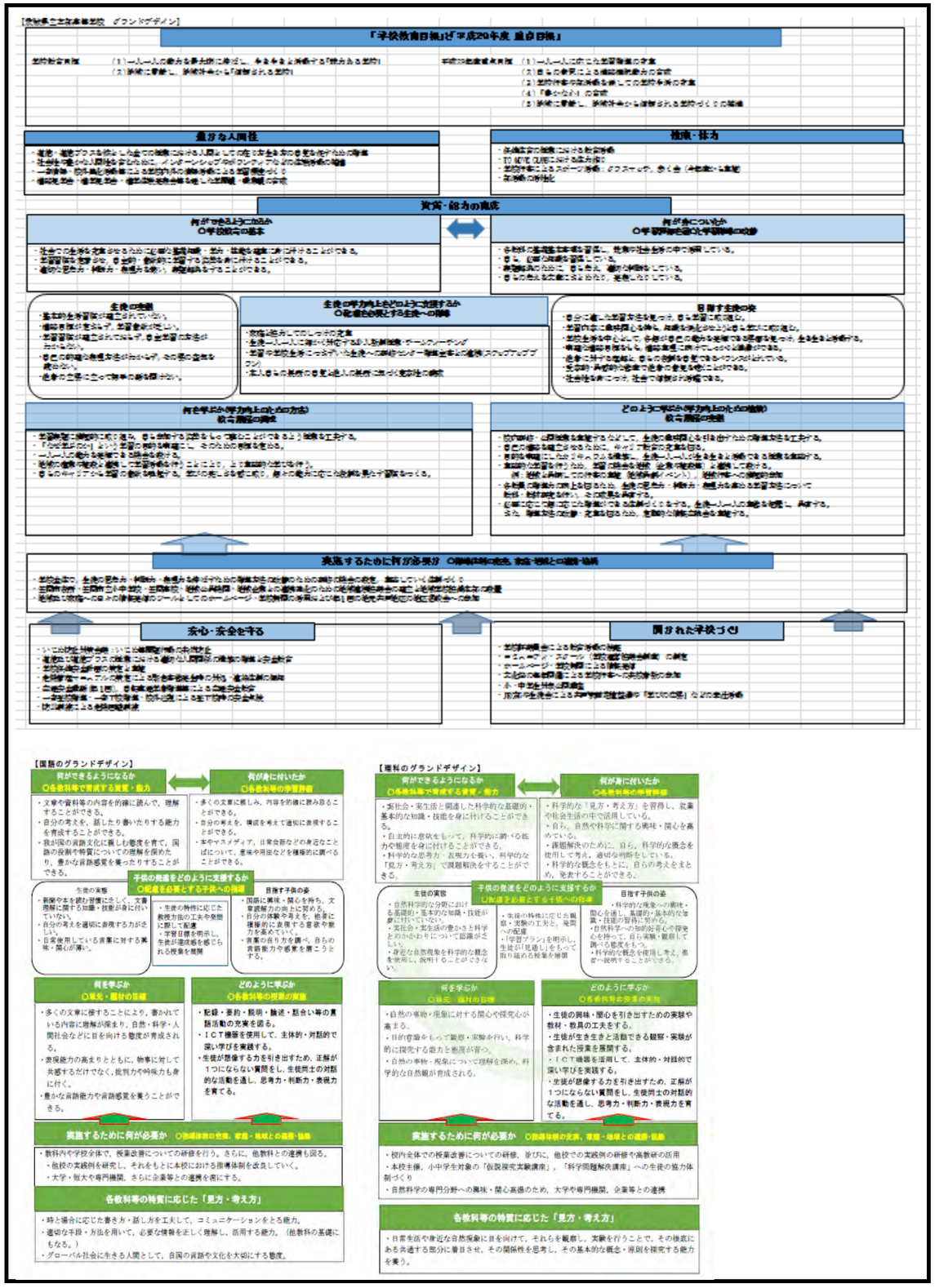
　新学習指導要領の構造を意識した 学校の グランドデザイン（別紙上部）を職員全員で作成する。そこで設定した目指す生徒像を育成するために，新学習指導要領の構造を意識した 各教科の グランドデザイン（別紙下部　例：国語・理科）を作成する。
　各教科の グランドデザインを全職員で共有することによって教科等を相互につなぎ，生徒が知識として「何を知っているか」にとどまらず，その知識を活用して「何ができるようになるか」まで発展させることを目指す。
※別紙グランドデザインは平成 29 年度に茨城県立友部高等学校で作成したものである。
※昨年度前職（茨城県教育庁高校教育課）時，上記事業の担当アドバイザーとして関わった。

活動の成果：

　学校及び教科のグランドデザインの作成の過程で，教員間でディスカッションできる（世代間）交流の雰囲気ができ，ボトムアップ型の授業研究（どのように学ぶか（主体的・対話的で深い学び））も活発になった。
　また，作成を通して，学校の目標をより具体に確認するとともに，各教科の目標が明確化，共有化された。そのため，教科書の内容理解等中心で漠然と行っていた授業展開への改善が試みられるようになった。
　さらに，授業に目標が立てられ，その振り返りもなされる PDCA サイクルにより，教育の質が向上した。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

〇新学習指導要領の構造を意識した学校のグランドデザインは，学校の目標と実現する方法が一目瞭然
〇新学習指導要領の構造を意識した学校のグランドデザインを全職員で作成する中で，生徒の実態を把握し，目指す生徒像を適切にセッティングすることができ，各教科等で育成すべき資質・能力を明確にできる。
〇新学習指導要領の構造を意識した各教科のグランドデザインを作成することで，各教科等で育成すべき生徒の資質・能力の相関を認識して授業に臨め，教科横断的に教育の質を向上させることができる



<エントリーシート> No.：A-32	部門 研修成果活用部門 （修了研修名：平成２９年度 第２回中堅教員研修）	学校名・氏名 鹿児島県鹿屋市立西原小学校 教諭　前田　剛
	活動名 同僚による服務研修の在り方 ～リスクマネジメントの考え方を通して～	

課題の設定：

本校では何か物事が起こってから対応することが多く，その前段階のリスクをコントロールすることへの意識が低いと考えられる。また，これまでは管理職からの服務指導を受けることが多く，自分のこととして深くとらえられていたかは疑問に残る部分である。そこで，本研究においてリスクマネジメントの側面から服務を捉え，双方向的な活動を通して研修をすることで，自分のこととしてとらえ，教職員の不祥事根絶につながり，高い職業倫理観をもつ教職員集団の育成につながると考えた。

方針・計画：

（１）リスクマネジメントの基本的な考え方を理解する。
（２）服務に関するリスクマップを作成する。
（３）服務に関するリスクについて，対応表の作成やロールプレイを行う。

活動内容：

（１）リスクマネジメントの基本的な考え方

学校には子供の安全・安心（施設事故，食中毒等），子供の問題行動（いじめ，不登校等），教職員の指導力（体罰，学級崩壊等），教職員の服務（情報漏洩，不祥事等）など通常の教育活動時に様々なリスクが存在している。これらのリスクを管理するために大切なことは，リスクコントロールとダメージコントロールである。被害を最小限に食い止めるには，どのように対処していけばよいかを常日頃から考えておく必要がある。【図１・２・３】

（２）服務に関するリスクマップの作成

リスクマップとは，リスクの大小を俯瞰的な視点で閲覧・比較・理解できるようにするために描かれる図表類のことである。縦軸を影響度（人的被害，金銭的損失，風評被害，教育活動の停滞・中断の４観点でランクを設定），横軸を発生可能性（発生頻度の目安）とし，それぞれ１～７のランクを設定した。【図４】服務に関して洗い出したリスクを付箋に書き，それをリスクマップ上に貼っていきながら対策優先リスクについて話し合いを行った。【写真１・２】【図５】

（３）リスク対応表の作成

対策優先リスクについて，リスクコントロールとダメージコントロールについてグループで話し合った。最後は全体でそれぞれのグループの発表を行い，リスクに対する備えの共有化を図った。【写真３】

（４）ロールプレイ

２回目の研修では，前回出された対策優先リスクについてより具体的なリスク事象を提示し，保護者会で説明するという設定で，職員側と保護者側に分かれそれぞれで保護者会での対応を考えた。【表１】その後，ロールプレイ・シェアリング【写真４】を行い，それぞれの事象についてどのようなリスク・ダメージコントロールが必要か自分のこととして考えてもらった。

活動の成果：

研修後のアンケートで以下のような感想をいただいた。（アンケートの数値結果は【表２・３】参照）

○　ロールプレイすることで，実際想定される質問や返答を考え，我が身に起こりうる可能性について身につまされた。

○　改めて自分のこととして考えることができた。リスクコントロール，ダメージコントロール両方を考えながら職務を全うできるようにしていきたい。

服務について自分のこととしてとらえてもらうことができたと思う。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

○　リスクマネジメントの考え方を伝えることで，普段からできるリスクコントロールについて理解を深めることができた。事後の対応ではなく事前の対応の必要性を感じてもらうことができた。

○　ロールプレイでは，グループで保護者会での対応を考えることで，チームで対応することの大切さを感じてもらうことができた。

○　中央研修で学んだことを他校の先生方にも伝え，広めることができた。

図１【教職員の服務】

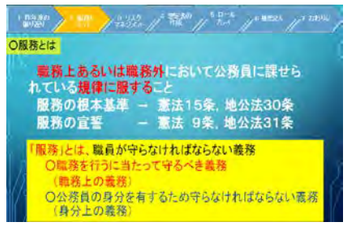


図２【リスクマネジメント】

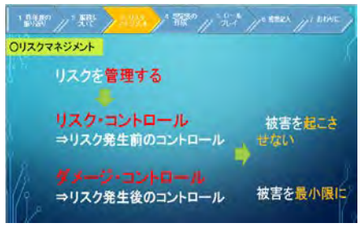


図３【起こりうるリスク】

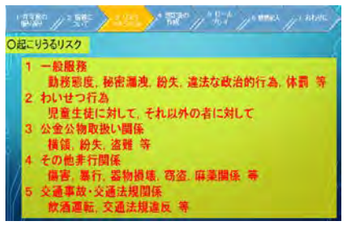


図４【リスクマップ】

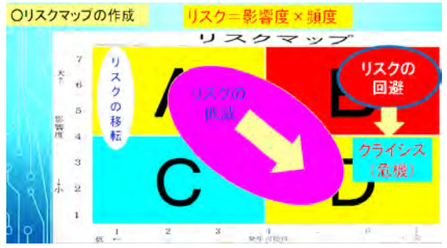


写真１【付箋記入】

写真２【リスクマップの作成】

図５【作成した想定リスク表】

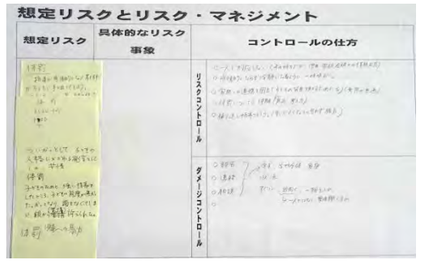
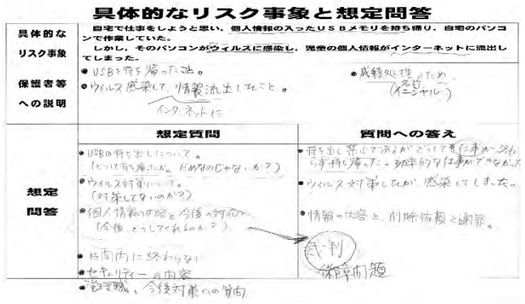


写真３【発表】

写真４【ロールプレイ】

表１【想定問答表】



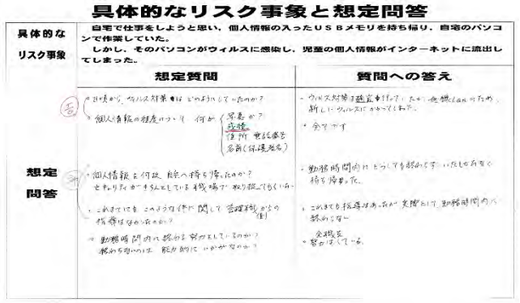
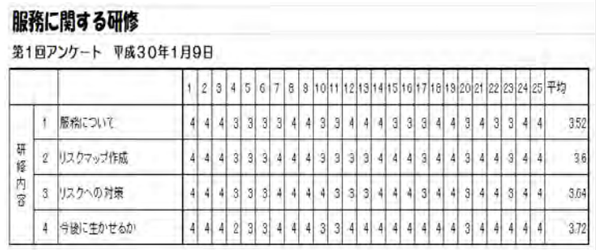


表２【第１回研修アンケート結果】



服務に関する研修

第1回アンケート　平成30年1月9日

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	平均
研修内容	1	服務について	4	4	4	3	3	3	3	4	4	3	3	4	4	4	3	3	3	4	4	3	4	3	3	4	4	3.52
	2	リスクマップ作成	4	4	4	3	3	3	4	4	4	3	3	3	3	4	4	4	4	3	4	4	3	4	4	3	4	3.6
	3	リスクへの対策	4	4	4	3	3	3	4	4	4	4	3	3	3	4	4	4	3	4	4	4	3	4	4	3	4	3.64
	4	今後に生かせるか	4	4	4	2	3	3	4	4	4	3	3	4	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	3.72

表３【第２回研修アンケート結果】

服務に関する研修

第2回アンケート　平成30年8月28日

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	平均
研修内容	1	服務について（確認）	4	4	4	4	3	3	3	4	4	4	3	4	3	4	4	4	3.6875
	2	リスクマネジメントの考え方	4	4	4	4	3	3	3	4	4	4	3	4	4	4	4	4	3.75
	3	想定表作成（グループ）	4	4	4	4	3	3	3	4	4	4	3	4	4	4	4	4	3.75
	4	ロールプレイ（グループ）	4	4	4	4	3	2	3	4	3	4	2	4	4	4	4	4	3.5625

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

<エントリーシート> ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：A － 33	部門 研修成果活用部門 平成２６年度第１回学校教育の情報化指導者養成研修	学校名・氏名 群馬県立太田東高等学校　今川一生
	活動名 プログラミング教育の取組 ～生徒によるプログラミング教室～	

課題の設定：

【目標】 プログラミング的思考を育む教育機会の創出
【課題】
（１） ICT や NW 環境の未整備　（教育用 PC は 5.9 人に一台、Wi-Fi 整備率は 29.6%）
（２） 教材の開発や指導事例集の未整備　（教育教材、指導ノウハウの不足）
（３） 教員研修や教員養成プログラムなど研修制度の未整備　（担当教員の PG スキルに依存）
（４） 教育機会の地域間格差の拡大　（PG 教室など都市部に集中）
（５） プログラミングの指導者不足　（多くの教員がプログラミング未経験）

方針・計画：

上記の課題を踏まえ、「生徒によるプログラミング教室」を夏休みに本校のパソコン教室で企画した。
（１） プログラミングの教育機会・体験の提供
（２） 本校の生徒を指導者（講師）として育成
（３） プログラミング教材の開発および指導案作成

活動内容：

本校の生徒（12 名）が講師となり、小学校の児童を対象にビジュアルプログラム言語である Web 版の「Scratch」を用いて、児童がゲーム作りに挑戦するという内容のプログラミング教室（約２時間）である。
（１） 新学習指導要領を見据え、講師向けの事前研修を実施　（事前準備）
（２） 児童向けの教材を生徒と共に開発　（事前準備）
（３） 導入時に、これから自作する「パックマン」のゲームを体験　（活動実践）
（４） ゲーム作りをしながらアルゴリズムの３つの基本構造を段階的に学習　（活動実践）
（５） 乱数を生成する方法や変数の扱い方法などゲーム作りの要素として学習　（活動実践）

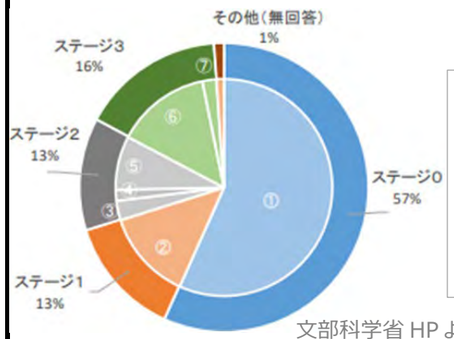
活動の成果：

（１） 児童・生徒が興味・関心を高めながら、プログラミングの楽しさを体験することが出来た。
（２） 児童・生徒ともに、プログラミング的思考を育む機会を提供することが出来た。
（３） 新聞のメディアに取り上げられ、地域に開かれた学校づくりの一助として貢献できた。
（４） 「人に教える」という学習形態は、能力や資質を高めるための有効な教授方略であることが分かった。
（５） 指導方法、教育教材の開発などのノウハウを蓄積することが出来た。
（６） プログラミング教育「導入モデル授業」として、出前授業など学校への横展開が可能になった。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

（１） Scratch の ID と PW を発行し興味・関心を持った児童が自宅でも継続的に取組・反転学習できる。
（２） 「平均学習定着率」が高いと言われている「人に教える」という学習形態を取り入れている。
（３） 親しみやすい高校生が講師をすることで、児童にとってプログラミングを身近に感じることが出来る。
（４） 生徒にとって、人に教えるという貴重な経験を積みながらプログラミング的思考を育むことが出来る。
（５） 参加した児童全員に「修了証」を用意し、担当講師より児童に授与している。

■教育委員会等における小学校プログラミング教育の取組状況（n=722）



文部科学省 HP より

取組状況のステージ分類
ステージ０：特に取組をしていない。
ステージ１：担当を決めて検討中。
ステージ２：研究会や研修を行っている。
ステージ３：授業を実施している。

写真１　プログラミング教室の様子

■活動実践（導入、展開）

図１　パックマンのゲーム

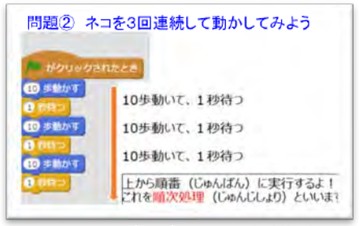


図２　アルゴリズムの順次構造

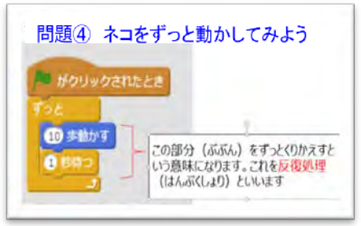
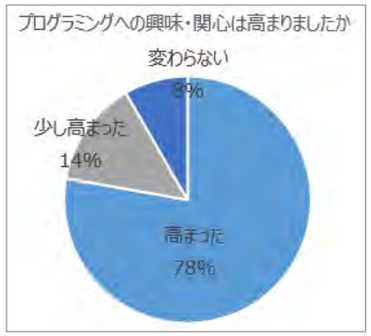
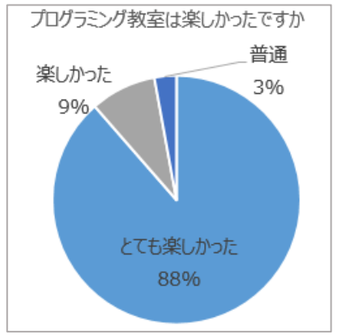
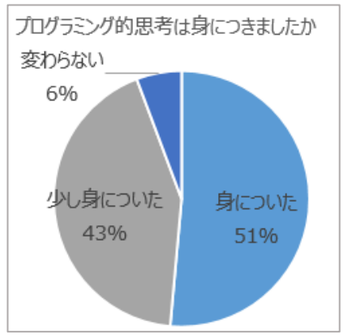


図３　アルゴリズムの反復構造

■WEB アンケート調査結果（児童、生徒）（n=35）







■プログラミング教室を終えた感想（児童、保護者）

初めてプログラミングをやりました。とても高校生のお兄さんや、お姉さんがわかりやすかったです。とってもプログラミングはおもしろいなと思いました。とってもよかったです。スクラッチもまたできたらもう一回やりたいと思いました。また、期会あたら参加したいです。

ゲームをつくれてたのしかったです。自分でゲームをつくるのがはじめなので、どきどきしました。

本日は、貴重な体験が出来る教室に参加させて頂き、誠にありがとうございました。息子も、とても楽しく参加出来て喜んでおります。高校生の方々や先生のあたたかいご指導、本当に感謝しております。また、機会がありましたらぜひ参加したいです。
本当にありがとうございました。　Ｔさん

写真２　新聞に掲載

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※事務局記入欄 **No.：A-34**	研修成果活用部門 （平成２９年学校組織マネジメント指導者養成研修）	学校名・氏名 山口大学教職大学院・田中由起枝 （萩市立大島小中学校）
	活動名 小中一貫カリキュラム開発　　ＳＷＯＴ分析と戦略マップの活用	

課題の設定：勤務校が平成 30 年度から小中一貫教育校としてスタートするにあたり、その核となる小中一貫カリキュラムを作成することとした。その際、小中一貫教育と極めて親和性の高いコミュニティ・スクールの機能を活用し、「萩大島地域の人、もの、こと」を活かした、９年間の系統性・連続性・一貫性のあるカリキュラムを主役である児童生徒の視点を存分に活かしながら開発するという課題を設定した。

方針・計画：児童生徒に身に付けさせたい力を明確にし、それを児童生徒と学校、地域関係者が共有しながら萩大島地域の特性を存分に生かした教育活動を展開すること。大人からの押し付けではなく、児童生徒の視点で「萩大島地域を魅力化する」ための活動をチームごとに考え、実践すること。主体性を発揮するために、児童生徒一人ひとりが戦略マップを作成し、具体的なゴールやそれを達成するための手立てを設定した。
　実践後の「振り返り」によって児童生徒に目指す資質・能力が身についたかどうかを自覚させることで、新たな気づきと学びへの意欲や期待を誘発することを目指した。

活動内容： 学校を取り巻く環境分析（写真１）を行い、学校としての「強み」と「機会」を活かしたカリキュラム編成を行った。（写真２）そのカリキュラムを土台として４チーム（萩大島の里海、萩大島の里山、萩大島の伝承、未来創造人）に分かれ、児童生徒が各自で戦略マップ（萩大島の未来予想図）を作成（写真３）し、計画的に実践を重ねた。（写真４）毎時間リフレクションを行い、次時の学習内容に見通しを持ったり、自分自身や友人の良さに気づいたりした。（写真５）行事の終了後には直後改善ワークショップを行い、課題から次回への改善策までを打ち出した。（写真６）これまで大人だけで行っていた行事の振り返りにも児童生徒あるいは中学生が参加することで振り返りの記述内容が企画側の視点へと成長した。（写真７）また、児童生徒は各チームのメンバー全員の対話による課題改善を積み重ねてきた。（写真８）

活動の成果： 児童生徒の主体性が飛躍的に向上したこと
　カリキュラム開発にあたり、児童生徒が SWOT 分析を行い、様々な立場の大人との熟議を重ねながら具体的な学習内容を考え、構想したことで、学習に対しての当事者意識が芽生え、学校生活の様々な場面で児童生徒の主体性が増し参画意識が醸成された。実際に中学生は、この学びで身についた力として、リーダーシップ、企画力、礼儀、伝える力、責任感、計画立案力、段取り力を挙げている。さらに、この学びの良さとして、日ごろは関わる機会のない地域の方々と触れ合うことで地域の方々の温かさや優しさを実感したこと、これまで知らなかった地域産業の魅力や伝統的な建造物の価値を知ったことなどを挙げている。始めは遠慮がちであった小学生も活動を重ねるうちに、自分の考えを臆することなく発言するようになったり、「自分もあのように行動したい」と中学生をロールモデルにしたりといった小中学生の共学びによる成果も得ることができた。
　教職員からは、SWOT 分析とその後の学習内容の考察が土台となり、児童生徒の考えやアイディアが整理され、具体的なイメージをもって戦略マップを作成することができたこと、地域の方から児童生徒がダイレクトに様々な情報を得ることで、情報を取捨選択する力やコミュニケーション能力が向上したこと、各チームの活動の中で PDCA を実践することで課題解決力や外部との交渉の仕方を身に付けることができたといった成果が挙げられた。そして何より、地域の方々からは我々にとっての学びになるし、元気をもらえるという声をいただいた。

アピールポイント（アイディアや工夫）：児童生徒が構想する「ふるさと大島学習」
・小 3 から中 3 までの児童・生徒が縦割りチームで、萩大島地域のＳＷＯＴ分析を行い、「萩大島地域の魅力化」に向けて、主体意識をもって地域の強みを活かした戦略マップを作成し、実際に活動してきたこと。
・戦略マップでゴールまでの道筋を可視化することにより、児童生徒がチーム一丸となって活動を進めてきたこと。
・児童生徒が「主体性」「関わる力」「粘り強さ」の３つの力を常に意識して学習を進めてきたこと。
・萩市教育委員会主催のミドルリーダー研修会にて、講師として本実践のワークショップ研修会を実施したこと。
・県内市町の教育長会議、市内小、中学校の校長会において本取組の概要を発表したこと。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：A-35**	部門　研修成果活用 平成２９年度 健康教育指導者養成研修	学校名・氏名 鹿児島県南九州市立松ヶ浦小学校 教諭　内野　裕太
	レジリエンスの育て方 ～学級活動⑵・⑶を中心とした実践～	

課題の設定

本校は，全体的に自己肯定感が低く，自分に自信がもてず，課題を粘り強く解決することができない児童が多い。そこで，学級活動⑵・⑶における学習過程（「磨き合う」過程の新設）を工夫・改善したり，学級活動⑶におけるキャリア教育を充実させたり，主にソーシャルスキルトレーニングを行う「スキルタイム」を朝の活動（月に二度で１回 15 分）に設定したりすることで，児童の意思決定スキルや自己指導能力などが高まり，レジリエンスが高まると考えた。

方針・計画

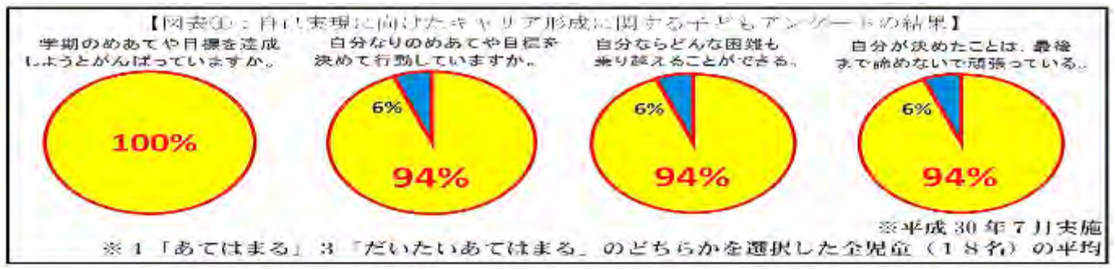
⑴学級活動⑵・⑶における学習過程（「磨き合う」過程の新設）の工夫
⑵学級活動⑶におけるキャリア教育の充実
⑶「スキルタイム」の設定

活動内容

⑴強い決意をもって個人目標や実践方法を意思決定するための学習過程の工夫・改善　（図①）
⑵学級活動⑶ーア　題材：めざせ！理想の自分！【複式３・４学年】　（図②）
⑶年間を通しての自己の成長が実感できる活動及び環境整備の工夫　（図③）
⑷児童アンケートを基にした意図的・計画的な「スキルタイム」スキルタイムの実施（図④）

活動の成果

⑴学級活動⑵・⑶に「磨き合う」過程を位置付けたことで，「決める」過程において，強い決意をもって個人目標や実践方法を意思決定でいるようになった。
⑵児童の自己実現に向けたキャリア形成の素地が育まれ，どんな困難な状況においても，しなやかに適応し，生き延びる力であるレジリエンスが高まってきている。【図表①】



アピールポイント（アイディアや工夫）

⑴学級活動⑵・⑶における学習過程（「磨き合う」過程の新設）の自校化

⑵学級活動⑶における先進的な実践研究

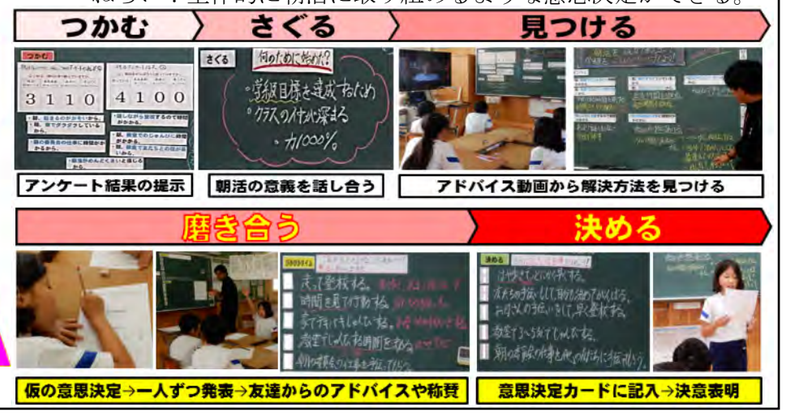
⑶研究成果の還元の工夫
※福井県立丹生高等学校の実践を参考

【研究成果資料・動画】

【図①：強い決意をもって個人目標や実践方法を意思決定するための学習過程の工夫・改善】

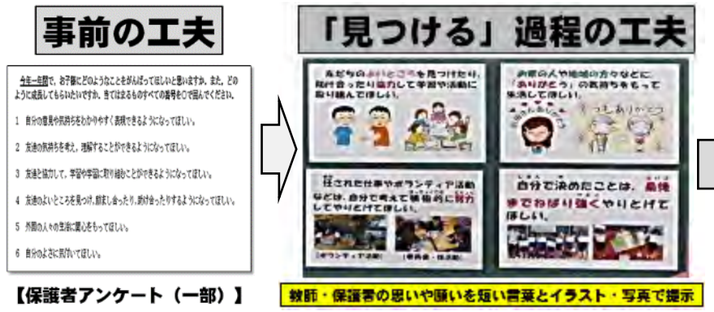
【本校独自の学習過程】

実践例：学級活動⑵ーア
題　材：朝活を充実させて，学級をパワーアップさせよう！
ねらい：主体的に朝活に取り組めるような意思決定ができる。



【図②：学級活動⑶ーア　題材：めざせ！理想の自分【複式３・４学年】

ねらい：教師や保護者の思いや願いを基に一年間の個人目標を意思決定することができる。



【保護者アンケート（一部）】

【一部抜粋（自己肯定感の内容）】

【図③：年間を通しての自己の成長が実感できる活動及び環境整備】

活用

【図④：意図的・計画的な「スキルタイム」の設定】

10	17	・わたしはだれでしょう（低学年） ・わたしはメッセージ（中学年）	コミュニケーションスキル 意志決定スキル 情動対処スキル ストレス対処スキル	学級ＳＳＴ
		・よりよい自分へステップアップ（高学年）	対人関係スキル ストレス対処スキル 他者理解スキル	
	22	・友だちのよさを伝えよう ＊学級活動⑶との関連	他者理解スキル コミュニケーションスキル	学級タイム

【年間計画の一部】

【ねらい】
自分の気持ちを相手に伝えるとき，自分も相手も大切にしたアサーティブな表現ができるようにする。

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：A-36**	部門 研修成果活用部門 平成 28 年第１回副校長、教頭等研修	学校名・氏名 新潟県 新発田市立佐々木中学校 森谷　優子
	活動名 生徒の力を育む教育課程 総合的な学習の時間を核にカリマネ	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

当校の課題は、一小一中、学年１クラスの中で９年間続く狭い人間関係で過ごしていることによる、人間関係・社会形成能力の不足、コミュニケーション能力の低さであった。生徒にこれらの資質・能力を身に付けさせ、活用することの楽しさを目標とした。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

この課題を解決するためには、教育課程を社会に開き、地域と学校で生徒を育てていく活動が必要だと考えた。総合的な学習の時間を核に、国語科、学級活動などで、人間関係・社会形成能力、コミュニケーション能力の育成を教科横断的に仕組めば、生徒の資質・能力は、伸びていくと考えた。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

生徒がフィールドワークで地域のよさと課題を知り、自分たちの課題を「地域の大人と子どもの交流が少ない」ことと設定した。その課題解決を図ろうと、「中学生の力で佐々木を活性化プロジェクト」を企画した。「活性化のためにやってみたいこと」「自分にできること」「自分たち中学生に周囲が期待していること（求められていること）」を考えながら、アイデアを出し合い、プロジェクト名は「佐々木 PR 大作戦」とした。アドバイザーを迎えての中間発表会を経て、「中学生の力で佐々木を活性化プロジェクト」を実行した。（写真３）（写真５）

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

＜生徒＞
・９割以上の生徒が、国語科で学習した内容や方法が、総合的な学習の時間に役に立ったと感じている。具体的には、プレゼンテーション、質問力、スピーチ、討論ゲーム等があげられた。また、国語科で学習した内容や方法は、他教科、他領域、学校行事、日常生活で役に立つと実感していた。（表１）
・活動が役に立ったという実感した生徒ほど、さらに自分の力を伸ばしたいと意欲的に考えるようになっている。（図１）
＜地域・保護者＞
・学校へ賞賛や激励の手紙やコメントが多数寄せられ、学校へ足を運んでくださる方、協力してくださる方が増えた。「PR マップにこいのぼりを取り上げていただいて、また来年もやろうと励みになりました」「自分たちの地域のよさを改めて知った気がします」「中学生に刺激され、自分たちも何かやらなきゃという気持ちになったよ」などの声が寄せられ、自治会でも地域コミュニティを見つめなおす機運が高まった。
・同時開催イベントとの相乗効果もあり、「佐々木ＰＲ大作戦」では、全校生徒６７名に対し、６００人を動員した。
＜教職員＞
・日常から、活動ありきではなく、資質・能力を高めるための活動だという視点が共通理解されるようになった。
・研修の振り返りコメントから３年間の教育課程で資質・能力をスパイラルに育成するという視点がもてた。

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

・総合的な学習の時間を核とした教科横断的なカリキュラム（写真１）
・生徒、地域、保護者、教職員が一同に介し、積み重ねとつながりのあるファシリテーション　（写真２）
・生徒の作った成果物（ＰＲマップ、ＰＲスライド、ＨＰ）（写真４）
・総合的な学習の時間のルーブリックを作成し、生徒と教職員が共通理解

写真１　校内研修（28 年 12 月）

写真２　佐々木の子どもの未来を語る会（29 年８月）

写真３　佐々木活性化プロジェクト中間発表会（29 年 11 月）

写真４
新潟日報
新聞記事
（30 年２月）

新発田・佐々木中1年
地域の魅力PR大作戦
あす 市役所でマップなど配布

新発田市の佐々木中1年生が11日、市役所札の辻広場で地元の佐々木地区の魅力を発信するPR活動を行う。地域の見どころを満載したマップと地元産コシヒカリのおにぎりを配るほか、地域を紹介するスライドショーを上映し、地区への来訪を呼び掛ける。

1年生21人は総合学習の一環で、佐々木地区の活性化プロジェクトに取り組んでいる。地域の魅力に触れ、「佐々木に来たことがない人や知らない人にも魅力を伝え、来てほしい」と「佐々木PR大作戦」と銘打って企画した。

太田川の水面に映える「飯豊の桜」や聖徳太子の像がまつられている太子堂といった名所8カ所を写真と文章で紹介するA3判四つ折りマップ600部と、マップに載せきれなかった地域の見どころを紹介するスライドを作成した。

「しばたオイスターバー」のイベントが開かれる札の辻広場で11日午前10時～正午に生徒たちがマップと地元産コシヒカリの塩おにぎりを配る。

スライド作成に携わった宮下真悠子さん（12）は「少ない文字数で魅力を伝えるのが難しかった。来てくれた人に笑顔になってもらえるように、私たちも笑顔でマップやおにぎりを渡したい」と話した。

地域の見どころを載せたマップなどを手に、魅力発信を行う佐々木中の生徒＝新発田市

写真５　「佐々木ＰＲ大作戦」（30 年２月）

図１　生徒ｱﾝｹｰﾄ（30 年２月）

今回の「プロジェクト」を通じて感じた「必要な力」
〇会話を弾ませる力〇自分の思いを人に伝える力〇相手の話を深くできるようなコミュニケーション力〇佐々木を愛する力〇協力して物事を考えて、一つにまとめる力〇自分から積極的に動いていく力〇いろいろな人と話すことができる力

表１　ＮＲＴ全国標準学力検査国語の推移（平成 29 年度入学生）　※毎年、４月に実施

中領域	小問	平成２９年度			平成３０年度		
		正答率	全国正答率	全国比 全国：100	正答率	全国正答率	全国比 全国:100
話すこと聞くこと	目的や場に応じて話すこと	91.7	86.9	106	89.7	74.7	120
	意図を考えながら聞くこと	88.2	85.5	103	83.3	60.0	139
	適切に話し合うこと	93.4	85.0	110	90.3	61.8	146

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

＜エントリーシート＞ ※事務局記入欄 No.： A -37	部門 平成 30 年度第 4 回中堅教員研修	学校名・氏名 香川大学教育学部附属坂出中学校 大西　光宏
	活動名 ミッションの達成を目指す組織づくり SWOT 分析を用いた組織マネジメントを通して ※どのような課題をどのような手法で解決したのか、わかりやすく伝える案件名を記入してください。	

課題の設定： ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。

・香川大学教育学部の附属中学校として、
① 教育の理論と実際に関する研究と実証を行う
② 香川大学生の教育実習を行う
こと以外に、「地域貢献」が非常に強く求められている現状から、本校のミッションの達成のための組織づくりが急務である。

方針・計画： ※課題を解決するために仮説を立てて、活動内容を組み立てたのか、記載してください。

・本校のミッションの達成をするために、
① 本校の経営資源を確認して、達成のための課題を克服するために、どのようにその経営資源を活用したり、不足している新たな資源を取り入れたりするのかを明らかにする。
② 優先順位の決定。
③ 既存の組織や新たなプロジェクトチームの結成によって、改善への取り組みを行う。④取り組みの振り返りと改善案。

活動内容： ※方針・計画に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください

① 研究小グループによる SWOT 分析の実施（8 月）
② 運営委員会において、分析結果の共有と優先順位の決定（9 月）
③ 「地域貢献」プロジェクトチームを立ち上げ、県教育委員会や公立中からの要望のヒアリングの実施。それらをもとに実際に行っていることと、今後の計画立案作成（9 月）④実践（9 月～）④評価と振り返り（2～3 月）

活動の成果： ※課題や目標に対し、どんな影響、変化あったか、職員や参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

① SWOT 分析の実施による、教職員の意識向上（本校のミッションの達成に向けた課題把握）
② 「地域貢献」を「意識した取り組みが活発化（公立中への指導 H29 25 名→H30　41 名:10 月末）
③ 附属坂出学園による地域貢献のあり方をまとめ、視覚化する
④ 生徒指導に対しても SWOT 分析を行い、本校の取り組みを見直すきっかけに
⑤ 全教職員が、本校のミッションを意識した、教育活動への取り組みが増えてきたこと

アピールポイント（アイディアや工夫）： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください

① 視覚化に伴う、全教職員のミッションへの意識向上とともに、教育活動への積極的な取り組み
② 地域貢献への新たな取り組みへのアイディアが生まれてきた
③ 多忙な日常生活の中でも、教職員の明るい笑顔や会話が増えている

＜写真、図表添付欄＞

図 1　1 回目に行った SWOT 分析

図 2　2 回目に小グループで行った SWOT 分析

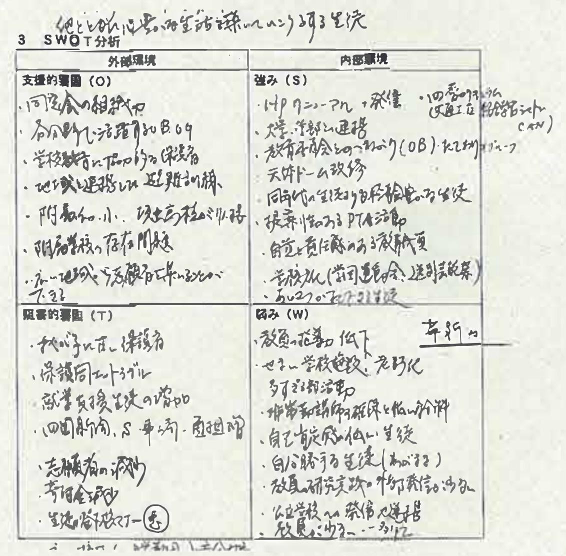


図 3　附属坂出学園による地域貢献のあり方

図 4　地域貢献…公立中学校への指導訪問数の増加

平成３０年度　視察研修来校者・指導依頼一覧
（１０月３１日　現在）

月	視察研修来校者（人数）	件数（人数）	指導依頼（アドバイザー含む）（教員名）	のべ人数
4				
5	３０日　コロラド州立大学生来校　英語授業参観	9名	３１日　坂綾中研各部会指導（9 教科）	10名
6			１５日　仲善中研指導（山城・大西さ）	2名
7			２７日　仲善中研指導（大西さ） ３０日　坂綾中研指導（渡辺）	1名 1名
8			２２日　坂綾中研指導（渡辺）	1名
9			１３日　香中国若年研指導（大西さ・田村） ２０日　香中美若年研指導（渡辺） 香中社若年研指導（山城） ２１日　香中家若年研指導（地下） ２５日　坂綾中研各部会指導（9 教科） ２８日　香中英若年研指導（増田）	2名 1名 1名 1名 10名 1名
10	２５日　愛知県安城市立中学校 4 校から、本校研究についての視察	4名	１０日　東部中校内研指導（山城） １７日　香中美若年研指導（明出・伊賀） １８日　仲善中研指導（山城） ２３日　香中美若年研指導（渡辺） 香中国若年研指導（大西さ・田村） 12・23 日　香中理若年研指導（渡辺・山下） ３０日　香中数若年研指導（渡辺）	1名 2名 1名 1名 2名 2名 1名

	平成２８年度	平成２９年度	平成３０年度 10月22日
視察研修来校者	１４件（３２名）	２２件（８３名）	２件（１２名）
要請指導訪問等	２３名	２５名	４１名

※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

<エントリーシート> ※ 事 務 局 記 入 欄 No.： A－38	部門 １．研修成果活用部門 平成 29 年度 学校教育の情報化指導者養成研修	学校名・氏名 金沢大学教職大学院 学校マネジメントコース 野々市市立野々市中学校　中島　卓二
	活動名 なりきり地域連携担当教員 ～教育 ICT と SDGs を切り口に～	

課題の設定：

石川県野々市市は、１５年前より市ぐるみで小・中学生に携帯電話を「持たせない」市民運動を継続している。しかし昨今のデジタル・モバイルツールの普及や、Society5.0 実現に向けての国家戦略に伴う教育の情報化・ICT 活用に向けて、これまで情報スキル指導が入り込む余地がなく、一貫してモラル指導だけを実施している中学校現場からは、見直しを望む声【資１】も上がっている。自らが「地域連携担当教員」になりきり、これまでの不所持運動を推進してきた組織横断的な連携会議体である、“ののいちっ子を育てる”市民会議の事務局長と協働し、教育 ICT と SDGs の２つを軸に、本市だからこそ持続可能な「地域学校協働活動」の素地をつくる。

方針・計画：

H29 年度の内地留学を機に、教育 ICT 活用の研究会や学会、企業展や研修に積極的に参加。
（１）市民会議オブザーバー及びアドバイザー委嘱を受け、企画立案に参画開始。【資２】
（２）国による第三者的評価と、市行政の巻き込みを期待して、内閣府「RESAS2017 政策コンテスト」へ施策ビジョン【資３】をアイデアとして応募。
（３）「第８回子どものケータイ利用を考える全国会議」の分科会において、上記の施策ビジョン提案を、市行政関係者にプレゼン実施。【資４】
（４）イマココラボ社より「2030SDGs カードゲーム」ファシリテーターとして認定。【資６】
H30 年度に学校現場に復帰し、教育 ICT と SDGs を軸として、学校と地域を結ぶ役割を担う。

活動内容：

①石川県小松市・金沢市・加賀市・野々市市で計４回の SDGs ワークショップを開催。【資７】
②勤務校内における、積極的な ICT 機器の導入や授業での活用実践。
③内閣府「RESAS2018 政策コンテスト」へのプロジェクトチーム結成と生徒作品応募。【資８】
④SDGs を推進する金沢工業大学との協働による「中１生対象・ネット対策講座」の実施。【資９】

活動の成果：

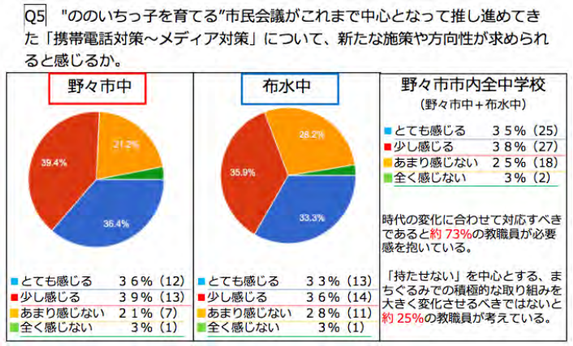
・市長、市教育長、市教委学校教育課長、生涯学習課長、市企画進行部企画課長ら１６名が参加した分科会では、参加者全員が提示プランに対し「必要性を感じる」とアンケート回答。【資５】
・加賀市・野々市市で実施した SDGs ワークショップにおいて、市民協働の目線からも「地域連携担当教職員」の配置を望む声は多い。【資７下グラフ】
・12/8（土）市民会議主催の「青少年問題研修会」で、日本デジタル教科書学会会長・富山大学教職大学院 長谷川春夫准教授を招聘し、地域初「プログラミング教育」推進内容の講演が決定。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・「2030SDGs 認定ファシリテーター」として、学校と地域（行政・大学・企業・NPO 等）を効果的につなぐ、市内で唯一無二の人的資源として機能する役割を果たせている。
・「小・中学生に携帯電話を持たせない市民運動」の“聖地”とされる地域において、教育の情報化のロードマップ作りと移行フェーズの落とし込みに成功している。
・文科省が設置推進する「地域連携担当教職員」の、県内プロトモデルとして推進できている。

＜写真、図表添付欄＞

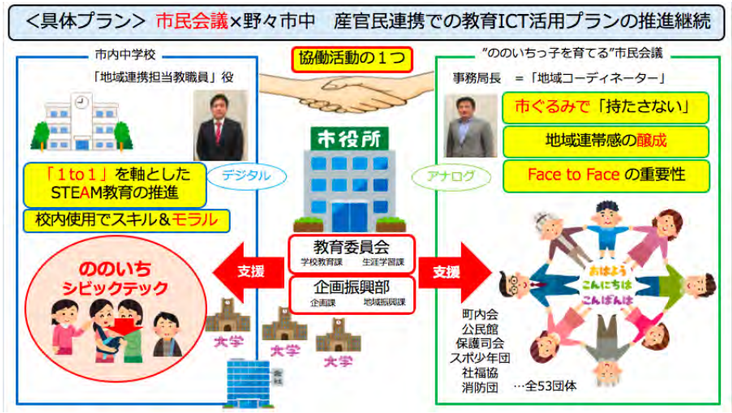
【資１】



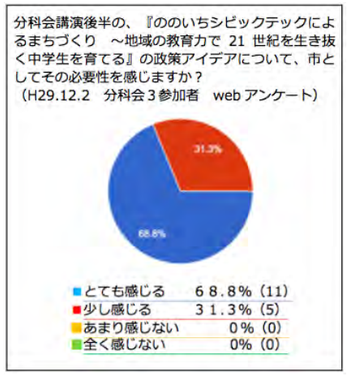
【資２】

【資４】

【資３】



【資５】

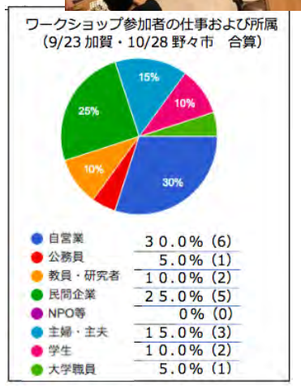


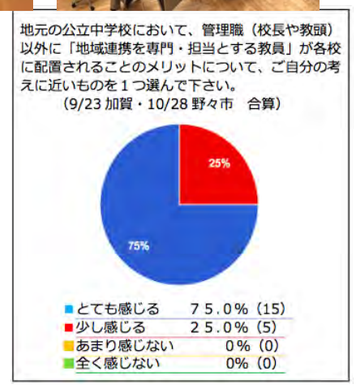
【資６】

【資７】

【資８】

【図９】





<エントリーシート>	部門 研修成果活用部門 （修了研修名：平成２９年度 第２回中堅教員研修）	学校名・氏名 鹿児島県鹿屋市立西原小学校 教諭　前田　剛
No.：A-39	活動名 算数科における３つの学び ～協働で考える授業研究の在り方～	

課題の設定：

算数科における主体的・対話的で深い学びについて，具体的な子供の姿を通して他校の先生方と話し合いながら研修を深めたいと考えた。学習指導要領から見える子供の姿を授業レベルで見たときにどうあるべきか授業視聴を通して考えようと思った。また，中央研修で学んだことを自校だけでなく他校へも伝えるとともに，他校の先生方とのネットワークを広げる機会にもなると考えた。

方針・計画：

（１）算数科における主体的・対話的で深い学びについて基本的な考え方を理解する。
（２）モデル授業の改善点を考えることを通して，授業に対する具体的なイメージを持つ。
（３）ワールドカフェ方式による授業研究を通して，協働で授業改善を行う。

活動内容：

（１）算数科における主体的・対話的で深い学び
　算数科における主体的・対話的で深い学びについて，学習指導要領から具体的な子供の姿について考えた。
（２）授業（ビデオ映像）視聴の視点
　算数科における主体的・対話的で深い学びの視点に基づいて，実際の授業で工夫したことについて説明を行った。【図１～１２】その後，授業視聴の視点（主体的な学び，対話的な学び，深い学び）を説明し，視聴しながら付箋に気付いたことを記入してもらった。【写真１】
（３）ワールドカフェ方式による授業研究及び授業改善の話し合い
　参加者を ４ 人グループの５班に分け，授業視聴 ３ つの視点に基づいて授業研究を行った。話し合う際は，Ｙチャート【写真４】を用いて気づいたことを書いた付箋を模造紙に貼っていった。【写真２】貼ったものをグルーピングし，それぞれについて小見出しを付け，授業の内容についてより理解を深めるようにした。その後，ファシリテーターを残し，そのほかのメンバーは他のグループへ行き，他グループの話合いの様子をファシリテーターから聞いた。【写真３】その聞いたことを再度元のグループに持ち寄り，授業改善について話し合った。

活動の成果：

研修後のアンケートで以下のような感想をいただいた。（アンケートの数値結果は【表１】参照）
○　実際に映像を見られたことで，子供たちの様子や教師の発問などよく分かりました。のびのびの子たちへたくさんの手立てがあり，勉強になりました。ありがとうございました。
○　先生方と話し合う視点が明確だったので，話が盛り上がりました。
○　Ｙ チャートを初めて使い授業分析したため，こういう方法があるのだと思いました。発問中心の授業展開で，子供たちが主体的に発言していたので，こういう授業を目指して頑張りたいなと思いました。
算数科における主体的・対話的で深い学びの子供の具体的な姿が見え，他校の先生方と協働で学ぶことができたのではないかと思う。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

○　市内の先生方と授業を通して研修することで，学校の枠を超えて授業についてじっくり語り合うことができた。学校の枠を超えたネットワークをつくることもできたと思う。
○　各グループ３～４名の小グループで話合いを行うことで，参加者全員が主体的に参加することができた。
○　授業のポイント（導入・一人調べ・グループ学習・まとめ）を絞ってビデオ編集（２０分程度）を行ったことで，短時間で授業視聴をし，授業研究の時間を十分にとることができた。

図１【主体的な学びのための工夫】

図２【主体的工夫①】

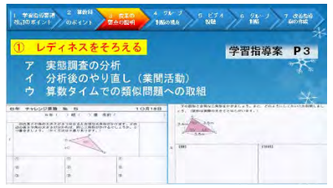


図３【主体的工夫②】

図４【主体的工夫③】

図５【主体的工夫④】

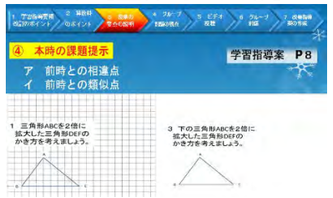


図６【対話的な学びのための工夫】

図７【対話的工夫①】

図８【対話的工夫②】

図９【深い学びのための工夫】

図１０【深い学び工夫①】

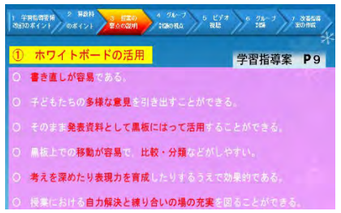


図１１【深い学び工夫②】

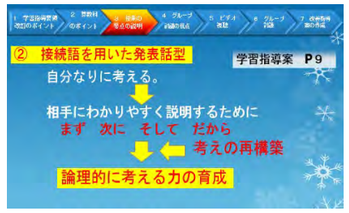


図１２【深い学び工夫②】

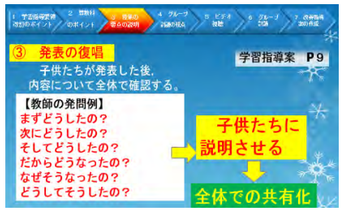


写真１【付箋記入の様子】

写真２【Ｙチャートを用いた話合い】

写真３【他グループでの説明】

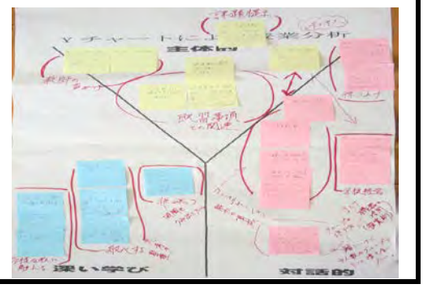
表１【研究会アンケート結果】

学ＮＡＶＩ会

第５回研究会アンケート

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	平均
研修内容	1	講話	3	4	4	4	3	4	4	3	4	3	4	3	4		4	4	4	4	4	3.72222
	2	授業についての説明・ビデオ視聴	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3.94737
	3	ワールドカフェ方式の授業研究	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	3	4	3.84211
	4	他校の先生方との交流	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	3	3	3.78947
	5	実践に生かせそうか	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4		4	3	4		3.88889

写真４【作成したＹチャート】



※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真１）（表１）などと文中に記載し、右ページに（写真１）（表１）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

＜エントリーシート＞ ※ 事 務 局 記 入 欄 **No.：A-40**	部門 平成 30 年度教職員等中央研修 （第１回副校長・教頭等研修）	学校名・氏名 宮代町立須賀小学校・白石昌孝
	活動名 安心・安全な学校づくり 教職員意識改革と家庭地域との連携	

課題の設定：

若い年代の教職員が年々増加し、世代交代が加速している状況の中、様々な教職員に関する不祥事が起こっている。このことは、教育への信頼を揺るがしかねない大きな問題である。若手、ベテランに関わらず、教職員の幅広い危機管理意識を向上させること、また学校・家庭・地域との連携を図ることで、安心・安全な学校づくりができると考え、本課題を設定した。

方針・計画：

・教職員倫理確立委員会、服務研修会等の内容を工夫することにより、教職員の危機管理意識が高まり、子供のより安心・安全な学校生活が図られるであろう。
・学校家庭地域の連携が深めるための取組を充実させることにより、家庭地域からの信頼が高まり、学校家庭地域が一体となった安心安全な学校づくりが図られるであろう。

活動内容：

・教職員倫理確立委員会及び服務研修において、様々な教職員事故事例等からどこに危機管理意識をもつ必要があるのか、考えさせる機会を設ける。また、自分のこととして考えられるよう、意識調査をもとに自己の注意ポイントを考えさせる。（図１～４）
・学校応援団会議、学校安全パトロール会議等を年間に計画的に実施し、内容の充実と縦・横のつながりを密にする。（写真２～３）

活動の成果：

・危機管理意識を高めるため、イラストや事例を挙げて考え、話し合うことにより、こんな所にも気をつけなければならないという教職員一人一人の視点が広がった。（図１～２）
・チェックリスト等を活用することにより、自己の気をつけなければならない重点が明確になった。また、標語等を各自作成することにより、より高い危機管理意識の醸成が図れた。（図３～４）
・学校安全パトロール会議を実施し話し合いを行ったことにより、登下校等の課題点が明確になり具体的な改善策を共有できた。また、自治会長等の協力を得ることもでき、地域の安全パトロール体制の強化が図れた。
・学校応援団会議を実施し、活動内容や子供の状況、課題等を話し合ったことにより、学習支援・図書・安全パトロール・環境整備等の組織間の横の連携が図れた。また、各ボランティアを増やすよいきっかけとなった。（学校応援団ボランティア　約２９９名）（図５、写真２～４）

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・「危機管理意識」について、視点を広げる、高める取組後、実際の通学路で危険箇所点検を行ったこと（写真１）
・教職員一人一人の状況に応じた事故防止の視点を標語等にし、掲示したこと（図４）
・安全パトロールにおいて、自治会長をはじめとしてそれぞれの地区の担当者との連携を密にしたこと
・学校応援団において、組織体制と年間活動計画を明確にしたこと（図５）
・学校応援団の活動を学校便り、ホームページ、パネル等で紹介したこと（写真４）

図１「危機管理意識の視点を広げる」

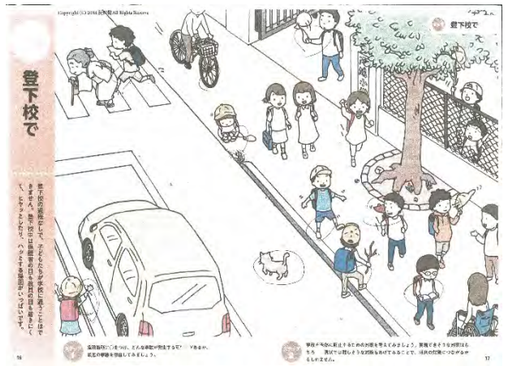


図２「危機管理意識を高める」

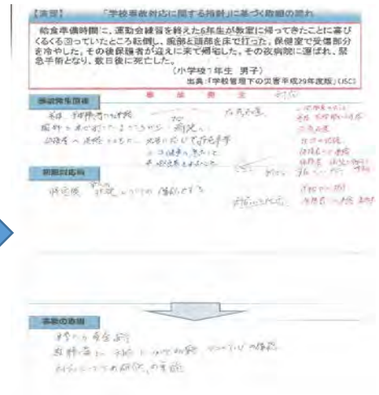


図３「自己チェック」

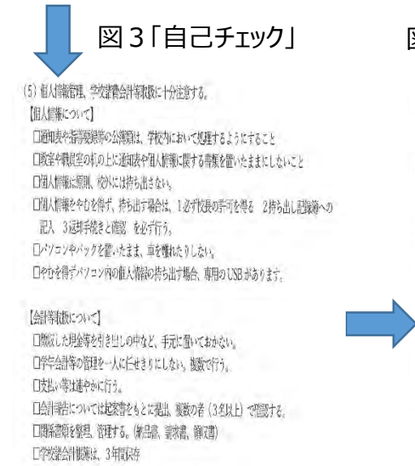


図４「倫理確立意識の強化」

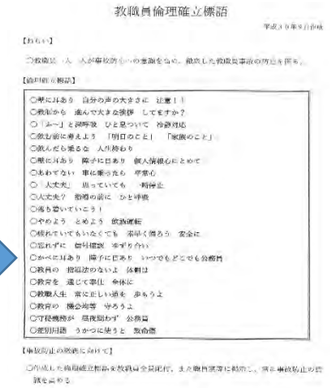


写真１「危機管理の実際」

図５「学校応援団組織図」

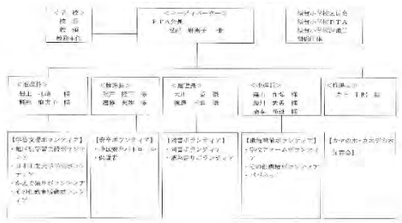


写真２「安全パトロール会議」

写真３「学校応援団の活動」

写真４
「学校応援団の取組紹介」